
デジモンテイマーズ×セイバーズ

R y o t a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンテイマーズ×セイバーズ

【Nコード】

N5797N

【作者名】

Ryota

【あらすじ】

デ・リーパー消滅から約1年が経とうとしている……。タカトたちテイマーは中学1年生……。そして彼らに、新たな出会いと再会が……。

第1章 新たな再会

デ・リーパー消滅から約1年が経とうとしている。

まつただかと
松田啓人は、中学一年。

入学してから、1週間がたっていた。

朝、学校へ行き、教室の戸を開ける。

「あ、おはよう。タカト！」

と、声をかけてきたのは、同じティマー（だった）の李リ・ジェンリヤ健良

「おはよう。ジェン！」

タカトも声をかけた。

「ねえ、知っている？ 今日、僕達のクラスに転校生が来るんだって
！」

「え？ ホント？」

「うん。」

そんな会話をしながら席につく。

「「タカトおはよう！！」」

と声をかけてきたのは、同じティマー（だった）の塩田博和と

きたがわけんた
北川健太

彼らは、偶然にも同じクラスで同じ班だ。

「今日、転校生が来るんだって？」

とタカトが聞いた。

「そうみたいだね」

ガラッ

戸が開き担任の広川祐二先生が入ってきた。

「席につけ」

「HRをはじめるぞ」

「その前に転校生を紹介するぞ。入っただい」

ガラッ

戸が開き一人の女の子が入ってきた。

4人は、その子を知っていた。

「ルキッ！！」

面白いほど4人の声が重なった。

「なんだ、松田たちは知っているのか。ほら、自己紹介を」

「松野瑠姫まつのるぎです。よろしく・・・」

「よし、松野の席は、松田の後ろの席だ」

ルキは席に移動した。

「よし、HRを始めるぞ」

朝のHRが終了。

第1章 新たな再会（後書き）

今回は、ティマーズオンリーで書かせていただきました！

短くて、すみません・・・

次は、もうちょい長くなるかも！？

残念ながら、デジモンが出ませんでした！

今回は、デジモンを出したいな～と思っています。

セイバーズは、もしかしたらその次になるかも知れません！

第2章 感動の再会

キンコーカンコーコン

HR終了のチャイムが鳴った。

「ねえ、ルキ。なんで転校してきたの？」

タカトはルキに聞いた。

「理由はないけど……。ただ、みんなに会いたかっただけ……。」

「新宿中央公園にも近いし……。」

とルキは答えた。

「……ふん」「」

4人は、口を揃えて言った。

「なによ！4人で。気色悪い……。」

とルキが言った。

キンコーカンコーコン

授業開始のチャイムが鳴った。

放課後・・・

「北川と塩田はこの後残れ」

「え〜。また〜」

ケンタとヒロカズはうなった。

「では、気をつけて帰るように、さようなら」

3人は、帰る支度を始めた。

「ねえ、今日、久しぶりに山木さんに会いに行かない？」

とタカトが提案した。

「いいね。確かまた、ネットワーク管理局に戻ったんだってね」

とジェンも言った。

「じゃ、行こうか！」

「うん!!」

「ここだよね・・・」

とタカトが自信なさげに言った。

「たぶん……」

とルキもそう言った。

「結構、外見が変わったね……」

とジェン。

東京都庁は以前と外見が変わっていた。

「行こうか」

3人は中へ入っていった。

受付で山木さんはいないか聞いたところいつもの部屋にいるらしい・
・

ウィーン

自動扉が開いて3人は中へ入った。

「お、久しぶりだね。」

サングラスを掛けた男の人が声を掛けてきた。

彼は山木満雄やまきみつおといい、情報管理局の室長だ。

「「「お久しぶりです」」」

と3人は言った。

「中は、変わっていないですね」

とジェンが言った。

「ああ、デ・リーパーの事件の後、改装したんだ」

と山木は答えた。

「ねえ、今もデジモンの監視をしているの？」

とルキが尋ねた。

「いや、監視ではないな。リアルワールドの境界を見ているんだ。まあ、監視かな？」

と山木が答えた。

そのときだった。

「Y L D - 1 検知しました！」

「何だつて！まさか！？」

「その数、10体！！」

「まさか、ギルモンたち？」

とタカトが聞いた。

「場所は何？」

と山木が聞いた。

「YLD-1、新宿中央公園にリアライズします！」

「ジェン、ルキ、行ってみよう！！」

「うん」

3人は、部屋を出て行った。

「リアライズします！」

―新宿中央公園

ボワッ

霧のようなものが発生した。

「着いた〜」

赤い恐竜の様な者が動いた。

「ギ、ギルモン！！」

タカトが叫んだ！

「あつ、タカト〜」

とギルモンが言った。

「テ、テイリアモン！」

ジェンが叫んだ。

「あ、ジェ〜ンだ！ヤッホー！」

「レナモン！」

「ルキ！」

3人は、デジモン達に再会したのだった。

「けっ、感動の再会かどうか知らね〜けど、俺たちのことも忘れるなよ！」

紫色のデジモンが言った。

「『インプモン』」

その後から、

ガードロモン、マリエンジェモン、ロップモン、クルモンが来た。

「あれ？モノドラモンは？」

「ああ、彼なら、リヨウの所へ一足先に行ったよ！」

とレナモンが言った。

「じゃ、オレらはみんなの所へ行こうぜ！」

それぞれのデジモンがパートナーの所へ帰って行った。

「ねえ、ギルモン。どうやって、ここまで来たの？」

とタカトが聞いた。

「うーん。ギルモンわかんない。いつの間にかリアルワールドに飛ばされたの」

とギルモンが答えた。

「ふーん」

「ねえ、タカト、ギルモンお腹すいた。パン食べたい！」

「アハハ、じゃ行こうか！」

そのときだった。

「うわあ、落ちる」

と、どこから声が聞こえてきたかと思うと、木の上に人が4人落ち

てきた？

タイマー、3人はポカンと見ていた。

第2章 感動の再会（後書き）

今回は、長すぎたかな？と思います。

デジモンに再会！

最後の声の正体を次回明かします。

タブン、わかりますよね？

第3章 復活ケンカ番長大門大

「アニキ」

アグモンが走って来た。

アグモン

世代：成長期

タイプ：恐竜型

種：ワクチン

必殺技：ベビーフレイム

「どうした、アグモン」

だもんまざる
大門大はそう言った。

「アニキ。どうも、次元の壁が開くらしいよ」

とアグモンが言った。

「ホントか！これで帰れるか・・・」

「で、どこに行けばいいんだ？」

プププ

「え、何で通信が？はい」

『あ、大？聞こえている？』

それは聞き覚えのある声だった。

「ヨシノか？久しぶり！」

それは、同じDATSの仲間だった。

『大、いい1回しか言わないからしっかり聞いて。次元の壁が開くのは1回切り。』

『それを逃したら、次は無いわ！これから、転送場所の座標を送るから2時間後にそこに来てね』

「りよ、了解！」

プツ

「よし、アグモン行くぞ！」

マサルは、走り出した。

「あ。待つてよーアニキー！」

リアルワールド
現実世界

「さあて、また、やかましいのが帰って来るわよ！」

「ヨシノ、デジモンも一緒に連れてこいと言ったか？」

「えっ！あゝ。忘れてた。タブン、連れてくるよ！きっと」

「だいいんだが・・・」

トーマ・H・ノルシュタインと藤枝ヨシノがそう話した。

デジタルワールド

「アグモン！みんな、連れてきたか？」

「アニキゝ。大丈夫ゝ！」

「よし、みんな行くぞ！」

「Yes！」

「行くわよゝ」

「あ、待ってよ、マサルゝ」

「やれやれ」

ガオモン

世代：成長期

タイプ：獣型

種：データ

必殺技：ローリングアッパー

ララモン

世代：成長期

タイプ：植物型

種：データ

必殺技：ナッツシュート

ファルコモン

世代：成長期

タイプ：鳥型

種：ワクチン

必殺技：手裏裏剣シュリリンケン

クダモン

世代：成長期

タイプ：聖獣型

種：ワクチン

必殺技：弾丸旋風だんがんせんふう

「ここだ！」

「アニキ！ここから現実世界へ行けるの？」

「ああ、多分」

「アニキ、帰ったら、サユリの玉子焼き食べれるかな？」

「ああ、食べれるさ！」

ププププ

「お！はい、マサル！」

『あ、マサル？みんな居る？』

「ああ、居るぜ！」

『ちょうど、時間になるわ。今から、ゲートが開くから、そこに飛び込んでね！』

『チャンスは、30秒よ！』

「了解！！」

マサルは答えた。

ブワーン

デジタルゲートが開いた。

「みんな、行くぞ！！」

マサルから順に、ゲートへ入っていった。

リアルワールド
現実世界

「隊長！大変です！マサル達の転送場所が変わってしまいました！」

「なんだと！場所は？」

「場所の座標を出します」

「よし、トーマとヨシノはそこへマサル達の回収に向かってくれ！」

「了解！！」

「うわぁ〜」

ドンッ、ドカツ、ズシ・・・

「いてて・・・。オイ、お前ら、オレから降りろよ！」

「あ、すまない」

「あれ？ここどこだ？」

「いたいた！マサル〜！」

「あつ、ヨシノとトーマ！！それに、イクト！久しぶりだな！」

「マスター！」

「ヨシノ〜！」

「イクト」

「わたしは、先に薩摩の所へ行っている！」

そう言うときダモンは先に行ってしまった。

「よし、俺たちも行くか！」

そう、マサルが言った。

デジモンをデジヴァイスに入れたとたん、

ブワーン

「え？」

今までに見たことの無いゲートが開き、彼らを吸い込んだ。

「うわぁぁぁ！」

第3章 復活ケン力番長大門大（後書き）

セイバーズの世界を書きました！

また、長かった。

次回は、ティマーズの世界で大達が大暴れ！？

の予定です！！

第4章 襲撃カラテンモン

「うわぁ〜」

ドサッ

「イテテテ・・・」

「な、何だ？」

ティマーズ達は見上げていた。

メキッ

嫌な音がしたかと思うと

「うわぁ〜」

ドサッ、ズシッ

「イテテテテ」

「大丈夫ですか？」

とタカトが聞く。

「ああ、なんとか・・・」

とマサルが答える。

「ねえ、タカト。何で空から降ってきたんだろっ?」

とギルモンが聞く?

「さあ?」

とタカトが聞く。

「イテテテ」

マサルが立ち上がった。

「え? デジモン?」

とマサルが言った。

「なんで、一般人がデジモンを・・・」

とトーマが言った。

「あゝ。あなたたちはどこから?」

とジェンが聞いた。

「え? どこからって。それは・・・。て、どこどこ?」

とヨシノが言った。

「ここは、新宿中央公園ですけど・・・」

とタカトが答えた。

『アニキ。ここもしかしたら、別世界かもしれないよ』

とアグモンが言った。

「何だって!!」

とマサルが言った。

ピ。ピ。ピ。ピ。

「あ、山木さんからだ。もしもし」

『あ、タカト君か？大変なことになった！そこに、デジモンが複数、リアライズする!』

「え？本当ですか」

『ああ。君たちで止めてくれ！我々は、原因を探るから!』

「わ、わかりました!」

「タカト？どうしたの?」

とルキが聞いてきた。

「大変だ。複数のデジモンがリアライズしてくるって!」

「『『『何だって!!』』』」

ボワン

「な、なんだこれは？」

とマサルが言った。

「タカト、くる！」

とギルモンが言った。

バッシュ

「クワ」

「あ、アレは！」

「カラテンモン、魔人型デジモン、完全体、ウィルス種、必殺技は
しょうげきは
衝撃羽！」

とジェンがデジヴァイスのディスプレイに映し出されているのを読んだ。

「かなりの量だ！」

「アグモン、リアライズ！」

「ガオモン、リアライズ！」

「ララモン、リアライズ！」

「ファルコモン、リアライズ！」

「いっくぞー！」

「イエス、マスター！」

「ラ〜ラ〜モン！」

「ファルコモン！」

マサル達はデジモンを出した。

「うお〜！」

マサルはうなりながら走り、カラテンモンを殴った。

バキッ

「クワ〜」

シュルルル〜

「行くぞー！アグモン！」

「デジソウルチャージ、オーバードライブ」

「アグモン、進化！」

アグモンのデータはがれ、新たなデータが上書きされていく。

「シャイングレイモン！」

「し、進化した！」

とジェンが言った。

「シャイングレイモン、光竜型デジモン、究極体、ワクチン種、必殺技はグロリアスバースト」

とタカトが読み上げた。

「僕たちも、行こう！」

MATRIX EVOLUTION

「ギルモン、進化〜！」

タカトとギルモンが融合して、データが上書きされていく。

「デュークモン！」

「テリアモン、進化！」

ジェンとテリアモンが融合して、データが上書きされていく。

「セントガルゴモン！」

「レナモン！進化！」

ルキとレナモンが融合して、データが上書きされていく。

「サクヤモン！」

「な、デジモンと人間が融合した！！！」

とトーマが驚いた。

「悪しき者よ。このデュークモンの聖なる剣を受けよ！」

「ロイヤルセイバー！」

「ぐはー！」

「バーストショット！」

「ぎゃー！」

「俺たちも行くぞ！」

「『デジソウルチャージ、オーバードライブ！』」

「ガオモン、進化！」

「ミラージュガオガモン！」

「ララモン、進化！」

「ローゼモン！」

「ファルコモン、進化！」

「レイヴモン！」

ミラージユガオガモン

世代：究極体

タイプ：獣騎士型

種：データ

必殺技：ダブルクレセントミラージユ

ローゼモン

世代：究極体

タイプ：妖精型

種：データ

必殺技：ローゼスレイピア

レイヴモン

世代：究極体

タイプ：サイボーグ型

種：ワクチン

必殺技：天之尾羽張あめのおはばり

「『行くぞ！』」

第4章 襲撃カラテンモン（後書き）

ティマーズとセイバーズをくっつけました！

敵デジモンはこれからどしどし、出したいと思います！

なお、タカト達が、デジモン情報を読み上げたり、図鑑タイプの2種類で

情報を書きたいと思います！

次回もお楽しみに！！

第5章 究極体の限界

「くそっ！カラテンモンの数が多すぎる！」

とデュークモンが言った。

「ロイヤルセイバー！！」

「バーストショット！！」

デュークモンとセントガルゴモンが攻撃を放った。

「はぁ、はぁ」

「なんか、体が・・・」

とサクヤモンが言った。

「グロリアスバースト！！」

シャイングレイモンが攻撃を放った。

シュワーン

「くくえっ！？」「くく」

3体の究極体が解けた。

ドサッ

「タカト」

「ジエン」。しっかりしてよ」

「ルキツ」

「「「はあ、はあ」」」

3人は、疲れ切っている。

「ま、まさか、久しぶりの究極体だから、体が持たないのでは・・・」

とレナモンが言った。

「おい！大丈夫か？」

とマサルが駆けつけた。

カラテンモンの数も次第に減ってきた。

「ローゼスレイピア！」

「レイブクローー！！」

「グハ~~~~」

カラテンモンは、すべて消滅した。

「な、なんで。デジタマに戻らないんだ？」

とトーマが聞いた。

「この世界では、デジモンに死が存在するのだ」

レナモンが答えた。

「ところで、そこの3人は大丈夫？」

とヨシノが聞いてきた。

「な、なんとか・・・」

とタカトが弱々しく言った。

「あ、タカト。大丈夫？」

「う、うん」

とタカトが言った。

「でも、どうして・・・？」

とジェンが言った。

「恐らく、久しぶりの融合で体が持たなかったのだらう」

とレナモンが言った。

「じゃ、どうすれば・・・」

とルキ

「と言うことはしばらく、完全体で戦えってこと」

とテリアモンが聞いてきた。

「そうなるだろう・・・」

とレナモン

「モ〜マンタ〜イ！完全体でも大丈夫だよ」

とテリアモン

「ねえ、ギルモン、お腹すいた〜！パン食べたい〜」

とギルモンが言った。

「アハハハハハ。とりあえず、今日はもう遅いし明日、山木さんに相談しようよ！」

とタカトが提案した。

「そうね」

とルキが言った。

「じゃ、明日〜！〜！」

3人はと3体は自分の家に帰っていった。

「あ、あのさ。俺たち忘れられているね」

とマサルが言った。

「ああ、そうみたいだ・・・」

とトーマが答えた。

「も、もしかして今日は野宿??」

とマサルが聞いた。

「ああ、そうなるだろう・・・」

とトーマが答えた。

「最悪なんですけど」

とヨシノが言った。

「アニキ、腹減った」

とアグモンが言った。

「よし、コンビニ行ってなんか買ってくるか!」

とマサルが言った。

「あ、マサル、ぼくにも!」

「わたしの何か買ってきて」

とトーマとヨシノが言った。

「OK!!」

マサルは走っていった。

次回こそは、活躍するぞと3人は意気込んでいた・・・

第5章 究極体の限界（後書き）

なんか、セイバーズの出番が少なくてすみません・・・

最後にも言っているように次回は活躍するかな～と思っていますが、
ティマ

ーズオンリーになりそうな予感がします。

戦闘シーンが上手く書けなくてすみません・・・

第6章 新たなデジモン登場！？ その名はドラコモン

デジタルワールド

「はぁ、はぁ・・・」

「見えた！出口だ！！」

それは、緑色の体をしたデジモンだ。

そして、赤い角が頭に生えている。

赤い小さい翼もついている。

どうやら、追っ手に追われているらしい。

「逃がすな！！必ず捕まえろ！！」

それをカラテンモンが数体追っていた。

「リアルワールドに出させるな！！」

「ベビープレス！」

口から火を吹いた。

「くそ！成長期のくせに！」

「も、もうすぐだ」

「くそっ！出させるな〜！」

シューン

緑色をしたデジモンはリアルワールドへと逃げていった。

「くそっ！〜！」

リアルワールド
現実世界

「「ただいま〜」」

タカトとギルモンは家に着いた。

「あ、おかえり〜」

とタカトのお母さんが言った。

「あ〜！」

「ギルモンじゃない！おかえり！」

「あ、タカトのお母さん、ただいま〜」

「おーギルモン！おかえり〜ギルモンパンもあるぞ〜！」

とタカトのお父さんが言った。

ギルモンパンとは、ヒロカズとケンタが頼んだパンで、ギルモンの好物の一つだ。

「わぁーい！ギルモンパンー！」

「「アハハハハ」」

タカト一家は笑っていた。

「ただいま」

ルキとレナモンが家に着いた。

「あ、ルキちゃん、おかえり！」

早速、出迎えてくれたのはルキのお母さんだ。

「おや、ルキ、そこに誰がいるのかい？」

とルキのお婆ちゃんが言った。

「ほら、隠れてないで！」

とルキが物陰に言った。

そこから小さい声が聞こえてきた。

「し、しかしルキ・・・」

「なによ！ここまで来て！」

「わ、わかった・・・」

物陰からレナモンが出てきた。

「まあ！」

「ご無沙汰しておりました」

とレナモンが言った。

「レナモンさん、おかえりなさい」

「それじゃ、今夜は4人分を用意しないと」

とルキのおばちゃんは張り切っていた。

「い、いや。おかまいなく・・・」

とレナモンが言った。

「なにを言っているの！我が家の家族が久しぶりの帰ってきたのだから。遠慮しなさいよ」

とルキのお母さんが言った。

「は、はあ・・・」

「さあ、そうと決まれば今夜はご馳走よ！！」

「「ただいま」」

ジェンとテリアモンが家に着いた。

「あ、ジェン兄ちゃんお帰りなさい！」

と迎えてくれたのは、ジェンの妹のシュウチョウ小春だ。

「あんな、今日、ロップモンが帰ってきたの」

ほら、と言いながら、ロップモンをつきだした。

ロップモンは、シュウチョウに着せ替え人形にされていて涙目だ。

「あ、はははは」

とジェンが苦笑した。

「シュウチョウ、ただいま」

とジェンの頭の上のテリアモンが言った。

「あーテリアモン！！おかえりなさい！」

とシュウチヨウが言った。

「今日は、デジモン達がみんな帰って来たんだよ！」
とジエンが教えてあげた。

「ふうん」

とシュウチヨウ

「ねえ、シュウチヨウ、お父さん帰っている？」

とジエンが尋ねた。

「ううん。まだ」

とシュウチヨウが答えた。

「そっか！」

ジエン達も、デジモン達の帰りを喜んでいた。

一方、その頃・・・

バシュッ

「ここが、リアルワールド・・・」

緑色のしたデジモンが言った。

その姿は霧でよく見えないが、次第にその姿が見えてきた。

「追っ手も、これ以上、追ってこないだろう！」

とそのデジモンは言った。

ドラコモン

世代：成長期

タイプ：竜型

種：データ

必殺技：ベビーブレス

「さあてと、パートナーでも探すか！」

「強くなるには、人間に味方をしろ、か・・・」

「お！オレを引きつけている。何かが・・・」

「行ってみるか！」

ドラコモンは、真っ暗闇の公園を走り出した。

「おい！また俺たち、活躍できなかったじゃないか！」

とマサルがツツコミを入れた。

第6章 新たなデジモン登場！？ その名はドラコモン（後書き）

どうも！！

今回は、新デジモン登場です！

これは、このシリーズ開始から考えていたデジモンです！

ようやく登場させることができました！！

すみません……。セイバーズの方々、また登場なしです……

次回こそは、と思っています……

セイバーズファンのかた、すみません……

第7章 君がぼくのパートナー！リュウタ登場

「くそっ！何で勝てないんだよ！」

少年は、自分の部屋で唸っていた。

彼は、デジモンのカードゲームで負けっぱなしだった。

「デッキでも作り替えるか！」

少年はカードの入った。ボックスを引っ張り出し、中身をすべて出した。

「あれ？こんなカード、持っていたっけ？」

少年は、1枚のブルーカードを見つけた。

少年は、カードリーダーに通してみた。

カードリーダーが光った。

「うわぁ！」

カードリーダーは形を変え、デジヴァイスとなった。

「こ、これは・・・」

少年は手に取って見てみた。

「うん？何かがこっちにやってくる！？」

デジヴァイスが反応している。

「な、なんだ！」

バチーン

「イッテ」

窓の外から声がした。

「な、なんだ。トラップか！」

「だ、誰？」

少年はおそるおそる声を掛けた。

「開けてくれ！」

少年は窓を開けた。

「ぷはあゝ！」

外からドラゴンのような奴が現れた。

「き、君は？」

と少年は聞いた。

「オレは、ドラコモン！デジタルワールドからやってきた！」

とドラコモンと名乗るデジモンそう言った。

「で、デジモン！？」

少年は驚いた。

「ぼくは、かみやまりゆうた神山龍太」

と少年、いやリュウタはそう言った。

「何で君はここに來たの？」

とリュウタは聞いた。

「よくぞ聞いてくれた！オレはリアルワールドにパートナーとなる人間を探しに來た」

とドラコモンは得意げに言った。

「そ、それで・・・？」

とリュウタは聞いた。

「そしてここに、呼びよせられたのさっ！」

「ふうん」

「ふうんって、なんだよー！リュウタ。だってオレたちもうパ

「トナーだろう!」

「え?何で?」

「何でって・・・。そのデジヴァイスが証拠さ!それでオレをここに呼び寄せられた」

「で、でも・・・」

「他にも、リアルワールドにデジモンは来ている。そしてそのデジモン達のパートナーだっている」

「そうなの?」

「ああ!リュウター!オレを強く進化させてくれ!オレと組んでくれ!」

「わ、分かったよ!」

「よっしゃー!!」

「早速、明日はこの世界に来ている他のデジモンを探そうぜ!」

「う、うん・・・。よろしく、ドラコモン!」

「よろしく、リュウター!」

二人は、手を握りあった。

次の日・・・

「タカト」。遅刻するわよ」

「や、ヤバ〜イ!!! ってきます!!!」

タカトはダッシュで家を出て行った。

「タカト! 遅いよ!」

「ご、ごめん!」

ジエンとルキが待っていた。

「じゃ、行こう!」

「タカト!」

マサルが声を掛けてきた。

「どうしたの?」

とタカトが聞いた。

「山木さんが、お前らが学校行っている間は、俺たちDATSがデジモンの相手をするから!」

「学校が終わったら、山木さんの所へ来てくれ！そこで交代するから！」

とマサルが言った。

「あ、分かった！あと、ギルモン達も見といてくれる？」

「ああ、良いぜ！任しておけ！」

「うん！じゃ！またあとで！」

そう言うとマサルは走っていった。

「タカト。マサルは何だった？」

とルキが聞いてきた。

「えっと、マサル達が昼間はデジモンを倒したりするって！」

「ふう〜ん！そう」

キンコーンカーンコーン

「ヤバッ！今度こそ遅刻だ！急げ！」

タカト達は、走って学校の正門をくぐった。

第7章 君がぼくのパートナー！リュウタ登場（後書き）

前回到引き続き、新キャラ登場です！

セイバーズはマサルしか・・・（<|>）

今回は、ドラコモンとマサル達が大暴れ！！

の予定です！

次回もお楽しみに！

第8章 ドラコモンVSレナモン

キンコーンカーンコーン

終業のチャイムが鳴った。

タカト達は、ギルモンホームへ向かった。

「ギルモン達、大丈夫かな？」

とタカトが言った。

「大丈夫だよ」

とジェンが言った。

「あと、究極体についても山木さんに聞かなきゃ！」

とタカトが言った。

「そうね！」

とルキが言った。

ギルモンホーム

「だあゝ……頼むから静かにしてくれ……!!」

「オレは、子守をしているどっかの幼稚園の先生かつ！」

とマサルが唸っていた。

「まあまあ……。仕方ないよ。アニキ」

とアゲモンが慰めた。

ワイワイワイ、ガヤガヤ

ギルモンホームは騒がしくなっていた。

「もうすぐ、タカト達が帰って来るから!!」

いっこうに静まらない。

「ギルモン〜!」

「あ!タカト〜!」

「マサル!大丈夫?結構疲れているみたいだけど……」

「ああ、大丈夫……」

「とりあえず、山木さんの所へ行こうか!」

3人は、デジモン達をつれて山木の所へ向かった。

「……。また、忘れられた〜」

「まあまあ・・・」

取り残された、マサルが唸った。

それをアグモンが慰めた。

インターネットワーク管理局

「で。タカト君。今日はどうしたんだい？」

と山木が聞いた。

「えっと。この前、デジモンと究極体になったんですけどそれが上手いかわなくて・・・」

「そこで、山木さんに相談に来たんです」

とタカトとジェンが言った。

「なんか、上手い方法はないの？」

と最後にルキが聞いた。

「そうだな・・・。君たちのデジモンとの進化が上手いかわからないのであれば・・・」

「それなら、四聖獣たちが送ってきたデータを復元してもう1度試してみることができるかも知れない」

と山木が言った。

「本当ですか？」

とジェンが言った。

「ただ、それには時間がかかる。しばらく待っていてほしい。それでもいいかね？」

「「ハイ!!」「」」

「じゃあ、これから、かかるとしよう! ワイルドパンチと連携してな」

「上手くいったら、連絡をしよう」

「お願いします!!」

3人は、お礼を言って外に出た。

「君たちだね? デジモンをパートナーにしているのは・・・」

外に出た瞬間に声を掛けられた。

「き、君は？」

「ぼくは、神山龍太。こいつはパートナーのドラコモン」

「いよう!!」

ドラコモンが気軽に言った。

「どうやら、このドラコモンは君たちと戦いたいらしい……。どうだ、相手をしてくれるか？」

とリュウタが言った。

「ふんっ！それならレナモンが相手になるわ！行くよレナモン！」

とルキが言った。

「ちょ、ちよっとルキ……」

「弧葉？！（はなは）！」

「ふん。そんな攻撃くらうかよ！ベビーブレス！」

「カードスラッシュ！」

デジヴァイスがカードを読み込んでいく。

「攻撃プラグイン・H・ハイパーアタック！」

「弧葉？！」

「カードスラッシュ！」

リュウタがカードをデジヴァイスに読み込ませた。

「高速プラグイン・H・ハイパーアクセル！」

ドラコモンのスピードが上がった。

「ベビーブレス！」

レナモンは交わした。

「こいつ、成長期なのに強い……」

とルキは言った。

「こうなったら……」

ルキは1枚のカードを出した。

「カードスラッシュ！」

デジヴァイスがカードのデータを読み込んでいく。

「超進化プラグイン・S」

〔EVOLUTION〕

「レナモン、進化……！」

レナモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

「キュゥビモン……！」

キュウビモン

世代：成熟期

タイプ：幼獣型

種：データ

必殺技：弧炎龍「こえんりゅう」

「な！進化した！」

「弧炎龍！！」

「ちっ！」

間一髪でドラコモンはよけた。

「鬼火玉！」
おにびだま

「ぐわあゝ！」

またもに、ドラコモンは攻撃を食らった。

「どうよ！」

とルキが言った。

「さすが、デ・リーパーを倒しただけあるな！」

とドラコモンが言った。

「本当は、他の二人とも戦いたいけど今は時間がない・・・」

とドラコモンが言った。

「えっ？どういうこと？」

とタカトが聞いた。

「実は、今デジタルワールドは大変なことになっている！」

「オレは、命からがら逃げ出してきたのだ・・・」

とドラコモンが言った。

「ちょ、ちょっとどういうこと？大変なことって？」

とルキが聞いた。

第8章 ドラコモンVSレナモン（後書き）

次回は、七大魔王の登場！？

の予定です！！

第9章 デジタルワールド再突入（前書き）

デジタルワールド

「ふふふ・・・」

「リアルワールド進行も着々と進んでいる・・・」

「このデジタルワールドも落ちるのも時間の限界だ・・・」

6体の影が話し合っていた。

そこへ、カラテンモンが駆け込んできた。

「先に送ったカラテンモンが全滅しました!!」

「なにっ!」

「リアルワールドにそんな力が・・・。ふふふ・・・。面白い!」

「あと、ドラコモンにも逃げられました・・・」

「馬鹿者!! 奴は我々にとって危険な存在だぞ!!」

「申し訳ありません・・・」

「くそっ! 次の手を打たなくては・・・」

6体の影は次なる策を考えだした。

第9章 デジタルワールド再突入

「デジタルワールドの危機って？」

とタカトが聞いた。

「七大魔王が動きだしたんだ・・・」

とドラコモンが言った。

「七大魔王って？」

とジェンが聞いた。

「七大魔王とは最強の魔王型デジモンの集まりだ！」

とドラコモンが言った。

「その話、本当なのかよ？」

と後ろから声がした。

「「「インプモン！！」」」

「ああ、本当だ！今、デジタルワールドは4分の1が奴らに乗っ取られている」

とドラコモンが言った。

「そいつはかなりヤベエな・・・」

とインプモンが言った。

「一つだけ言っておく・・・。オレの進化した姿、ベルゼブモンは
七大魔王の一人だ！」

「・・・な、何だって!!」

「今でも、七大魔王のデータが流れている。でも、恐らく奴らは今、
6体しか居ない。好都合だ!最強の
オレ様が居ないんだから・・・」

とインプモンは言った。

「少しは分かるの?」

とタカトが聞いた。

「いや・・・。全く分からん・・・。でも薄々感じるんだ。奴らは
怒っているって」

とインプモンが言った。

「こうなると、デジタルワールドへ行くしかないか・・・」

とジェンが言った。

「でも、どうやって?」

とルキが聞いた。

「やはり、行ってしまうのか・・・」

全員が声がした方向を見た。

「山木さん!!」

「今、デジタルワールドか通信が来てな。オメガモンって言ったかな・・・。君たちの助けが必要らしい・・・。明日、中央公園に迎えに来ると言っていた」

と山木が言った。

「行きたいなら、行ってくるがいい・・・。親御さんにはしっかり言っておくのだよ。私もできる限りのサポートはしたいと思っている。OKなら明日の朝の7時に中央公園に集まってくれ!」

と山木は言った。

「・・・はいっ!」「・・・」

全員が返事をしたところで・・・

「ちょっと待った!!俺たちも連れて行ってくれ!!」

とマサルが駆け込んで来て言った。

後ろにはトーマとヨシノ、イクトも居る。

「オレらも、一緒に行くぜ！」

ヒロカズとケンタも居た。

「みんな……。でも……」

「人数が多い方が強いぜ!!」

「分かった!! みんなで行こう!!」

「「「「オウー!!」」」」

―翌日―

「これで全員そろったね……」

「そろつと、オメガモンが来る頃だ……」

『デジタルワールドの救世者の諸君!!』

どこから声が聞こえてきた。

『これより、デジタルワールドへ転送する……。今からデジタルゲートを出すから中に入ってくれ』

と言った瞬間……

ボワン

丸いボワボワしたゲートが現れた。

「これがゲート……。オレらの世界とは別なものだ……」

とマサルは言った。

「よし、行こう!」

全員がゲートの中に入っていった……

「ここは……。どっちが上だか分からない……」

デジタルワールドの間の空間をさまよっていた。

「そろつと……」

「えっ!」

「うわぁ~~~~!」

全員が下に落ちていった。

「うわぁ~~~~!まだ落ちる~~~~!」

地面が見えた。

ドカッ

「イテテテテ」

「いつ来ても、これには耐えられないな・・・」

とジェンが言った。

「ここがデジタルワールド・・・。僕たちの世界のとは違う・・・。」

とトーマが言った。

「あれ？マサル達の世界じゃ違うの？」

「ああ・・・。」

『君たちはすぐにも四聖獣の所へ来てもらいたい・・・』

「でも、どうやって？」

『そこから見える一番奥の光の柱に入ってもらいたい・・・』

「でも、どこへ行くかわ、わかんない・・・。」

とルキが言った。

『大丈夫・・・。必ず上手くいくから・・・』

「とりあえず行こう!」

タカト達が歩き出したとたん・・・

「そこから先には行かせないよー！」

目の前に3つの影が見えた。

「う、嘘だろうー!!」

第9章 デジタルワールド再突入（後書き）

さあ。デジタルワールドへ突入しました！！

タカト達の目の前に現れた敵とは！？

次回、まさかの敵と戦います！！

お楽しみに！！

第10章 テイマーズVSブラック軍（前書き）

「カラテンモンよ、奴らを送るのだ！」

黒い影が言った。

「し、しかし彼らは・・・」

「いいから早くするのだ！」

「わ、わかりました！！」

カラテンモンは急ぎ足で出て行った。

「今度こそ！」

黒い影はそう言った。

第10章 テイマーズVSブラック軍

「嘘だろう!」

目の前には、グラウモン、ガルゴモン、キュウビモンがいた。

しかし、色が違っていた。

「ブラックグラウモン!!」

「ブラックガルゴモン!!」

「ヨウコモン!!」

目の前のデジモンはそう言った。

「ブラックグラウモン、魔竜型デジモン、成熟期、ウイルス種、必殺技はエキゾーストフレイム!」

とタカトがデジヴァイスのデータを読み上げた。

「ブラックガルゴモン、獣人型デジモン、成熟期、ワクチン種、必殺技はガドリングアーム!」

とジェンがデジヴァイスのデータを読み上げた。

「ヨウコモン、妖獣型デジモン、成熟期、データ種、必殺技は邪炎^{じゃえん}龍^{りゅう}!」

とルキがデジヴァイスのデータを読み上げた。

「僕たちが用があるのはその3人だ！」

とBグラウモンが言った。

「他の奴らは先に四聖獣の所へ行きなよ！」

とBガルゴモンが言った。

「嫌なら、無理矢理……」

そう、ヨウコモンが言った。

そのとたん、タカト、ジェン、ルキ以外のメンバーが光の柱に捕まった。

「うわあ〜！」

「邪魔者は消えた……。さあ、掛かってこい！」

とBグラウモンが言った。

「言われなくても……！」

「カードスラッシュ……！」

「超進化プラグイン・S……！」

「EVOLUTION」

「テリアモン、進化！」

「レナモン、進化！」

「ギルモン、進化！」

データがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

「ガルゴモン！！」

「キュウビモン！！」

「グラウモン！！」

「エキゾーストフレイム！」

2体の攻撃がぶつかる。

ドカーン

「く、タカト、こいつ強い！」

とグラウモンが言った。

「ガドリングアーム！」

「ダダダダダダ」

「え？早い！」

「ダムダムアップー！」

「うわぁー！」

ガルゴモンが吹っ飛んだ。

「ガルゴモン！！」

「弧炎龍！！」

「邪炎龍！！」

2体の攻撃がぶつかる。

ドガン

「く、これまでは・・・」

「どうだ！これがブラック軍団の力だー！！」

とBグラウモンが言った！

「なんだいなんだい！こんなもんかよー！もっと本気出せよー！」

とBガルゴモンが言った。

「く、エキゾーストフレイム！」

「プラズマブレイド！」

「な！攻撃を裂いた！」

「こんなのでは、七大魔王など決して勝てない！！！」

とヨウコモンが言った。

「なに、君たちは七大魔王を知っているのか！」

とジェンが聞いた。

「知っているもなにも」

「我々は、七大魔王の命を受け」

「貴様ら倒しに来た！」

と3体のデジモンは順々に言った。

「な、なに〜！」

「こ、こうなったら・・・」

「みんな！アレを！！」

「分かった！」

「カードスラッシュ！！」

「マトリックスエボリュウション！！」

「MATRIX EVOLUTION」

「ガルゴモン、進化!!」

「キュウビモン、進化!!」

「グラウモン、進化!!」

別のデータが上書きされていく。

「ラピッドモン!」

「タオモン!」

「メガロ グラウモン!」

ラピッドモン

世代：完全体

タイプ：サイボーグ型

種：ワクチン

必殺技：ゴールドエンドライアングル

タオモン

世代：完全体

タイプ：魔神型

種：データ

必殺技：梵筆閃ぼんひつせん

メガログラウモン

世代：完全体

タイプ：サイボーグ型

種：ウィルス

必殺技：アトミックブラスター

「進化したと〜！」

「ち！エキゾーストフレイム！」

「アトミックブラスター！」

「ぐわあ〜！おのれ！覚えとけ〜〜！」

Bグラウモンは吹っ飛んで見えなくなった。

「ハッターだ〜！ガドリングアーム！」

「そんなもん、くらわないよ〜！ゴールドントライアングル！」

「う、うわあ〜〜！！おのれ〜！」

Bグラウモンも派手に吹っ飛んでいった。

「この、私が負けるはずが！邪炎龍！」

「梵筆閃！」

「おのれ〜！この飯はきつと返す〜！」

ヨウコモンも吹っ飛んでいった。

「ふう」

「終わった！」

「何なのよ！あいつら！」

「あの光の柱かな？」

「たぶん・・・」

「よし、行こう！みんな、待っているよ！」

3人は光の柱に飛び込んだ。

第10章 テイマーズVSブラック軍（後書き）

「くそっ！なんで、進化なんか！」

「僕たちにもパートナーが必要なのかな？」

「しかし、あの方は認めてくれるだろうか・・・」

「ううん・・・」

「ダメもと、言ってみよう！」

「そうだな・・・。次こそ！」

ブラック軍団は部屋の中に入った。

どうもー！！

第10章が終わりました！！

B軍団を出しました！

やっぱり、戦闘シーンが上手く書けない・・・

今回は、番外編でも書こうかなと思っています！

10 章終了記念に!!

お楽しみに!!

第11章 番外編 デジモンコンテスト 前編

パンツ、パンツ、パンツ

ゴツモン「さあ、始まりました。第1回デジモンコンテスト。司会は私ゴツモンが致します！」

ゴツモン「どのチームが1番良い演技をできるかで競います！チーム6人までです！」

ゴツモン「では、選手を紹介します！！ エントリーナンバー1 デジモンティマーズ！」

タカト、ジェン、ルキ、ギルモン、テリアモン、レナモンが入場してきた。

ゴツモン「エントリーナンバー2 デジモンセイバーズ！」

マサル、ヨシノ、トーマ、アグモン、ララモン、ガオモンが入場してきた。

ゴツモン「エントリーナンバー3 チーム ベルゼブモン！」

ベルゼブモン、ヒロカズ、ケンタ、ガードロモン、マリンエンジェモンが入場してきた。

ヒロカズ「って！いつの間にチーム ベルゼブモンになっているんだよ！」

ヒロカズが突っ込んだ。

ベルゼブモン「気にすんな！」

ゴツモン「エントリーナンバー4 ブラック軍団！」

Bグラウモン、Bガルゴモン、ヨウコモンが入場してきた。

ゴツモン「さあ。選手達が出揃いました！これより審査に入ります！」

ゴツモン「最初はエントリーナンバー1 デジモンティマーズ！」

タカト「よし！みんな頑張ろう！」

タカト「いけ！ギルモン！」

ギルモン「ファイヤーボール！」

ギルモンは空へ向けて放った。

ルキ「今よ！レナモン！」

レナモン「弧葉？！」

ファイヤーボールを凍らした。

ジェン「最後の仕上げだ！テリアモン！」

テリアモン「プチツイスター！」

凍らしたファイヤーボールに当たる。

砕け中を舞う。

それは、氷の雨のようだ。

観客「オオウ〜〜!!」

審査員A「キレイ!」

審査員B「素晴らしいコンビネーションだ!」

審査員C「息が合っていないければこういう風にはならない!」

ゴツモン「さあ。デジモンテイマーズ、開始早々審査員の方からの高評価です!」

タカト「カードスラッシュ!! 白い羽!」

ギルモンの白い羽がついた。

ギルモンは空へ飛んでいく。

そして、空から地面に向かって

ギルモン「ファイヤーボール!!」

レナモン「弧葉?!」

また、ファイヤボールを凍らせる。

テリアモン「プチツイスター！」

今度は砕かず、また、空へ打ち上げた。

そして、ギルモンの所まで飛んでいく。

ギルモン「ロックブレイカー！」

空中で砕き、氷の花火のようになった。

観客「オオオ〜！」

ゴツモン「ここで、デジモンテイマーズの演技は終了です！続いては、エントリーナンバー2 デジモンセイバーズです！」

マサル「行くぞ！アグモン！」

アグモン「ベビーバーナー！」

周りに火を付けた。

ララモン「ララスクリュー！」

周りの火を風で吹き飛ばし、火の粉となって空へ舞い上がる。

それは、火の粉の蛍の様だ。

マサル「アグモン！次だ！」

アグモン「ベビーファイヤー！ベビーファイヤー！」

と連発した。

トーマ「今だ！ガオモン！」

ガオモン「イエス！マスター！ガオラッシュ！」

ガオモンは素早く動いて、ベビーファイヤーを殴って（？）いく。

そこで、花火のように散っていく。

観客「オオウ~~~~！！！」

ガオモンが格好良く、着地を決める。

スタッ

（決まった！）

とガオモンは心の中でそう思った。

ゴツモン「ここで、デジモンセイバーズの演技は終了！続いてはエントリーナンバー3 チーム ベルゼブモン！」

第11章 番外編 デジモンコンテスト 前編（後書き）

ヒロカズ「あれ？オレらの演技は??」

ガードロモン「ヒロカズ……。次回みたいだよ！」

ヒロカズ「マジかよ！勝手にチーム名も決められたし……」

ガードロモン「まあまあ……」

ヒロカズ「次回！『ヒロカズとガードロモンの最高の演技！』みんな！読んでくれよ！君もテイマーを目指せ！」

嘘です……。

番外編です！

前編と後編に分けました！

ヒロカズが勝手なこと言っていました、タイトルは違います……。

恐らく、出番が少なく暴れただけでしょう……では、次回もお楽しみに！！

第12章 く番外編く デジモンコンテスト 後編

ゴツモン「続いては、チーム ベルゼブモンです！」

ベルゼブモン「よしっ！行くぞー！」

ヒロカズ「ガードロモンがー！」

ケンタ「どうしたの？」

ヒロカズ「ガードロモンがいないー！」

全員「何だってー！」

ベルゼブモン「言うことは・・・」

ヒロカズ「出場を・・・」

ケンタ「辞退する・・・」

みんながしよぼくれた所へ

ガードロモン「ゴメンゴメン！」

全員「ガードロモンー！」

ヒロカズ「何やってたんだよ！」

ベルゼブモン「よし！今度こそ行くぞー！」

チーム ベルゼブモンは入場した。

マリンエンジEMON「ぷ〜ぺ〜」

ハート型の泡をたくさん出した。

ベルゼブモン「ダブルインパクト！」

ベレンヘーナを両手に持ち、連射した。

パン！パン！パン！

当たったと同時に破裂して、花火のように散った。

ゴツモン「なんと、ここで終了の合図を出した！！」

ゴツモン「チーム ベルゼブモン終了！続いては、エントリーナン
バー4 泣いても笑っても最後の演技！ブラック軍団！」

Bグラウモン「行くぞ！」

Bグラウモン「エキゾーストフレイム！」

Bガルゴモン「ガトリングアーム！」

ヨウコモン「邪炎龍！」

3つの技が重なり空へ舞い上がる。

ドンッ！

火の粉となって降ってくる。

それは、雪のようだった。

ゴツモン「ここで演技終了!!」

30分後・・・

ゴツモン「結果発表に移りたいと思います!!」

ゴツモン「ユニーク賞、準優秀賞、最優秀賞の順で発表します!」

ゴツモン「ユニーク賞は・・・」

ゴツモン「ブラック軍団!!」

ブラック軍団「よっしゃ!!」

ゴツモン「他のチームとは違う発想が評価されました!続いて、準優秀賞の発表です!」

ゴツモン「準優秀賞は・・・」

ゴツモン「デジモン・・・」

ゴツモン「・・・セイバース!!」

セイバーズ「よっしゃ~~~~~!!」

マサル達は飛び上がった。

ゴツモン「さあ〜泣いても笑っても最後の最優秀賞の発表です!
」

ゴツモン「発表します!!」

ゴツモン「最優秀賞は……………」

全員「ゴクッ」

ゴツモン「……………」

全員「ゴクッ……………」

ゴツモン「発表します!!」

全員「早く言えや!!」

待ちきれなくなって突っ込んだ。

ゴツモン「最優秀賞は……………」
……………」

全員「ゴクッ」

ゴツモン「デジモンティマーズ!!」

デイマーズ「よっしゃ~~~~~」!

タカト達は飛び上がった。

第12章 く番外編く デジモンコンテスト 後編（後書き）

くコンテスト終了く

タカト「いや」。勝てて良かったね！」

ジェン「うん！」

ルキ「ヒロカズ達の顔見た？」

タカト「めっちゃ、悔しそうにしていたね・・・」

ジェン「しょうがないよ。勝負なんだから・・・」

ルキ「そうね・・・」

タカト「次回から、本編に戻るんだなあくく！」

ジェン「タカト！それは言わない方が・・・」

ルキ「タカトは常識を壊そうとしているの？」

タカト「すいません・・・」

Ryota「よつと！ども！作者です！！番外編どうでした？タカトは後ろの方でしょばくれています・・・」

Ryota「今回は、さつき、タカトが言っていたように本編に戻ります！」

Ryota「七大魔王の配下とバトル！？の予定です！！」

Ryota「楽しみに！！」

Ryota「それと・・・これから、たまに後書きにみんなと登場したいと思っています！！」

第13章 四聖獣集結！！デジモン戦争勃発！！（前書き）

ーダークエリア

??「まさか、ブラック軍が敗れるとは・・・」

1体の黒い影がそう言った。

そこへ1体のデジモンが駆けつけた。

??「私にお任せを！」

??「お前はやれるのか？」

??「あなた様の軍を拝借させて頂ければそれなりのことを致すつもりです！」

??「よかるう……。任せた！」

??「はっ！！」

第13章 四聖獣集結！！デジモン戦争勃発！！

タカト「久しぶりですね！スーツエーモン！」
スーツエーモン「久しぶりだな、ティマーズよ！」

スーツエーモン

世代：究極体

タイプ：聖鳥型

種：ウィルス

必殺技：紅焰こうえん

四聖獣

ジェン「七大魔王が攻めてきたと聞いたのですが・・・」
スーツエーモン「いかにも・・・。」

そこへ蒼い稲妻がはしった。

??「それだけではない!!」

鎖の掛かった竜が現れた。

チンロンモン

世代：究極体

タイプ：聖竜型

種：データ

必殺技：蒼雷そうらい

四聖獣

タカト「チンロンモン!!」

チンロンモン「久しぶりだな、ティマーズよ！」

ジェン「それだけではないって？」

チンロンモン「今、各地で侵略が始まっている・・・」

??「大変なことになった!!」

1体のデジモンが駆けてきた。

バイフーモン

世代：究極体

タイプ：聖獣型

種：データ

必殺技：金剛こんごう

四聖獣

スーツエーモン「どうした？バイフーモンよ！」

バイフーモン「隣のエリアで七大魔王の軍団が攻めてきた!!」

全員「な、何だって!!」

??「それだけではないぞ！」

緑色の亀のようなデジモンが現れた。

シェンウーモン

世代：究極体

タイプ：聖獣型

種：ワクチン

必殺技：夢幻むげん

四聖獣

シェンウーモン「各地でデジモン達の侵略が始まっておる!!」

スーツエーモン「おのれ」

タカト「僕たちも行こう!!」

全員「うん!!」

チンロンモン「待て! 3人ずつで分かれて侵略を止めてくれ!」

ジェン「分かった! じゃ・・・僕とタカトとルキで!」

マサル「オレは、トーマとヨシノだ! イクト、すまん・・・」

イクト「いいよ! マサル達は息が合っているから!」

ヒロカズ「それじゃ・・・オレは、ケンタと・・・イクトだっけ?

それで行く!!」

リュウタ「あゝオレは・・・?」

スーツエーモン「お主はここに残れ! 我々だけではちと、不安でな・

・・・」

リュウタ「わ、分かりました!!」

ルキ「でも、どうやって移動をするのよ!」

チンロンモン「光の柱を使えばよい! 行けるようにしてある!」

タカト「よし! 行こう!!」

全員はそれぞれの光の柱に入っていった。

タカト「ここは・・・?」

ルキ「ひどい・・・」

そこは、荒れ果てた荒野だった

ジェン「とにかく、敵はどこだ・・・」

??「ひいゝひっひっひっひいゝ」

ジェン「誰だ!!」

??「デスアロー!!」

タカト「うわあゝ! ギルモン!!」

ギルモン「ファイヤーボール!!」

??「ちっ! なかなかやるな!!」

スタツ

それは姿を見せた。

真っ先に見えたのはでっかい目、そして両手にも目。

そして、翼が背中から生えている。

??「オレ様の名はデスモンだ!!」

タカト「デスモン、魔王型デジモン究極体、必殺技はエクスプロー
ジョンアイ!」

タカトはデジヴァイスのデータを読み上げた。

ジェン「究極体か・・・なれるかな?」

テリアモン「ジェン!任してよ!こんな奴、究極体になればい
ちこるだよ!」

ジェン「そうだね・・・。タカト、ルキ行けるかい?」

二人はうなずいた。

タカト「マトリックス・エボリユウション!!」

ギルモン「ギルモン!進化!」

タカトとギルモンが融合し、新たなデータが上書きされていく。
??「デュークモン!!」

デュークモン

世代：究極体

タイプ：聖騎士型

種：ウィルス

必殺技：ファイナルエリシオン

ジェン「マトリックス・エボリユウション!!」

テリアモン「テリアモン、進化!」

ジェンとテリアモンが融合し、新たなデータが上書きされていく。
??「セントガルゴモン!!」

セントガルゴモン

世代：究極体

タイプ：マシーン型

種：ワクチン

必殺技：バーストショット

ルキ「マトリックス・エボリュウション！」

レナモン「レナモン、進化！」

ルキとレナモンが融合し、新たなデータが上書きされていく。
??「サクヤモン!!」

サクヤモン

世代：究極体

タイプ：神人型

種：データ

必殺技：金剛界曼荼羅こんごうかいまんだら

デスモン「なっ！デジモンと人間が融合したとっ!!」

デュークモン「悪しきものよ！このデュークモンが貴様を成敗してくれる！」

デュークモン「ファイナルエリシオン!!」

セントガルゴモン「よし、僕もやるぞっ！バーストショット!!」

サクヤモン「金剛界曼荼羅!!」

3体のデジモンの攻撃が重なる。

デスモン「な!!ま、まさか！このオレが・・・!!」

まともに攻撃を食らう。

デスモン「そ、そんなっ！も、申し訳・・・ありません・・・バ、バルバ・・・うわぁっ！七大魔王、万歳!!」

Sガルゴモン「ふう終わった！」

サクヤモン「ねえ、今、なんか言ったような・・・」

デュークモン「確か、バルバとか・・・七大魔王のひとりかな・・・

「
シュワーン

タカト「ふう、とりあえず、こここのエリアはもう大丈夫だろう・・・

「
ジエン「じゃ、帰ろうか！」

3人は光の柱まで歩き出した。

第13章 四聖獣集結！！デジモン戦争勃発！！（後書き）

ーダークエリア

??「ま、まさか、デスモンがやられるとは・・・」

そこへ、1体のデジモンが来た。

??「じいさんがダメなら、オレの配下の軍ならどうだ・・・？」

??「お主は、たいそうな自信じゃな・・・」

??「こんどは、向こうも、そう、上手くはいかないさ・・・」

??「ふふふふ、見物じゃな・・・」

2体の黒い影はそう話し合っていた。

どろも！！

さあ、戦いの火蓋が切って落とされました！！

これからが見ものですね！！

次回は、あいつが進化します！！

お楽しみに！！

第14章 絆の力で勝利を掴め！ ハイアンドロモン究極進化！（前書き）

??「お前の軍はどうだか見せてもらおう」

??「オレ様の軍は最強だ!!」

2体の影はそう話し合っていた。

第14章 絆の力で勝利を掴め！ ハイアンドロモン究極進化！

ストーン

ヒロカズ「ここが俺たちの戦場か・・・」

ケンタ「結構、あれているね・・・」

イクト「あ、あの・・・オレは・・・」

ドガンー！！

ケンタ「う、うわぁ~~~~！」

??「ちっ！外したか・・・」

イクト「だ、誰だ！！」

??「オレは、ここだ！」

ヒロカズ「な！いつの間に・・・」

彼らの後ろに回っていた。

そいつは、緑色の鱗が目立ち両足には1本の長いかぎ爪がついていた。

ヒロカズ「ディノレクスモン、恐竜型デジモン、究極体！データ種、必殺技はオーガフレイム！」

イクト「究極体が……。ファルコモン行くよ！」

ファルコモン「うん！任せてイクト！！」

イクト「デジソウルチャージ！オーバードライブ！！」

ファルコモン「ファルコモン進化！！」

ファルコモンのデータの上に新たなデータが上書きされたいく。

??「レイヴモン！」

ケンタ「し、進化した！ レイヴモン、サイボーグ型デジモン究極体！ワクチン種、必殺技は天之尾羽張^{あめのおはばり}！」

レイヴモン「スピードなら負けない！！」

ディノレクスモン「ふん！そいつはどうか？」

シュン

イクト「き、消えた！」

レイヴモン「違う！奴は高速で動いているんだ！」

レイヴモン「そこだ！！ブラストウィング！」

ディノレクスモン「ちっ！オレの動きについてくるとわな……」

レイヴモン「天之尾羽張！」

ディノレクスモン「オーガフレイム！」

ドガンー！！

シュン

ディノレクスモン「まずは、一人！スプラッターハンティング！」

レイヴモン「し、しまった！！！」

ガードロモン「うわぁー！」

ドン！

ヒロカズ「ガードロモン！」

ガードロモン「ヒ、ヒロ・・・カ・・・ズウー」

ヒロカズ「ガードロモン！大丈夫か？」

ガードロモン「だ、だい・・・じょう・・・ぶ・・・だ・・・」

ヒロカズ「だ、大丈夫な分けないだろう！」

ヒロカズ「てめえー！お前はオレが倒す！！　　うおー！！！」

ガードロモン「ひ、ヒロカズ？」

シャワーン

ヒロカズのデジヴァイスが光り出した。

ヒロカズ「こ、これは・・・？」

ガードロモン「進化だ！ヒロカズ！」

ヒロカズ「わ、分かった！」

ヒロカズ「マトリックス・エボリュウション！！」

ガードロモン「ガードロモン、進化！！」

ヒロカズとガードロモンが融合していく。

新たなデータが加わっていく。

体は、黒、白、赤が目立つ。

??「ハイアンドロモン！！」

ケンタ「あ、アレは・・・」

ケンタ「ハイアンドロモン、サイボーグ型デジモン究極体！ワクチン種、必殺技はアトミック・レイ！」

ヒロカズ「すっげー！！ガードロモンが進化した！オレもデジモンになったー！！」

ハイアンドロモン「ヒロカズ、喜んでいる暇は無いぞ！」

ヒロカズ「分かっているって！一気にとどめを刺すぞ！」

ディノレクスモン「は、ハッタリだ！オーガフレイム！」

ハイアンドロモン「遅い！」

ディノレクスモン「な！オレより動きが速いだと～～！認めん！そんなのは～～！！！」

ハイアンドロモン「サラバだ・・・！アトミック・レイ！」

ディノレクスモン「く、くそ～～！！オーガフレイム！！！」

しかし、オーガフレイムは呆気なく消され・・・

ディノレクスモン「く！くそお～～～～！！！」

ディノレクスモンを直撃する。

ディノレクスモン「も、申し訳・・・あり・・・ません・・・リ・・・ヴァイ・・・ア・・・うわあ～～～～！！！」

ディノレクスモンは消滅した。

シュワーン

ヒロカズ「ふう～～！終わった！」

ガードロモン「ヒロカズ、大丈夫か？」

ヒロカズ「ああ！サンキュー！ガードロモン！」

ガードロモン「うん！」

イクト「ヒロカズ！とりあえず、四聖獣の所へ戻ろう！」

ケンタ「光の柱がこっちに来る！」

ヒロカズ「よし！」

ガードロモン「帰ろうぜ！」

ヒロカズ「ああ〜！！オレの台詞を〜！！」

決めぜりふを言おうとしたところをガードロモンに先を越された。

3人は、四聖獣の所へ戻った。

第14章 絆の力で勝利を掴め！ ハイアンドロモン究極進化！（後書き）

??「な！デイノレクスモンがやられただと!!」

??「はははは！お主もじゃな！」

??「くそ！まさか・・・」

どうも!!

ハイアンドロモンになりましたね～～!!

さて、次回はセイバーズの活躍です!!

お見逃し無く!!

次回もお楽しみに!!

第15章 破壊を止める！スピノモンをブッ倒せ！（前書き）

??「ディノレクスモンのアニキがやられた・・・！次はオレが出る！いいだろう！」

??「貴様は奴らを倒せるのか？」

??「やって見せましょう！」

第15章 破壊を止める！スピノモンをブツ倒せ！

アグモン「アニキ〜！」

マサル達一行はジャングルみたいな所を歩いていた。

マサル「なんだ？アグモン？」

アグモン「腹減った〜〜！」

マサル「またかよ！これで何回目だ？」

マサルは、アグモンの腹減ったコールを何十回と聞いている。

さすがに聞き飽きたようだ。

アグモン「だつて〜！」

トーマ「しっ！何かが来る！」

ヨシノ「デジモン？」

チャチャチャチャ…

何かが歩いてきている。

それも、大軍で。

全身が青色のデジモンで、どちらかと言えばタカトのギルモンに似

ていた。

ギルモンが青色になり、重装備をしているようだった。

コマンドラモン

世代：成長期

タイプ：サイボーグ型

種：ウィルス

必殺技：M16アサシン

トーマ「アレは、七大魔王の軍か・・・？」

マサル「だったら！ブツ倒すところだ！行くぞ！アグモン！」

ガサッ

アグモン「あゝ！待ってよゝ！アニキゝ！」

ガサッ

二人は草むらから飛び出し、コマンドラモン達の前に姿を現した。

トーマ「あちゃゝ！また、勝手に！」

トーマは頭を抱えていた。

コマンドラモンA「誰だ？ここは、スピノモン様の命で我等が占拠した場所だぞ！」

マサル「お前らは七大魔王の配下か？」

コマンドラモンB「だったらどうする？」

マサル「こつするんだよ！」

ダッ

マサルはコマンドラモンの1体に走り出し

ドカッ

殴りつけた。

コマンドラモンA「うわぁー！」

シュルルル

マサルの殴った右手がオレンジ色のデジソウルに包まれた。

マサル「行くぞ！アグモン！」

アグモン「任せろー！」

マサル「デジソウル・フルチャージ！」

アグモン「アグモン！進化！」

アグモンのデータの上に新たなデータが書きされて、ジオグレイ

モンに。

そして、更にジオグレイモンの上に新たなデータが上書きされていく。

??「ライズグレイモン!!」

ライズグレイモン

世代：完全体

タイプ：サイボーグ型

種：データ

必殺技：トライデントリボルバー

コマンドラモンC「なに！進化した！」

コマンドラモンA「え〜い！一斉攻撃だ！」

コマンドラモン軍「M16アサシン！」

構えた銃から、一斉に吹き出した。

ライズグレイモン「トライデントリボルバー!!」

ダン、ダン、ダン

M16アサシンを分けなく吹っ飛ばし、まともにコマンドラモンを直撃する。

コマンドラモン軍「うわあゝ!!」

??「ソニックスラッシュレイン!」

ドガン

まともにライズグレイモンに直撃する。

マサル「ライズグレイモン!!」

ライズグレイモンは退化してしまいアグモンになってしまった。

アグモン「アニキ・・・!」

マサル「誰だ!」

コマンドラモンA「ひえゝ!スピノモン様ゝ!」

スピノモン

世代：究極体

タイプ：恐竜型

種：ウィルス

必殺技：ソニックスラッシュレイン

マサル「アグモン!行けるか?」

アグモン「大丈夫だよゝ!行くよ!アニキ!」

??「ダブルクレセントミラーシュ!」

ドガン

スピノモン「ぐは！誰だ？」

トーマ「マサル！君一人では心細くてね！」

マサル「トーマ！」

トーマ「ミラージュガオガモン！10分だ！」

ミラージュガオガモン「イエス！マスター！」

ヨシノ「私も忘れないでよね！行くよロゼモン！」

マサル「よし！一斉攻撃だ！」

トーマ「でも、マサル、君はアグモンが・・・」

マサル「うおー！デジソウルチャージ！オーバードライブ！」

アグモン「アグモン、進化！」

アグモンのデータの上に新たなデータが上書きされていく。

??「シャイングレイモン！」

トーマ「殴っていないのに、デジソウルが・・・」

マサル「よし！今度こそ一斉攻撃だ！いけ！シャイングレイモン！」

シャイングレイモン「グロリアスバースト！」

トーマ「ミラージュガオガモン！いけ！」

ミラージュガオガモン「イエス！マスター！フルムーンブラスター！」

ヨシノ「私たちも負けてられないわよ！」

ロゼモン「フォービドウンテンプレーション！」

3体の技が重なり、スピノモンを目指す。

マサル・トーマ・ヨシノ「いつけ！」

スピノモンを直撃する。

スピノモン「ぐはあゝゝ！！ま・まさか・・・こん・・・なと・・・ころ・・・で・・・！！申し・・・訳あり・・・ま・・・せん・・・り・・・ヴァ・・・イヤ・・・モン・・・様！ぐはあゝゝゝ！！！」

スピノモンは消滅した。

マサル「ふうゝ！終わった！」

トーマ「今、奴はリヴァイヤモンって言ったな・・・」

マサル「今はそんなことより！帰ることだ！」

ヨシノ「ねえ、アレじゃない？光の柱！」

光の柱が3人の所へ向かってくる。

光に柱は3人と3体を吸い込んだ。

第15章 破壊を止める！スピノモンをブッ倒せ！（後書き）

??「まさか・・・スピノモンまでやられるとは・・・次は我が直々に出るとするか・・・」

15章目をお届けしました！！

遂に、次回は、七大魔王の一人が登場！！

どうなる！？ティマーズ！

次回も、お楽しみに！！

第16章 決戦！！七大魔王リヴァイアモン（前書き）

??「いよいよ、オレ様の出番って訳か・・・」

??「負けるでないぞ」

??「分かっているよ！じいさん、オレがやられたらあとは、あの『博士』の新作に頼ることだな・・・」

??「あいつは、あまり、信用できなくてな・・・」

??「大丈夫だ・・・暴れてくれぜ！！」

第16章 決戦！！七大魔王リヴァイアモン

スーツエーモン「これで、全員そろったな……。どうやら、七大魔王が動き出した。名を『リヴァイアモン』と言う。それしか、分かっていない……」

マサル「じゃ、そいつをブッ倒せばいいんだな！」

チンロンモン「焦るでない。マサル達には別の作戦を手伝ってもらう！リヴァイアモンの方には、タカト、ジェン、ルキ、ヒロカズ、リュウタに行ってもらう！」

マサル「そんなあゝ！！」

タカト「分かった！みんな、行こう！」

スーツエーモン「気をつけるのだ！奴らは並の究極体の力を超えておる！」

タカト「ところで、リュウタは？」

チンロンモン「彼にはある修行を受けさせておる！後から、追いつかせる！」

ジェン「分かりました！よし、みんな、究極体だ！」

タカト・ルキ・ジェン・ヒロカズ「マトリックス・エボリュウション！」

ギルモン「ギルモン、進化！」

レナモン「レナモン、進化！」

テリアモン「テリアモン、進化！」

ガードロモン「ガードロモン、進化！」

??「デュークモン！」

??「サクヤモン！」

??「セントガルゴモン！」

??「ハイアンドロモン！」

デュークモン「行くぞ！」

バッ

デュークモンのかけ声と共に究極体デジモン達が飛んでいった。

マサル「ああ！オレも戦いたかった！」

と愚痴を漏らしていた。

セントガルゴモン「ねえ？こっちで良いんだよね？」

サクヤモン「ああ、たぶん・・・」

ハイアンドロモン「あ、あれは・・・？」

彼らの目の前の方向に黒い塊が見えた。

デュークモン「あ、あれは・・・」

タカト『デスモンの大軍だ！！』

ジエン『なんて、数だ・・・』

ルキ『100は超えている・・・』

ヒロカズ『片っ端からかたづけていくぜ！』

デュークモン「行くぞ！みんな！！」

デスモンの大軍に向かってスピードを上げて向かった。

デュークモン「ロイヤルセイバー！！」

デスモン「ぐはあゝ！」

セントガルゴモン「なんだ、こいつら・・・。弱っちいぞ！バーストショット！」

サクヤモン「飯綱いひづな！！！」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ！！！」

デュークモン「おかしい・・・」

タカト『どうしたの?』

デュークモン「リヴァイアモンの姿がどこにも見あたらないんだ・
・」

タカト「まさか・・・」

デュークモン「後ろか!？」

そう叫んだ途端・・・

??「フハハハハ!良く分かったな!だが、遅い!」

そう言うと、近くにいた、ハイアンドロモンを尻尾で締め付けた。

ハイアンドロモン「ぐっ・・・」

デュークモン「お前がリヴァイアモンか？」

リヴァイアモン「ふっ!いかにも!だったらどうする?」

デュークモン「こうするまでだ!ロイヤル・・・」

リヴァイアモン「待てよ!今攻撃したらこいつがどうなるか分かるか?」

デュークモン「くっ!汚いぞ!」

リヴァイアモン「汚くて結構、これがオレ様のやり方だ!さあて、

まずは・・・」

??「ジャスティスキック!!」

リヴァイアモン「なに!!」

ドーン

リヴァイアモン「ぐっ!誰だ?」

デュークモン「あ!!」

??「正義のヒーロー登場だ!やつ!みんな、久しぶり!!」

灰色のボディに首に赤いマフラーのデジモン。

ティマーズ達は彼を知っている。

デュークモン「ジャスティモン!」

タカト「リヨウさん!」

ルキ『あゝ!さわやか光線!なんであんたがこんな所にいるのよ!』

ジャスティモン「久しぶりの再会でそんなこと言っかい?」

ジャスティモン

世代：究極体

タイプ：サイボーグ型

種：データ

必殺技：ジャスティスキック

リヴァイアモン「ふん！感動の再会だかなんだか知らねえけど、人増えようとオレには関係ない！」

デュークモン「そいつは、どうかな・・・」

デュークモン「ファイナルエリシオン！！」

セントガルゴモン「バーストショット！！」

サクヤモン「金剛界曼荼羅！！」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ！！」

ジャスティモン「トリニティアーム！！」

5体の技がリヴァイアモンにもろに直撃する。

リヴァイアモン「ぐはあー！」

ジャスティモン「やったか？」

デュークモン「いや・・・まだだ！！」

煙の向こうには、平然としているリヴァイアモンの姿があった。

サクヤモン「まさか、あれほどの攻撃を喰らったのに・・・」

リヴァイアモン「フフフ、そんなものか！今度はこっちから行かせてもらっぞ！」

リヴァイアモン「カウダー！」

リヴァイアモンの尻尾で全員が吹き飛ばされる。

全員「うわぁー！！！」

デュークモン「くっ！これほどの威力とは・・・。これまでか・・・」

リヴァイアモン「ハッハッハッハッ・・・」

??「みんな！大丈夫か？」

目の前には見たことの無いデジモンが現れた。

デュークモン「お、お前は・・・」

第16章 決戦！！七大魔王リヴァイアモン（後書き）

更新、遅くなりました！！（すみませんm（|_|）m
16章目を更新しました！！

さあー！最後に現れたナゾのデジモン！！

次回、正体が明らかに・・・

次回もお楽しみに！！

第17章 これが二人の力だ！スレイヤードラモン究極進化（前書き）

時は、少しさかのぼり、タカト達が出発してからのこと・・・

リュウタ「すつげえ〜！！」

シェンウーモン「お主らの相手は、ちと疲れるわい……。チンロンモンの代わりとはいえ、この夢幻でチンロンモンを作るとは・・・」

リュウタ「大丈夫か？ドラコモン？」

ドラコモン「ああ！！早く、七大魔王を倒そうぜ！」

シェンウーモン「タカト達が、リヴァイアモンという七大魔王の1体のデジモンと交戦中じゃ！」

リュウタ「なら・・・早速行こうぜ！！」

ドラコモン「この、新しい姿を奴らに見せたいぜ！」

シェンウーモン「焦るでない・・・お主らは、この力を充分に使いこなせていないのじゃ・・・」

リュウタ「じゃ、どうすれば・・・？」

シェンウーモン「その答えは、自分で探し出すのじゃ！老いばれは少し、休ませもらおう・・・」

ドラコモン「よし！リュウタ、行こうぜ！！」

リュウタ「よし！行こう！」

リュウタはデジヴァイスを掲げた。

第17章 これが二人の力だ！スレイヤードラモン究極進化

リヴァイアモン「お前らの負けだ！カウダー！！」

全員「ぐはあゝ！！」

ドーン

シュワーン

全員の究極体が解けてしまった。

ギルモン「くっ！！」

全員が瀕死に近い状態だった。

リヴァイアモン「所詮、そのような力ではオレ様を倒せないぜ！」

？？「そいつは、どうかな！」

リヴァイアモン「なに！？」

？？「てんりゅうざんは天竜斬破！」

リヴァイアモン「ぐはあゝ！！」

？？「ちっ！さすがは七大魔王！一刀両断にはできないか・・・」

？？「お前達！大丈夫か？」

ジェン「あ、あなたは・・・？」

ジェンがデジヴァイスを取り出した。

ジェン「スレイヤードラモン、竜人型デジモン究極体！ワクチン種、
必殺技は咬竜斬刃^{「くつりゅうせんぱんば」}！」

リュウタ『俺たちを忘れたとは言わせないぞ！』

ジェン「ま、まさか・・・」

タカト「ドラコモン！？」

スレイヤードラモン「いかにも！今のオレはスレイヤードラモンだ
！！」

リヴァイアモン「くっ！カウダ！！」

スレイヤードラモン「ふん！遅い！」

リヴァイアモン「な！？動きがオレ様より早いだと・・・」

スレイヤードラモン「連続攻撃をくらえっ！！」

スレイヤードラモン「天竜斬破！！」

リヴァイアモン「ぐはっ！」

リヴァイアモンの脳天から垂直に切り落とす。

リュウタ『次だ!!』

スレイヤードラモン「昇竜斬波!!」
しょうりゅうせんぱ

リヴァイアモン「くっ!」

今度は、下から上に剣を振り上げる。

ズバン!

リヴァイアモン「くはっ!」

リュウタ『とどめだ!!』

スレイヤードラモン「咬竜斬刃!!」

剣を相手に巻き付け、その刀身でリヴァイアモンを削った。

リヴァイアモン「くっ!まさか・・・このオレ様が・・・!!くはあゝ!!」

シュワン

リヴァイアモンはデータとなり分解されていった。

スレイヤードラモン「ふう〜!終わった!!」

シュワン

ドラコモンとリュウタに戻った。

タカト「あ、ありがとう！」

リュウタ「なあくに！当たり前のことをしてただけだ！」

ドラコモン「ねえ！リュウタ、七大魔王もたいしたことなかったね！」

ジェン「5人がかりでも倒せなかったのに・・・」

ルキ「ふんっ！マグレに決まっているじゃん！」

レナモン「ルキ！」

ルキ「だって・・・」

テリアモン「ねえ〜ねえ〜！どうやって進化したの〜？」

テリアモンが、興味津々に聞いてきた。

リュウタ「ふんっ！それはだな・・・」

ドラコモン「シェンウーモンが手伝ってくれたんだ！！」

リュウタ「ああ！オレの台詞を！！」

ドラコモン「いいじゃん！いいじゃん！」

リュウタ「むかつく！！だいたい、なんでお前は最近語尾に を付

けるんだよ?。」

ドラコモン「気にしない!気にしない!」

リュウタ「ほら!また!」

タカト「まあまあ……。とりあえず、四聖獣の所へ一端戻ろうよ!」

ジェン「そうだね……。行こうか!」

タカト、ギルモン、ジェン、テリアモン、ルキ、レナモン、ヒロカズ、ガードロモン、リュウタ、ドラコモンの5人と五匹は帰路に付いたのであった。

第17章 これが二人の力だ！スレイヤードラモン究極進化（後書き）

??「リヴァイアモンがやられるとは・・・」

??「だから、行ったでしょう！あんな奴は弱いって！」

一体の黒いデジモンが現れた。

??「あの『博士』の新作は？」

??「まだ見たいよ！あんな奴、私は信用できないわよ！」

??「まあまあ、堅いこと言っな！我々は、あくまでも利用しているのだから・・・」

??「そうね・・・！ブラック軍団（3バカトリオ）を送ったわ！」

Bグラウモン『今、ブラック軍団と書いて、3バカトリオって読んだな！』

??「なんか、今、声が聞こえて様な・・・」

??「気のせいよ！あいつらに、新たな力を加えておいたわ！」

??「分かった！楽しみじやのお」

どろも！！

七大魔王達が言っていた『博士』とは！？

近いうちに真実が明らかになる！？

次回は、久しぶりの奴らの登場です！

お楽しみに～～！！

第18章 逆襲 ブラック軍団!!

全員「うゝん・・・」

全員が頭を抱えていた。

目の前には、インプモンが良い気持ちで寝ていた。

腹を膨らまして・・・

ルキ「なんで、こいつが私達に分まで食べちゃうのよ!!」

マサル「こいつを、起こして、ぶん殴るか?」

インプモン「ふぁゝ。あれ?みんなオレの回りに集まっちゃってどうしたのさ?」

全員「インプモン!これは、どういうこと?」

インプモン「え!そ・それは・・・」

全員がインプモンを詰め寄る。

??「くるるゝん!」

白いデジモンが飛びついてきた。

??「怒っちゃダメでクルゝ!あゝお腹いっぱい!」

タカト「クルモン！」

ルキ「ねえ！クルモン！お腹いっぱいって、どういふこと？」

ルキがクルモンに詰め寄る。

クルモン「クル？インプモンと、一緒に、食べたでクル〜！」

ルキ「クルモン！私達の分まで食べないでよ！〜！」

ルキが怒鳴った。

クルモン「うわぁ〜！ルキが怒ったでクル〜！逃げるでクル〜！」

ピュ〜と逃げていった。

ルキ「まったく〜！」

レナモン「まあまあ・・・」

??「エキゾーストフレイム！」

ドガーン！

ジエン「な、なんだ？」

??「ちっ！外れたか・・・！」

タカト「あ！お前達は・・・」

??「ま、まさか忘れたのか・・・」

ルキ「覚えているわよ！た、確か・・・ブ・・・ブリッジ軍団・・・」

??「違っだろう！なんで俺たちが橋になっっているんだよ！ブラック軍団だよ！ブラック軍団！」

??「オレのことは覚えているだろう！」

タカト「偽グラウモン！」

??「ちがうから！ブラックだし！ブラックグラウモン！」

??「で、僕が、ブラックガルゴモンだよ！」

??「私がヨウコモンだ！」

ジエン「確か、そうだったね！」

ルキ「また、やられにきたの？」

Bグラウモン「ハッハッハッハ！今度の俺たちはひと味違っぞ！」

ギルモン「じゃ、どんな味？」

Bグラウモン「そうだな、この前は、バナナだったけど今回は・・・
って違っだろう！その味じゃない！」

Bグラウモンが突っ込んだ。

Bグラウモン「行くぞ！マトリックス・エヴォリユション！」

タカト「な！」

Bグラウモン「ブラックグラウモンへ進化へ！！」

データがはがれ、新たなデータが上書きされた。

??「ブラックメガログラウモン！！」

Bガルゴモン「ブラックガルゴモン、進化！！」

データがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ブラックラピッドモン！！」

ヨウコモン「ヨウコモン、進化！！」

データがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ドウモン！」

タカト「ブラックメガログラウモン、サイボーグ型デジモン完全体！ウイルス種、必殺技はアトミックブラスター！」

ジェン「ブラックラピッドモン、サイボーグ型デジモン完全体！ワクチン種、必殺技はゴールドントライアングル！」

ルキ「ドウモン、魔人型デジモン完全体！データ種、必殺技は鬼門きもん」

遁甲！」

ジェン「完全体か……。やっかいだな……」

Bメガログラウモン「どうだ！これが俺たちの力だ！」

タカト「究極体になろう！」

ジェン「ああ！」

タカト・ルキ・ジェン・ヒロカズ・リュウタ「マトリックス・エボ
リュウション！！」

ギルモン「ギルモンゝ進化ゝ！！」

??「デュークモン！！」

レナモン「レナモン、進化！」

??「サクヤモン！！」

テリアモン「テリアモン、進化！」

??「セント、ガルゴモン！！」

ガードロモン「ガードロモン、進化ゝ！！」

??「ハイアンドロモン！！」

ドラコモン「ドラコモンゝ進化ゝ！！」

??「スレイヤードラモン!!」

Bメガログラウモン「なに!人間がデジモンと融合した!？」

Bラピッドモン「関係ない!ラピッドファイヤー!!」

ダーン

デュークモンはイージスで防いだ。

デュークモン「こんな、攻撃では、このデュークモンなど倒せない!!ロイヤルセイバー!!」

Bラピッドモン「遅いよ!!」

余裕で交わした。

セントガルゴモン「これなら、どうだい!ジャイアントミサイル!!」

セントガルゴモンの肩から巨大なミサイル2発が発射された。

ドガン!

セントガルゴモン「どうだ!!」

ドウモン「この程度か?呪禁札!」

ドウモンの手からお札が放たれた。

セントガルゴモンに当たったとたん・・・

ドーン

爆発した。

セントガルゴモン「ぐっ！」

セントガルゴモン「ジェン、強いよ！こいつら・・・」

ジェン『セントガルゴモン！』

スレイヤードラモン「スピードなら負けない！天竜斬破！・・・えっ？」

Bラピッドモン「遅いよ！もらった！ゴールデントライ・・・」

??「カオスフレア！！」

Bラピッドモン「なに？ぐわぁー！」

??「おいおい！こんな奴らに負けるなよ！」

デュークモン「ベルゼブモン！！」

ベルゼブモンB「違うだろう！今のオレは、ベルゼブモン プラス
トモードだ！！」

スレイヤードラモン「すまない！」

ヘルゼブモンB「なあゝに！反撃開始だ！！」

第18章 逆襲 ブラック軍団!! (後書き)

と言うわけで・・・

次回に続きます!

決着はどうなるか!?

次回もお楽しみに!!

第19章 復活！深紅の騎士 デュークモンクリームゾンモード

ベルゼブモンB「反撃開始だ！！」

デュークモン「ファイナルエリシオン！！」

イージスからビームが放たれた。

Bメガログラウモン「アトミック・ブラスター！」

ドーン！

2体の攻撃がぶつかる。

Bラピッドモン「後ろがあいているよ！」

デュークモン「しまった！いつの間に・・・」

Bラピッドモン「ゴールドントライ・・・」

??「ジャステイスキック！！」

Bラピッドモン「なにっ！」

ドガン！

Bラピッドモン「うわあ！」

??「ふう〜！間に合った！」

デュークモン「ジャスティモン！」

ルキ『あんだ！今までどこ行っていたのよ！』

リヨウ『いやゝすまんすまん・・・ちょっとトイレへ・・・』

セントガルゴモン「一気に全員の技でぶつけようよ！」

デュークモン「よし！行くぞ！ファイナルエリシオン！！！」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル！！！」

サクヤモン「金剛界曼荼羅！！！」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ！！！」

ベルゼブモン「カオスフレア！！！」

ドーン！！

セントガルゴモン「どうだ！！！」

ドウモン「ふうゝ。なんとか間に合った！」

デュークモン「なにつ！」

ドウモンがバリケードを貼っていた。

スレイヤードラモン「天竜斬波！！！」

スレイヤードラモンが飛び出した。

ドウモン「呪禁札!!」

ドウモン手から札が放たれ、スレイヤードラモンに当たる。

ドガン!

スレイヤードラモン「ぐはゝ!!」

そのまま後ろに吹っ飛んだ。

デュークモン「スレイヤードラモン!!」

ジャステイモン「ジャスティスキック!!」

Bラピッドモン「遅いよゝ!!」

ひらりと交わすと後ろを狙って

Bラピッドモン「ラピッドファイヤー!!」

ドン

ジャステイモン「ぐはゝ!!」

派手に吹っ飛んだ。

デュークモン「ジャスティモン!!」

デュークモン「くそ！こうなったら・・・タカト、アレを使おう！」

タカト『あれって？』

デュークモン「グラニ！このデュークモンに力を貸してくれ！！うおー！！！」

デュークモンの体に赤いパーツがくつつく。

デュークモン・タカト「デュークモン クリムゾンモード！！」

体中が赤い鎧を身につけている。

槍と盾が消え、2本の剣を持っている。

そして、背中には、4枚の白い翼が生えている。

Bメガログラウモン「なんだ、あれは・・・？」

デュークモンC「インビシブルソード！！」

デュークモンCはブラック軍団めがけて全速で飛び斬りつける。

ブラック軍団「速い！！くはあー！！」

ブラック軍団は空の彼方へと飛んでいった。

覚えておけーと言う捨て台詞を残して・・・

第19章 復活！深紅の騎士 デュークモンクリムゾンモード（後書き）

Bグラウモン「えっ？なに俺たちこれで終わり??」

Bガルゴモン「まあまあ、まだあると思うよ！」

ヨウコモン「たまには良い運動になった・・・」

Bグラウモン「また、ボスに怒られるよ・・・」

ヨウコモン「耐えよう・・・」

Bグラウモン「素っ気ないな」

ヨウコモン「ほっとけ・・・」

Ryota「どーも！！作者です！！ブラック軍団は後ろですねて
います・・・なんか、前にもこんな様なセリフを言ったかも・・・」

Bグラウモン「俺たちの登場をもっと増やせ!!」

Ryota「しょうがないじゃん・・・忙しいんだから・・・まあ、
それはさておき・・・」

Ryota「次回は・・・」

Bグラウモン「ブラック軍団最強！？ティマーズの敗退 だ!!」

Ryota「違うから!!」

Ryota「七大魔王達が言っていた、『博士』の登場です!!お楽しみに!!」

第20章 ついに動き出した闇の黒幕！？（前書き）

??「どうだ？完成しそうか？」

彼は、眼鏡に手を当ててこう言った。

??「ええ！計画は順調ですよ！完成です！さあ、ショーの始まりです！」

・
・

??「フッフ……。楽しみにしているぞ……。倉田博士！」

倉田「ええ……。見ていてください！バイオベルゼブモン発進です！」

倉田はスイッチを入れた。

第20章 ついに動き出した闇の黒幕！？

タカト「それにしても、ブラック軍団は何だったんだろうね？」

ジェン「さあ〜」

ギルモン「ギル？フガフガ・・・グルルル・・・」

ギルモンが血相を変えた。

タカト「どうしたの？ギルモン？」

ギルモン「来る！タカト、すっごい奴が来る！」

タカト「何だって！みんなに知らせないとー！」

ジェン「とにかく、僕はみんなに知らせてくるよ！」

タカト「うん！」

ジェンは走っていった。

タカト「もしかして・・・アレ？」

彼方上空に黒い影が見えた。

マサル「敵襲か〜？」

マサルが駆け込んで来た。

タカト「アレ！」

タカトが指さす。

マサル「なんだ？アレ・・・？」

タカト「アレは・・・ベルゼブ・・・モン？」

だんだん、形がハッキリしてきた。

それは、ベルゼブモンに見えた。

インプモン「どうしたんだよ？」

タカト「あれ？インプモンがいるってことは・・・」

タカトはデジヴァイスを見た。

タカト「え？」

ジェン「どうしたの？」

タカト「デ、データが無い！！」

ルキ「うそ！」

??「レースエン・ジェントルメント！！」

ベルゼブモン(?)の後ろから声がした。

マサル達には見覚えがあつた。

マサル「お、お前は！！倉田！！」

トーマ「なんだって！」

イクト「なんで、生きているの？」

倉田「これはこれは、誰かと思えば大門大君ではありませんか！」

マサル「倉田！なんで生きているんだ！」

倉田「人間きが悪いですね！あのとき私は時空振動爆弾に巻き込まれた、と思つていたでしょう。実はあのとき、私はこの世界のデジタルワールドへ飛ばされたのです！そして、七大魔王達と出会つた訳です！確か、デ・リーパーとか言う奴が消滅した頃でしたね・・・。
私はデ・リーパーを研究もしているのですよ！」

マサル「貴様〜！」

倉田「そうそう、これが私の最高傑作！ギズモンに並ぶ位のもです！紹介します！！『バイオベルゼブモン』です！！」

Bベルゼブモン「グググググ」

インプモン「良く分からないけどようだいたいオレ様のまねをするんじゃないぜ！本物の方が強いんだよ！！インプモン、進化！！」

??「ベルゼブモン プラストモード！！」

ベルゼブモンB「偽物は引っ込んでな！」

タカト「僕たちも!!」

ジェン「うん!!」

タカト・ジェン・ルキ・ヒロカズ・リョウ・リュウタ「マトリック
ス・エボリュウション!!」

マサル・トーマ・ヨシノ・イクト「デジソウルチャージ!オーバー
ドライブ!!」

ギルモン「ギルモンゝ進化!!」

??「デュークモン!!」

テリアモン「テリアモン、進化!!」

??「セントガルゴモン!!」

レナモン「レナモン、進化!!」

??「サクヤモン!!」

ガードロモン「ガードロモン、進化!!」

??「ハイアンドロモン!!」

モノドラモン「モノドラモン、進化!!」

??「ジャステイモン!!」

ドラコモン「ドラコモン、進化!!」

??「スレイヤードラモン!!」

アグモン「アグモン、進化!!」

??「シャイングレイモン!!」

ガオモン「ガオモン、進化!!」

??「ミラージュガオガモン!!」

ララモン「ララモン、進化!!」

??「ロゼモン!!」

ファルコモン「ファルコモン、進化!!」

??「レイヴモン!!」

倉田「ほゝ! デジモンと人間が融合ですか……。フフフ、面白い……。でも、そんなモノはききません! やってしましなさい! バイオベルゼブモン!!」

Bベルゼブモン「グオゝ!! カオスフレア!!」

バイオベルゼブモンの攻撃が炸裂した。

あたりに煙が舞う。

スレイヤードラモン「天竜斬破!!」

スレイヤードラモンが煙から飛び出す。

Bベルゼブモン「フン!カオスフレア!!」

スレイヤードラモン「なに!!ぐわあ!!」

後ろに吹っ飛んだ。

デュークモン「ファイナルエリシオン!!」

Bベルゼブモン「フンツ!!」

手にある銃で弾く。

デュークモン「なに!!」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル!!」

Bベルゼブモン「カオスフレア!!」

2本のミサイルを事細かに破壊した。

セントガルゴモン「そ、そんな!!」

倉田「どうです!私の最高傑作は??あなたたちは弱すぎる!!」

マサル「くらたあゝ！！てめえだけはオレがぶっ飛ばす！！」

第20章 ついに動き出した闇の黒幕！？（後書き）

まさかの倉田博士の登場です！！

タカト達は、倉田博士の第二の野望を止めることができるのか！？

ご期待下さい！！

次回もお楽しみに！！

第21章 闇の黒幕 バルバモン登場！？（前書き）

まず、お詫びです！

この度は更新が遅くなりすみませんでしたm（ ）（ ）m

受験前なので更新が遅くなるときもあると思いますが・・・

ご了承ください！

引き続き、デジモンテイマーズ×セイバーズをお楽しみ下さい！

第21章 闇の黒幕 バルバモン登場!?

マサル「行くぞ！シャイングレイモン！！」

シャイングレイモン「ああ！グロリアスバースト！！」

バイオベルゼブモンに向かって火の玉が打ち込まれる。

Bベルゼブモン「フン！」

ドーン

もろに当たる、が

Bベルゼブモン「グロリアスバースト！！」

マサル「なに！」

倉田「言い忘れましたけど、このバイオベルゼブモンは相手の技をコピーできるのでよー！」

マサル「ダメエー！」

シャイングレイモン「ぐはあー！」

マサル「シャイングレイモン！大丈夫か？」

シャイングレイモン「ち、力が入らない・・・」

トーマ「行くぞ！ミラージュガオガモン！！」

ミラージュガオガモン「イエス！マスター！ダブルクレセントミラージュ！！」

Bベルゼブモン「ダブルクレセントミラージュ！！」

ミラージュガオガモン「くっ！マスター指示を！」

トーマ「どうすれば・・・レイヴモン達は・・・」

デュークモン「こうなったら・・・タカト！」

タカト『うん！！』

デュークモン・タカト「うおおおー！デュークモン クリムゾンモード！！」

デュークモンC「インビジブルソード！！」

Bベルゼブモン「くっ！」

デュークモンC「どうだ！」

Bベルゼブモン「くっくくくくく・・・」

デュークモンC「なにがおかしい！」

Bベルゼブモン「初めてだ・・・オレ様の体に傷を付けるとは・・・

」

マサル「俺たちはバーストモードだ!!」

トーマ・ヨシノ・イクト「デジソウル・バースト!」

ミラージュガオガモン「はああああ・・・」ミラージュガオガモン
バーストモード!」

ロゼモン「はああああ・・・」ロゼモン バーストモード!」

レイヴモン「はああああ・・・」レイヴモン バーストモード!」

Bベルゼブモン「たかが、形が変わっただけじゃないか・・・」

倉田「気を付けるのです!バイオベルゼブモン!奴らはスピードが
上がっています!」

Bベルゼブモン「ああ・・・」

レイヴモンB「スパイラルレイブンクロー!」

Bベルゼブモン「なっ!速い!くっ!」

??「俺たちを忘れてもらって困るな」

Bベルゼブモン「なにっ!いつの間に後ろに・・・」

そこにはジャステイモンがいた。

ジャスティモン「ジャスティスキック!!」

Bベルゼブモン「くっ!!」

派手に吹っ飛んだ。

スレイヤードラモン「よしきた!天竜斬破!!」

フラガツハを構え、斬りつける。

Bベルゼブモン「ぐはっ!!」

Bベルゼブモン「調子に乗るな!!カオスフレア!!」

セントガルゴモン「まかして・・・バーストショット!!」

ドガン!!

攻撃を防いだ。

倉田「バ、バカな・・・バイオベルゼブモンが押されているだと・・・わ、私の最高傑作が・・・」

マサル「どうだ!!これが俺たちの力だ!!」

倉田「そ、そんなものは、認めません!!絶対!やっておしまい!バイオベルゼブモン!!」

Bベルゼブモン「ファイナルエリシオン!!」

デュークモンC「なに！」

ミラージュガオガモンB「し、しまった！！」

ドーン！！

トーマ「ミラージュガオガモン！！」

シュー

煙の向こうにはミラージュガオガモンが立っていた。

空からの鎖がガードした。

??「なんとか、間に合った・・・」

トーマ「あなたは・・・」

空の雲の切れ間から彼らのよく知っているデジモンが現れた。

デュークモンC「チンロンモン！！」

チンロンモン「すまない、遅れてしまった・・・他の者もそろっとつく頃だ」

スーツエーモン「我等の領地を汚す奴め・・・許さない！」

シェンウーモン「おやおや、ベルゼブモンが2体も・・・ほっほっほっほっ！」

バイフーモン「シェンウーモンよ！笑っている暇ではないぞ！」

シェンウーモン「分かっておる、分かっておる！」

倉田「四聖獣ですか・・・この世界のデジタルワールドの神と呼ばれしデジモン達・・・面白い！」

シュンウーモン「そちのやっていることは、ちとやり過ぎじゃ〜！」

スーツエーモン「笑ってごまかせるものではない！我の怒り思い知れ！！紅蓮！！」

Bベルゼブモン「くっ！ぐはぁ〜！」

バイオベルゼブモンは炎に取り込まれる。

倉田「さすがは、四聖獣！しかし、そんな攻撃は通用しません！！バイオベルゼブモン！！」

Bベルゼブモン「うぉ〜〜！！」

??「そこまでじゃ〜！！」

倉田「そ、その声は・・・」

空に黒い雲が浮かぶ。

雲から、鎖のような物でバイオベルゼブモンを押さえつけている。

??「倉田博士、今回は様子見と言ったはずだ！」

倉田「ええ！だから全員の攻撃を見ていたのですよ！」

??「まあ、良い！引き上げてこい！」

倉田「分かりました！行きますよバイオベルゼブモン！」

倉田はバイオベルゼブモンにつかまると雲へと姿を消した。

??「さて、久しぶりじゃな！四聖獣の諸君！」

スーツエーモン「その声は！？やはりお前か！バルバモン！！」

バルバモン「いかにも！今は声だけじゃがな・・・」

バイフーモン「貴様は封印されたはずじゃ・・・」

バルバモン「いかにも、我等七大魔王はその昔封印された・・・しかし、あの倉田博士が我等の封印を解いたのだ・・・」

チンロンモン「なんてことを・・・」

バルバモン「そのうちに貴様らと一戦交えることになるじゃろう！そのときまで顔を洗って待っておるんじゃ！！サラバじゃ！！」

そう言うと黒い雲は消えた。

第21章 闇の黒幕 バルバモン登場!?(後書き)

ついに、動き出した闇の黒幕・・・

果たして、タカト達は食い止めることができるのか!?

そして、デジタルワールドの運命はいかに!?

次回もお楽しみに!!

第22章 暗黒の女神 リリスモン降臨！？（前書き）

バルバモン「どうだ、倉田よ！」

倉田「計画は順調ですよ！このバイオベルゼブモンをさらに強化し、より強くさせます！」

バルバモン「ほう〜！」

倉田「でも、まだデジモンエネルギーが足りません・・・集めるしかないですね・・・」

バルバモン「なら、あいつに任せよう・・・ワシから頼んでおくぞ！」

倉田「ええ・・・」（ふっ）

倉田はバルバモンには分からないように笑みをこぼした。

第22章 暗黒の女神 リリスモン降臨！？

スーツエーモン「大変なことになった・・・七大魔王が復活していたのは分かっていたが・・・あいつも復活していたとは・・・」

タカト「ねえ、そのバルバモンてそんなに強いのか？」

チンロンモン「ああ、強いも何もあやつは1回このデジタルワールドを破滅の危機に陥れた張本人だ！」

全員「な、何だって！！」

ジェン「そんな奴らと僕たちはこれから・・・」

マサル「何、見首ってんだ！そんな強い奴がいるならわくわくするじゃないか！なあ、アグモン！！」

アグモン「そうだよ！アニキ！！俺たちでバルバモンを倒そうぜ！！」

マサル「おう！その息だ！！」

？？「大変だあ~~~~！！」

そこへ、ウッドモンが駆け込んで来た。

ルキ「どうしたの？」

ウッドモン「はあはあ、落ちついていいてくれ！」

お前が落ち着けと全員が思った。

ウツドモン「七大魔王の軍団がオレらのエリアに攻めてきたんだ！」

全員「な、何だって!!」

全員の声が面白いほど重なる。

マサル「バルバモンか！」

ウツドモン「分からない・・・」

トーマ「そうか・・・。とりあえず行ってみよう!!」

ティマー達は光の柱に入った。

全員「うわぁ」

ドサッ!

目的のエリアに着いた。

マサル「ここかぁ・・・」

辺り一面が岩場だった。

??「何ものだ!まさか、我々に逆らっている奴らか?」

岩の上に1体の魔王型デジモンがいた。

タカト「バルバモンじゃない・・・」

??「バルバモンのじいさんのほうが良かったのかい？私はリリスモン！七大魔王の一人だ！！」

ブワーン

タカトがデジヴァイスを取り出し、データを見る。

タカト「リリスモン、魔王型デジモン究極体、ウィルス種、七大魔王、必殺技はファントムペイン！」

リリスモン「まずは、お前達の実力を見せてもらおうかい！行きな！お前達！！」

そつ一声掛けるとリリスモンの後ろから、たくさんのデスモンとたくさんのカラテンモンが現れた。

リリスモン「やっておしまい！！」

デスモン軍「デスアロー！！」

一気に攻撃を仕掛けてきた。

マサル「好きにはさせるか！！」

攻撃をよけながら、マサルは近くにいるデスモンに向かって走り出した。

マサル「おらあゝ!!」

バキッ!

デスモン「ぐはあっ」

たまらず、後ろへ吹っ飛ぶ。

シュルルル

マサルの手にデジソウルがたまる。

マサル「行くぞ! アグモン!!」

アグモン「任せて! アニキ!!」

マサル「デジソウルチャージ! オーバードライブ!!」

アグモン「アグモン、進化!!」

アグモンのデータの上に新たなデータが上書きされていく。

??「シャイングレイモン!!」

タカト「僕たちも行こう!」

タカト・ジェン・ルキ・ヒロカズ・リョウ・リュウタ「マトリック
ス・エボリュウション!!」

ギルモン「ギルモンゝ進化ゝ!!」

タカトとギルモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「デュークモン!!」

テリアモン「テリアモン、進化!!」

ジェンとテリアモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「セントガルゴモン!!」

レナモン「レナモン、進化!!」

ルキとレナモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「サクヤモン!!」

ガードロモン「ガードロモン、進化!!」

ヒロカズとガードロモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「ハイアンドロモン!!」

サイバードラモン「サイバードラモン、進化!!」

サイバードラモンとリョウが融合して新たなデータが生まれる。

??「ジャステイモン!!」

ドラコモン「ドラコモン、進化!!」

リュウタとドラコモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「スレイヤードラモン!!」

デュークモン「悪しき者達よ!このデュークモンが成敗してくれる
!」

デュークモン「ロイヤルセイバー!!」

デスモン「な、なにいゝ!!ぐ、ぐはあゝ!!」

一撃でデスモンはデータ化し消滅した。

リリスモン「ほうゝ!さすがは、ロイヤルナイツ・・・中々やるな・
・」

カラテンモン「衝撃羽!!」

マサル「交わせゝ!シャイングレイモン!後ろからだ!!」

シャイングレイモン「OK!!アニキ!!」

素早く軍団の後ろに回り込むと

シャイングレイモン「グロリアスバースト!!」

カラテンモン「な、なにいゝ!!ぐはあゝ!!」

こちらにも一撃で消滅。

ルキ『ちよつと！私達の出番がないじゃない・・・』

リヨウ『そうカツカするなよ・・・』

ルキ『あんたには言われたくない！』

リリスモン「ほうく！！中々やるねえく！！なら今度はわたしが相手だよ！！何人でも掛かってきな！！」

そう言うとりリスモンは岩から飛び降りると攻撃を仕掛けてきた。

リリスモン「ファントムプレーン！！」

第22章 暗黒の女神 リリスモン降臨！？（後書き）

ども！！Ryotaです！

リリスモンの登場です！！

タカト達はリリスモンを倒せるのでしょうか！？

次回に期待を！！

第23章 新たな黒い影・・・（前書き）

イクト「ねえ、ファルコモン・・・」

ファルコモン「なあに？イクト・・・」

イクト「あいつら、どこ行っただろうね？」

ファルコモン「さあ？」

ヒュッ

スーツエーモン「何をやっているんだお前達？」

イクト「あ！スーツエーモン！みんなはどこ？」

スーツエーモン「あ奴らなら七大魔王を倒すと言って光の柱でさつき行っただぞ！」

イクト・ファルコモン「何だって！！」

ファルコモン「どうしよう、イクト・・・僕らも後を追っかけよう！」

イクト「そうだね！進化だ！デジソウルチャージ！オーバードライブ！！」

ファルコモン「ファルコモン、進化！！」

ファルコモンのデータの上に新たなデータが上書きされていく。

??「レイヴモン！」

イクト「はあゝ！デジソウルバースト！！」

レイヴモンに新たなデータが上書きされていく。

??「レイヴモン バーストモード！！」

イクト「よし！行こう！！遅れた分を取り戻そう！」

レイヴモンB「ああ！イクト、しっかり掴まれ！」

イクト達は光の柱に入っていた。

第23章 新たな黒い影・・・

シャイングレイモン「くっ！な、何だ・・・っ、強い・・・」

デュークモン「ま、まさかこれほどまでとは・・・」

タカト達一行はほとんど全滅状態という危機に陥っていた。

リリスモン「ははははは！なんだいたいしたことないね！そんなじゃ、バルバモンのじいさんも倒せないよ！！」

マサル「うるせー！！」

マサルは殴りに掛かったが、呆気なくはじき飛ばされた。

マサル「ぐはあ！」

シャイングレイモン「アニキー！」

デュークモン「こ、こうなったら・・・アレしかない・・・タカト！！」

タカト「うん！」

デュークモン「はあー！デュークモン クリムゾンモード！！」

デュークモンC「これなら、どうだ！！インビジブルソード！！」

リリスモン「なに！速い！ぐっ！・・・まさか、まだ、力が残って

いただと・・・」

デュークモンC「このデュークモン、悪しき者を倒すまで、やられはしない!!」

リリスモン「ほざきよって!ファントムペイン!!」

デュークモンC「あまい!!インビジブルソード!!」

リリスモン「なに!ぐっ!こうなったら・・・まずはお前からだ!ファントムペイン!!」

デュークモンC「しまった!」

近くに瀕死状態で倒れていた、セントガルゴモンに飛び込んでいった。

??「そうはさせない!!」

マサル「イクト!!」

レイヴモンB「怒涛闇供喪之舞!!」
どとうやみくものまい

リリスモン「なにっ!しまった!!ぐはっ!」

大きなダメージを与えた。

イクト「俺たちを忘れるなよ!!」

リリスモン「こ、この野郎・・・!」

レイヴモンB「まだ、生きていたのか!!」

デュークモンC「みんな!動けるか!一斉攻撃だ!!インビジブル
ソード!!」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル!!」

サクヤモン「金剛界曼荼羅!!」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ!!」

ジャステイモン「トリニティーアーム!!」

シャイングレイモン「グロリアスバースト!!」

ミラージュガオガモン「ダブルクレセントミラージュ!!」

ロゼモン「フォービドゥンテンプレーション!!」

リリスモン「ま、まさか、お前達にこれほどの力が・・・!ぐっ!」

デュークモンC「どうだ・・・!まさか、まだ生きている・・・」

スレイヤードラモン「これならどうだ!!トドメの三連続!!」

リュウタ『まずは、一発目!!』

スレイヤードラモン「天竜斬破!!」

リリスモン「くそっ！ぐっ！」

リュウタ『お次は、二発目！！』

スレイヤードラモン「昇竜斬波！！」

リュウタ『最後の三発目だ！！』

スレイヤードラモン「咬竜斬刃！！」

最終的にフラガツハを相手に巻き付け体を削る。

リリスモン「おのれ！！ちくしょう……」

リリスモンはデータ化し消滅した。

スレイヤードラモン「ふう……終わった！！お疲れ、リュウタ」

リュウタ『中にいると結構、疲れるぜ！』

セントガルゴモン「あいつは手強かったな……！ねえ？ジェン！僕たちに倒せるかな？」

ジェン『分からない！でも、やれることはありそうだ！』

デュークモンC「とりあえず、四聖獣のところへ戻ろうか！」

全員「おう！！」

ティマーズ一行は飛び立ち、四聖獣のところへと向かった。

第23章 新たな黒い影・・・（後書き）

ザッ

テイマーズ達は気づかなかったが、岩場の上に1体かのデジモンが現れていた。

??「ほうっ！あのリリスモンを倒すとは・・・中々やるなっ面白
い！！」

後ろから、もう一体のデジモンが現れた。

??「そんなに、面白いのか？なら我々の出番だな・・・」

??「何だよ！結局やるのかよっ！」

??「当たり前だ！今、このデジタルワールドは危機に陥っている
のだから・・・」

??「へいへい・・・じゃ！後でな！！」

そう言うと1体のデジモンが飛び立った。

??「ふうっヤレヤレ・・・」

――
どうも！！Ryotaです！！

さて、最後に出てきたデジモン達！！

彼らは、敵か味方か！？

次回！！明らかに！！

お楽しみに！！

第24章 聖騎士団ロイヤルナイツ集結！！（前書き）

??「チリンモンから命が出た。奴らと合流しろとのことだ！」

??「誰が行くのだ？」

??「四人ほどで行く！私とお前とお前とお前だ！」

剣を指した。

??「おいおい！名前で言ったらどうだ！読者が分からないじゃないか！」

??「あとで、名前がハッキリするから大丈夫だ！これも一応読者へのサービスだ！では、行くぞ！」

四人の黒い影は飛び立った。

第24章 聖騎士団ロイヤルナイツ集結！！

マサル「ふぁ~~~~！！」

ヨシノ「こら！マサル！何大きなあくびをしているの！シャキッと
しなさい！」

マサル「良いじゃないかよ！敵が攻めてこないから暇なんだよ！な
んか、こう、大軍が攻めてきた！とかさあ〜」

タカト「大変だぁ〜敵が大軍で攻めてきた！！」

タカトが駆け込んで来た。

マサル「言っているそばからマジかよ！！行くぞ！アグモン！！」

アグモン「ムニャムニャ・・・。アニキ〜もう腹いっぱいだよ〜！」

アグモンは気持ちよさそうに寝ていた・・・

マサル「なに、気持ちよさそうに寝ているんだ！バカ野郎！」

アグモン「ふにゃ〜！どうしたの？アニキ！」

マサル「敵が攻めてきたんだよ！！」

アグモン「本当か！よし〜行こう！アニキ！！」

マサル「さっきまで寝ていたくせに・・・」

外へ出ると、早速みんなは戦っていた。

デスモンの大量軍団だ。

デスモン「バルバモン様！万歳〜！！デスアロー！！」

マサル「うお〜！！」

マサルは走り出すと1体のデスモンを殴りつける。

バキッ！

デスモン「ぐはあ〜！」

マサル「行くぞ！！アグモン！！」

アグモン「任せて！！」

マサル「デジソウルチャージ！オーバードライブ！！」

アグモン「アグモン、進化！！」

アグモンのデータに新たなデータが書き込まれる。

??「シャイングレイモン！！」

セントガルゴモン「遅いよ〜！！」

シャイングレイモン「遅れた分を取り戻すぜ！！グロリアスバース

「！」

デュークモン「ファイナルエリシオン!!」

あちらこちらで攻撃が放たれる。大半のデスモンが消滅していった。

「がっはっはっはっはっはっはっ！」

奥の方から笑い声が聞こえてきた。

「さあ！今日は俺一人の出番だ！！」

デュークモン「お、お前は！！！！！！」

「また、忘れたのか!!」

セントガルゴモン「えっ」と……あっ！ブリッジグラウモン！！」

ブリッジグラウモン「違うし！！何でまた橋になっているの？ブラツクグラウモン！！しかもカギカツコの前までその通りになっているし！！作者を混乱させるな！！」

Ryota「えっ？混乱してないよ！！」

ブラックグラウモン「えっ？じゃないよ！！しかも出てくるな！世界観が壊れるだろう！！」

Ryota「いやあ〜!!」
(ポリポリ)

B「グラウモン、誉めてない！」

Bグラウモンは突っ込んだ。

Bグラウモン「ブラックグラウモン、進化〜!!」

??「ブラックメガログラウモン!!」

Bメガログラウモン「スピードをましたオレを見よ!!アトミック
ブラスター!!」

デュークモン「遅い!!そんな攻撃はこのデュークモンには通用し
ない!!」

Bメガログラウモン「ふっ!これならどうだ!!アトミックプラス
ター!!」

素早いスピードで動きデュークモンの後ろに回る。

デュークモン「し、しまった!」

Bメガログラウモン「勝負あったな!トドメのアトミックプラス
ター!!」

赤い光線が放たれた。

ドガン!!

Bメガログラウモン「はっはっはっはっ!!」

??「ふう〜!ギリギリ間に合った。情けないぞデュークモン!そ

れでもロイヤルナイツか！」

Bメガログラウモン「なにいゝ！！！」

??「オレは、ロイヤルナイツの一員、クレニウムモンだ！！！」

??「まだ、いるぞ！！！」

空から三つの光が降り注ぐ。

??「同じくロイヤルナイツの一員、ドウフトモン！！！」

??「同じくロイヤルナイツの一員、オメガモン！！！」

??「同じくロイヤルナイツの一員、デユナスモン！！！」

クレニウムモン

世代：究極体

タイプ：聖騎士型

種：ワクチン

必殺技：エンド・ワルツ

ロイヤルナイツ

ドウフトモン

世代：究極体

タイプ：聖騎士型

種：ワクチン

必殺技：アウスタースターベイン

ロイヤルナイツ

オメガモン

世代：究極体

タイプ：聖騎士型

種：ワクチン

必殺技：ガルルキャノン

ロイヤルナイツ

デユナスモン

世代：究極体

タイプ：聖騎士型

必殺技：プレス・オブ・ワイバーン

ロイヤルナイツ

Bメガログラウモン「な、なぜロイヤルナイツがあゝ！！ちっ！深
追いをするなと言われているから・・・！撤退だあゝ！！」

そう叫ぶとメガログラウモンを戦闘に逃げていった。

オメガモン「さてと、敵が逃げたことだし・・・中に入って話を聞
いてもらうか！」

そう言うと、オメガモンを戦闘に城に入っていった。

第24章 聖騎士団ロイヤルナイツ集結!!（後書き）

ロイヤルナイツの登場!!

都合により四人でお送りします!!

もし、他にも出してくれ!!と言う声がありましたら・・・

お手数ながら、ロイヤルナイツのデジモンの名前と詳細情報をお願いします!

次回も波乱の予想あり!?

お楽しみに!!

第25章 ロイヤルナイツの試練！（前書き）

デスモン「大変です！！奴らがロイヤルナイツと合流した模様です！！！」

バルバモン「ほぉー！倉田博士！例の物は？」

倉田「もう少し、調整が必要です！もう暫く時間が掛かります・・・」

バルバモン「では、準備でき次第、攻撃開始だ！対ロイヤルナイツで行くぞ！！！」

倉田「任せてください！」

第25章 ロイヤルナイツの試練！

オメガモン「では、単刀直入に言おう！今の君たちの力では、バルバモンは倒せない！」

マサル「何だとー！！」

ヨシノ「マサル！」

ヨシノがマサルを制した。

オメガモン「そこでだ、我等ロイヤルナイツが代わりに倒すと言う結論になる・・・」

マサル「待てよー！！」

クレニアムモン「話は最後まで聞け！」

オメガモン「が、我等が守りしチイリンモンはそうは言わなかった。」

タカト「どういうこと？」

オメガモン「我等が君たちを鍛える結論となったー！！」

マサル「まじかー！！」

オメガモン「我等は今四人しかない・・・オレとクレニアムモンのペアとデユナスモンとドウフトモンのペアに分かれてもらう！」

ジエン「どうやって分けるの？」

オメガモン「それは・・・」

スーツエーモン「ちよつと待った！！その話、我等、四聖獣も手伝わせてもらうぞ！それだけじゃない！一二神も手伝デーヴァうぞ！」

ジエン「え？でもデーヴァ達は・・・」

チンロンモン「我等の實力をなめないでもらいたい・・・。再構築に成功した！！入ってこい！」

??「はっ！！」

12体の完全体のデジモンが入ってきた。干支の順番で。

ネズミの形をしたデジモン。

牛の形をしたデジモン。

虎の形をしたデジモン。

辰の形をしたデジモン。

蛇の形をしたデジモン。

馬の形をしたデジモン。

羊の形をしたデジモン。

猿の形をしたデジモン。

鶏の形をしたデジモン。

犬の形をしたデジモン。

最後に猪の形をしたデジモン。

兎の形をしたデジモンだけ居なかった。

恐らく、リアルワールドのいつもの場所に・・・

リアルワールド
～現実世界～

ロップモン「は、はくっしょん!!」

小春「どうしたの? ロップモン? 風邪ですか? それはいけませんね」

ロップモン「あ、待つのだ小春! たぶん、誰かが我の噂をしているなり」

小春「あ! まて『我』と『なり』って言った!! もう!!」

ロップモン「あっ!! あははは・・・」

ロップモンは嫌な予感がした・・・

～デジタルワールド～

デーヴァ
一二神達全員が姿を現した。

クンビラモン

世代：完全体

タイプ：聖獣型

種：ワクチン種

デーヴァ
一二神

ヴァジラモン

世代：完全体

タイプ：聖獣型

種：ワクチン

デーヴァ
一二神

ミヒラモン

世代：完全体

タイプ：聖獣型

種：データ

デーヴァ
一二神

マジラモン

世代：完全体

タイプ：聖竜型

種：データ

デーヴァ
一二神

サンティラモン

世代：完全体

タイプ：聖獣型

種：ウィルス

デーヴァ
一二神

インダラモン
世代：完全体
タイプ：聖獣型
種：ウィルス
デーヴァ
一二神

バジラモン
世代：完全体
タイプ：聖獣型
種：ウクチン
デーヴァ
一二神

マクラモン
世代：完全体
タイプ：聖獣型
種：ウィルス
デーヴァ
一二神

シンドウーラモン
世代：完全体
タイプ：聖鳥型
種：データ
デーヴァ
一二神

チャッツラモン
世代：完全体
タイプ：聖獣型
種：ウクチン

デーヴァ
一二神

ウィンガラモン

世代：完全体

タイプ：聖獣型

種：デー
デーヴァ
タ

一二神

タカト「すごい！でもどうやって特訓をするの？」

オメガモン「その点に関しては大丈夫だ！特訓中は外のことを気にするな！この城の見張りは四聖獣たちがやってくれるそうだ・・・だから、気にせず続けること！期間は二週間だ！！それまでは、担当のデジモンの言うことを聞くこと！以上だ！！」

クレニウムモン「では、分かれようか！」

チンロンモン「二週間後の成長ぶりを期待しているぞ！」

タカト達はそれぞれ別れて別々の部屋へ入っていった。

第25章 ロイヤルナイツの試練！（後書き）

さて、次回からは特訓を中心に描いていきたいと思っています！

メンバーごとに書いていきたいと思っています！！

次回もお楽しみに！！

第26章 ロイヤルナイツの試練 〈タカト編〉（前書き）

オメガモン「これから始める！君たちの担当は私だ！あとはデーヴァのミヒラモンとバジラモンとヴァジラモンだ！」

タカト「これから、何をするの？」

オメガモン「では君たちに試練を与える！！私を捜せ！」

ジェン「どういう意味？」

オメガモン「これからこの部屋のどこかに私の部屋に入れる鍵を隠す。それを見つけることそして3つそろったとき、私の居る部屋に入れるのだ！この部屋にはまだたくさんの広い部屋があるからな！勿論、それを守っているのがデーヴァ達だ彼らと戦って手に入れてくるのだ！」

ルキ「究極体でもいいの？」

オメガモン「それは君たちで決めてくれ！究極体でもいいぞ！では先に奥の部屋で待つて居るぞ！」

そう言うとおメガモンは奥の部屋へと姿を眩ました。

デーヴァ達も姿を眩ましていた。

ジェン「と言うことは、デーヴァ達は3体、三人で別れる！てことかな？手分けして探そう！見つけたら部屋の前で待つことにしよう！」

タカト・ルキ「うん！」

タカト・ジェン・ルキ「マトリックス・エボリュウション！！」

ギルモン「ギルモンゝ進化ゝ！！」

タカトとギルモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「デュークモン！！」

テリアモン「テリアモン、進化！！」

ジェンとテリアモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「セントガルゴモン！！」

レナモン「レナモン、進化！！」

ルキとレナモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「サクヤモン！！」

タカト『よし！じゃ、また後で！！』

三人はそれぞれに散らばった。

第26章 ロイヤルナイツの試練 くタカト編く

デュークモン「さて、どこから手を付けたらいいものか・・・」

タカト『片っ端から行く?』

デュークモン「ここか!!」

扉を開けるとそこには!!・・・

何もなかった。

タカト『ハズレだね!』

デュークモンはこれを何回か繰り返した。

デュークモン「このエリアの最後の扉だ!開けるぞ!!」

ガチャ

??「待っていたぞ!しかし、遅かったな・・・」

デュークモン「お前は・・・ミヒラモン!!」

ミヒラモン「そうだ!1年前の怨みをはらす!!と言いたいところだがこれは試練だ!手加減はしないが、この前のはひと味違うぞ!上手くいくと思うなよ!!」

デュークモン「望むところだ!!こちらでも本気で行かしてもらおう

！ロイヤルセイバー！！」

ミヒラモン「ふん！遅い！！」

素早く避けた。

ミヒラモン「そのような程度か・・・ではこちらからいくぞ！はあ！！」

ミヒラモンの尻尾が鋭くとがった。

ミヒラモン「喰らえ！！」

デュークモン「くっ！！」

間一髪、盾で防ぐ。

ミヒラモン「ふはははは！！」

ガン、ギン、ガキン・・・

連続で仕掛けてくる。

デュークモン「くっ！ファイナルエリシオン！！」

ミヒラモン「なに！くっ！！」

こちらも、紙一重で攻撃をかわす。

ミヒラモン「ほう、中々だな・・・」

デュークモン「感心している場合ではない！！ロイヤルセイバー！！」

デュークモンが突っ込んできた。

ミヒラモン「なに！！くっ！」

かすった。

デュークモン「お前もタフだな・・・」

ミヒラモン「お前もな！！はぁ！！」

激しくぶつかり合う。

デュークモン「まだまだ！！ロイヤルセイバー！！」

ミヒラモン「そんなのもじゃ、バルバモンなど倒せない！！」

デュークモン「くっ！そうだ！」

デュークモンが何かひらめいたようだ。

タカト『くっ！どうすれば・・・』

デュークモン「タカト、このデュークモンに任せてくれ！上手いくかも知れない・・・」

タカト『本当！！』

デュークモン「ああ！」

ミヒラモン「どうした！！相手は隙を突いてくるぞ！！」

デュークモン「それを利用するのだ・・・」

デュークモンは上手く避ける。

ミヒラモン「なぜ、避ける、ガードをしないのか？」

デュークモン「それを利用したのだ！！」

ミヒラモン「まさか！！」

勢いを付けすぎたミヒラモンは止まれず、デュークモンを越える。

デュークモン「隙があるのはお前の方だ！！ファイナルエリシオン
！！」

ミヒラモン「し、しまった！！くはあ！！！！」

ドサッ！

デュークモン「勝負あったな！」

ミヒラモン「くっ！まさかそこを突いてくるとわな・・・恐れ入ったよ！」

デュークモン「では鍵を渡してもらおうか！」

ミヒラモン「ああ・・・ほらよ受け取れ!!」

鍵がどこからともなく姿を現した。

デュークモン「確かに受け取ったぞ!しかし、これで強くなれるのか?」

ミヒラモン「確かに疑うかも知れないが、あの部屋に入ればすべてが分かるハズだ!」

デュークモン「なるほど・・・」

そう言うとデュークモンはミヒラモンの部屋を後にした。

第26章 ロイヤルナイツの試練 くタカト編く (後書き)

ロイヤルナイツの試練が始まりました!!

予定では、今回から「く編」と言う形で一人一人を描いてゆくつもりです!!

次回にもご期待を!!

次回もお楽しみに!!

第27章 ロイヤルナイツの試練 ～ジェン編～

セントガルゴモン「こ、こんなに扉が・・・どうしよう・・・」

ジェン『片っ端から探す?』

セントガルゴモン「そうだ!! 任せて!! バーストショット!!」

ジェン『ちょ、ちよつと!!』

ジェンが止める暇もなく無数のミサイルが放たれた。

ドドーン!!

ジェン『あちゃ～』

??「ひどい入り方だな～メエ～!!」

セントガルゴモン「その声は!!」

??「私だ! バジラモンだ!!」

セントガルゴモン「よし! お前を倒せば良いんだな～!!」

バジラモン「焦るでない!! 鍵はあそこにある。」

と奥を指さした。

セントガルゴモン「よし! やってやるぞ!! バーストショット!

！」

バジラモン「メェ〜！！」

大音量がたたきつけられた。

無数のミサイルは音の衝撃羽で消滅した。

セントガルゴモン「そ、そんな〜！！なら、これならどうだ！！ジヤイアントミサイル！！」

バジラモン「メェ〜！！」

これもまた、呆気なく消滅した。

セントガルゴモン「そんな〜！！ジエン、どうしよう！！」

ジエン『こうなったら、接近戦だ！！』

セントガルゴモン「分かった！！いくぞ〜！！」

セントガルゴモンはバジラモンに向かって突進した。

バジラモン「これでも喰らえ！！」

弓を抜き出し放った。

セントガルゴモン「何のこれしき・・・！！」

バジラモンの目の前まで来た。

セントガルゴモン「そ〜れ〜！！うりゃ〜！！」

ジエン『はあ〜！！！！』

バキツ！！

バジラモン「ぐっ！！」

ドーン！！

バジラモンは後ろに吹っ飛んでいった。

セントガルゴモン「どうだ！！」

バジラモン「中々だな・・・でも、まだだ！！」

そう言うのと弓を抜き大量に矢を抜きはなつた。

セントガルゴモン「バーストショット！！」

ミサイルは矢に当たり爆発する。

それでも、まだ矢はまだ残っていた。

セントガルゴモン「そ、そんな〜！！う、うわあ〜！！」

無数の矢がセントガルゴモンを直撃した。

バジラモン「どうした、そんなものか！！そんなのではバルバモン

など先の話だ!!」

セントガルゴモン「そ、そんなのは分かっているよ!!まだまだ・・
」

そう言うセントガルゴモンは立ち上がった。

バジラモン「まだ立てるのか!!これで最後だ!!」

バジラモンは弓を抜き放ち無数の矢を抜き出す。

セントガルゴモン「はあ!!」

セントガルゴモンはバジラモンに向かって突進した。

矢が一気に放たれた。

矢がセントガルゴモンに向かって行く。

矢がセントガルゴモンに当たる。・・・が、それを何ともないかの
ようにそのまま突き進む。

バジラモン「な、なに!!あれほどの矢が当たっているのに・・・
」

セントガルゴモン「トドメだ!!はあ!!」

セントガルゴモンの鉄拳が飛び出す。

バキッ

それは今までに無いくらいの音が響いた。

セントガルゴモン「ぐはぁー!!」

ドーン!!

吹っ飛び、壁に激突する。

バジラモン「さ、さすがだ・・・まさか矢の中を突き進むとは・・・」

セントガルゴモン「さあ、鍵を渡してもらおうか!」

バジラモン「ああ!受け取れ!!」

セントガルゴモンの前に鍵が現れた。

セントガルゴモン「終わった・・・」

シュワーン

進化が解け、テリアモンとジェンに分離した。

ドーン!!

どこからか、地響きが聞こえた。

バジラモン「どうやら向こうも決着がついたみたいだな・・・」

ジェン「そうみたいだね・・・行こう！！テリアモン！」

テリアモン「うん！」

よつと、と言ってジェンの頭の上に乗る。

バジラモン「ジェン、テリアモン、奥の部屋にはこれよりももっときつくなっているだろう・・・せいぜい頑張るのだ！」

テリアモン・ジェン「うん！（任せてよ！）」

ジェン達は部屋を後にした。

第27章 ロイヤルナイツの試練 〱 ジェン編 〱 (後書き)

ロイヤルナイツの試練〱ジェン編〱、無事終了しました!!

次回はルキ編です!!

次回もお楽しみに!!

第28章 ロイヤルナイツの試練 くルキ編く

サクヤモン「こんな数の扉があるなんて・・・」

目の前には無数の扉があつた。

ルキ『どうにかならない?』

サクヤモン「わかった。やってみる・・・」

サクヤモンは意識を集中させた。

サクヤモン「わかった!!あの部屋だ・・・たぶん・・・」

指を指した部屋に向かった。

ガチャ

扉を開けた。

??「なんだ・・・一発で見つけるとは・・・さすがだ・・・」

目の前にデジモンが1体いた。

サクヤモン「ヴァジラモン!!」

ヴァジラモン「久しぶりだな・・・お前の美しい戦いをまた見せて頂こう!!」

サクヤモン「望むところだ！飯綱！」

三匹の管狐くだぎつねを放つ。

ヴァジラモン目指して一直線に向かった。

ヴァジラモン「そんなものを効くか！！はっ！」

剣を抜き放ち、弾く。

ヴァジラモン「今度はこちらから行くぞ！！はっ！！」

ヴァジラモンは走り出し、サクヤモンに斬りかかる。

ガキンッ

金剛錫杖こんごうしゃくじょうで防いだ。

ヴァジラモン「お主もなかなかやるな・・・はっ！」

後ろへ交代した。

サクヤモン「金剛界曼荼羅！！」

ヴァジラモン「はっ！！」

これもまた弾く。

サクヤモン「なっ！！」

ヴァジラモン「こっちから行くぞ！！ローダ！！」

剣を地面にたたきつけた。

そこからサクヤモンめがけて地割れが起きた。

サクヤモン「はっ！！」

サクヤモンは宙へと逃げる。

ルキ『どうしよう・・・ねえサクヤモン！あいつよりも速く動いて後ろへ回り込めばどうかな？』

サクヤモン「わかったルキ！やってみる」

ヴァジラモン「どうした！宙に浮いてないで降りてきたらどうだ！！」

サクヤモン「わかつている・・・」

サクヤモンは地面に降りた。

ヴァジラモン「ローダ！！」

サクヤモン「弧封札！！」

地割れ手前で爆発し、土煙が上がる。

姿が相手方も見えないようだ。

ルキ『今よ!!』

サクヤモン「ああ!はっ!」

サクヤモンは素早く動く。ヴァジラモンの後ろに音もなく忍び寄る。

ヴァジラモン「どこだ!!」

ヴァジラモンはキョロキョロしている。

サクヤモン「私はここだ!!」

ヴァジラモン「なにっ!しまった!!」

サクヤモン「金剛界曼荼羅!!」

ヴァジラモン「ぐはあ!!」

まともに喰らい、後ろへ吹っ飛ぶ。

ドーン!!

壁に激突した。

ヴァジラモン「さすがはサクヤモン……どうやら、オレの負けのようだ……頭脳戦はニガテのようだ……受け取れ!!」

鍵が現れた。

ドーン!!

どこかで地響きが聞こえた。

ヴァジラモン「どうやら向こうも決着がついたみたいだな・・・」

サクヤモン「そうみたいだな・・・」

サクヤモン「ひとつ、聞きたいことがある・・・この先に、何が待っているのだ？」

ヴァジラモン「それについてはオレでも分からん・・・だがとてつもなく大変なだろう・・・」

サクヤモン「そうか・・・」

そう言うときサクヤモンは部屋を後にした。

第28章 ロイヤルナイツの試練 ㄱルキ編ㄱ（後書き）

ロイヤルナイツの試練ㄱルキ編ㄱ 無事終了しました!!

今回は、オメガモンの試練!!

どうなる!?

タカト達は無事に試練を乗り越えられるのか!?

次回にご期待下さい!!

お楽しみに!!

第29章 ロイヤルナイツ オメガモンの試練！！（前書き）

タカト「あっ！ジェン、倒したんだね！」

ジェン「ああ、手こずったけどね・・・」

ルキ「二人とも、もう終わったの？意外と速かったわね・・・」

タカト「ルキ！良かった、二人ともクリアしたんだね・・・」

ルキ「当たり前でしょ！」

ジェン「じゃ、中に入ろうか！」

三人は鍵を取り出し、それぞれの鍵穴に鍵を挿した。

ガチャ

扉の鍵が開く音がして

ゴゴゴゴゴゴ・・・

扉が開いた。

第29章 ロイヤルナイツ オメガモンの試練！！

「待っていたぞ！ なかなか、速かったな！」

目の前にはオメガモンが立っていた。

テリアモン「合格でしょう？」

オメガモン「いや、まだだ！次は私が相手だ！！」

タカト・ジェン・ルキ「ええええええ〜!!」

オメガモン「手加減はなしだ！！私に勝つてこそ試練のクリアだ！！」

ギルモン「ギルモン、お腹すいた〜!!」

オメガモン「敵はそんなのでは待たないぞ!!」

タカト「分かった！！やるしかないみたいだ！！」

タカト・ジェン・ルキ「マトリックス・エボリュウション！」

ギルモン「ギルモン、進化！！」

ギルモンとタカトが融合して新たなデータが生まれる。

「デュークモン!!」

テリアモン「テリアモン、進化！！」

テリアモンとジェンが融合して新たなデータが生まれる。

??「セントガルゴモン！！」

レナモン「レナモン、進化！！」

ルキとレナモンが融合して新たなデータが生まれる。

??「サクヤモン！！」

オメガモン「では、行くぞ！！試練の開始だ！！」

デュークモン「ファイナルエリシオン！！」

オメガモン「ガルルキャノン！！」

攻撃がぶつかり合う。

ドガンー！！

オメガモン「さすがは我が盟友・・・だがここからだ！！」

シャキーン

グレイモンの顔の形をした手からソードが伸びた。

オメガモン「グレイソード！！」

デュークモンに斬りかかる。

ガキン！！

盾でガードした。

デュークモン「ぐぬぬぬ．．．力が強い！！」

セントガルゴモン「ちょっと！僕たちを忘れないでよ！！バースト
ショット！！」

オメガモン「あまい！！」

ミサイルを避けようとした。しかし、追ってくる。

オメガモン「なにっ！！」

セントガルゴモン「追尾式だよ！！」

オメガモン「くっ！ガルルキャノン！！」

デュークモン「ファイナルエリシオン！！」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル！！」

サクヤモン「金剛界曼荼羅！！」

オメガモン「し、しまった！！．．．」

ドーン！

空中のオメガモンに命中する。

デュークモン「どうだ！」

目の前には、オメガモンが浮いていた。どうやら、マントで防いだようだ。

オメガモン「なんてね・・・ガルルキャノン!!」

セントガルゴモン「そんな～あれだけの攻撃を・・・」

デュークモン「ファイナルエリシオン!!」

攻撃が激突する。

煙が舞い上がる。

デュークモン「まだだ!!」

煙を突き破り飛び出してきた。

デュークモン「ロイヤルセイバー!!」

オメガモン「なに!!グレイソード!!」

オメガモン「ダメだ!!まだ、無駄な動きが目立っているぞ!!」

デュークモン「なら、これならどうだ!!っおおおお!!」

デュークモンC「デュークモン クリムゾンモード!!」

オメガモン「それだ!その息だ!!」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル!!」

サクヤモン「飯綱^{いじな}!!」

オメガモン「ガルルキャノン!!」

呆気なくはじき飛ばされる。

オメガモン「なっ!!ぐっ!!」

また、マントで防いだ。

デュークモンC「インビジブルソード!!」

オメガモン「グレイソード!!」

ガキン

デュークモンC「ぐぬぬぬぬ・・・」

オメガモン「はああああ」

二人のソードがぶつかり合う。

セントガルゴモン「今、撃ったらデュークモンまで当たってしまう・
・せめて、オメガモンだけでも狙えたら・・・」

サクヤモン「やめましょう・・・今はあの二人の戦いよ！邪魔はできない・・・見守るだけよ！」

ガキン、ガキン、ガキン

激しくぶつかり合う。

デュークモンC「この1撃にすべてを賭ける!!」

オメガモン「なら私も同じだ!!」

デュークモンC「うおおおおお!!インビジブルソード!!」

オメガモン「うおおおおお!!グレイソード!!」

二人の英雄がぶつかり合う。

ガキン!

オメガモンのソードが折れた・・・

そのまま、勢いで後ろに吹っ飛んだ。

オメガモン「なに!!」

ガチャ、ガチャ、

デュークモンが歩み寄る。

チャッ

ソードをオメガモンに向けた。

デュークモンC「勝負あつたな!!」

オメガモン「ああ、そうみたいだな・・・さすがは、我が盟友・・・
なかなかやるな・・・」

デュークモンC「試練はクリアかな？」

オメガモン「ああ！君たちのチームワークは最高だ!!私達が斬り
合っているときも何もしなかった。そこは、仲間を思つてこそ初め
てできることだ!!君たちなら、あいつを止めることができるかも
知れないな!!」

セントガルゴモン「僕たちは強いんだからね!!」

ジェン『君が自慢するなよ!!』

ジェンがすかさず、ツツコミを入れる。

みんな「あはははは・・・」

ようやく、試練をクリアしたという気持ちになれた。

だが、これからが本当の戦いの始まりだ!!

第29章 ロイヤルナイツ オメガモンの試練!!（後書き）

タカト達は、無事に試練をクリアしました!!

次回は、別のところで試練を受けている、リョウたちの方をお送り致します!!

次回は、どうなるのか!?

楽しみに!!

ドウフトモン「お前達の担当のドウフトモンだ!!」

リヨウ「で、何をするの?」

ドウフトモン「うん・・・そうだな・・・」

(決まってるのか?)

三人はそう思った。

ドウフトモン「かくれんぼだ!」

リヨウ・ヒロカズ・リュウタ「はあ?」

面白いほど三人の声が重なった。

ドウフトモン「ただのかくれんぼではない!ここに3つのデータがある・・・それをこの私からとるのだ!!」

ヒロカズ「ようするによ・・・そいつを奪えってことかあ!楽勝じゃん!」

ドウフトモン「それを私は盗られないように守る。これを盗った奴から抜けて良し!!」

リュウタ「じゃー早くやろうぜ!!」

ドウフトモン「焦るな！準備をして一時間後にこのゲートの先にあるところが集合だ！！勿論、究極体で来い！！では、解散！！」

そう言うとドウフトモンは移動した。

ヒロカズ「俺たちも行こうぜ！！究極体になつてさあ！！」

リュウタ「そうだな・・・」

リョウ・ヒロカズ・リュウタ「マトリックス・エボリュウション！！」

第30章 ロイヤルナイツの試験 〽リヨウ・ヒロカズ・リュウタ編〽 前編

1時間30分後・・・

ヒロカズ『遅い！！なにやっているんだ！！一時間後に集合って言うたくせに！』

リュウタ『なにか事情があるんじゃない！なんかこれっぽい言い訳してさー！！例えば道に迷ったとか・・・』

リヨウ『それはないんじゃない・・・』

ドウフトモン『やゝ諸君！！お疲れ！！』

リヨウ・ヒロカズ・リュウタ『遅い！！』

ドウフトモン『いやゝ道に迷ってなゝ！』

スレイヤードラモン『なんか、これっぽい言い訳している！！しかもさっき言っていた奴・・・』

ハイアンドロモン『そして、反省の色がない・・・』

ジャステイモン『早くしろー！』

ドウフトモン『じゃゝやろつかゝ！ルールは先ほど説明したとおりだ！では、始めるぞー！！』

スレイヤードラモン『先手はもらった！！』

スレイヤードラモンが素早いスピードで奪う盗ろうとした・・・が・・・

ドウフトモン「フライングはいかな・・・」

スレイヤードラモン「なっ！」

動きがあっさりと止められた。しかも腕1本で。

ドウフトモン「では、気を取りなして・・・開始だ!!」

と言った途端に姿を眩ました。

ハイアンドロモン「早い!!オレでも見えなかった・・・」

リョウ『俺たちはバラバラで探すか・・・俺たちはこっちに行くぜ!!』

そう言うジャステイモンは向こうの林の中へと入っていった。

スレイヤードラモン「俺たちも行くか・・・」

スレイヤードラモンは草原の方へと向かった。

ハイアンドロモン「ヒロカズ・・・どうする？」

ヒロカズ「そんなの決まっているだろう!空から探すんだよ!!!その方が早いだろう!!」

ハイアンドロモン「そうだな・・・行くか・・・!!」

ハイアンドロモンは空へと飛んでいった。

林の中のジャステイモン・・・

ジャステイモン「どこだ・・・？ここはハズレか・・・」

リョウ「めんどくせーし・・・林ごと吹っ飛ばすか・・・」

ジャステイモン「そうだな・・・トリニティーアーム!!」

腕を地面にたたきつけた。そこからの衝撃波で林の木は吹っ飛んだ。

辺りは野原みたいになった。

ジャステイモン「ハズレだ・・・」

リョウ「いや・・・あそこの林の部分も吹っ飛ばそう!」

ジャステイモン「トリニティーアーム!!」

それを暫く続けた・・・

ジャステイモン「やっぱり・・・ハズレか・・・戻ろう!」

リョウ「って・・・どこまで戻れば良いんだよ!!」

すべてを草原の様にしまい最初の場所が分からなくなった・・・

草原のスレイヤードラモン・・・

スレイヤードラモン「どこだ！え〜と居るのはライオンの群れと・・・ってなんでライオンが居るの？？まあそれはおいといて・・・あとはシマウマだろう・・・チーターに・・・あとは・・・それくらいか・・・肉食動物多いな！！シマウマ食われちゃうだろう！！」

リュウタ「あのさあ〜なんで一人で突っ込んでいるの？探そうぜ・・・」

スレイヤードラモン「ここには居ないのかな・・・」

リュウタ「引き返すか？・・・うん？アレは何だ・・・ライオンの群れの中に居る奴・・・」

スレイヤードラモン「どれだ・・・？」

リュウタ「ほら！あの真ん中に居る奴！！」

スレイヤードラモン「ん〜？あつ！明らかに他のとは違うぞ！まさかライオンに変身していたのか・・・」

リュウタ「どうする？行くか？」

スレイヤードラモン「いや、様子を見よう！まだ俺たちには気づい

ていないみたいだ!」

空のハイアンドロモン・・・

ヒロカズ『しかし、それから見ても分からないものだな!』

ハイアンドロモン「オレが見てやる! あっ!」

ヒロカズ『どうした! 居たか!』

ハイアンドロモン「いや! スレイヤードラモンが居た」

ヒロカズ『そっちかよ!』

ハイアンドロモン「しかし、のどかだな」

ヒロカズ『のんきなこと言っているんじゃない!』

ハイアンドロモン「あれ?」

ヒロカズ『どうした? ハイアンドロモン?』

ハイアンドロモン「なんか、ライオンの群れに他のは違うのが居るみたい・・・」

ヒロカズ『えっ! 本当かよ! それじゃないか!』

ハイアンドロモン「あ! スレイヤードラモンも気づいたみたい・・・」

どうする？空から仕掛けるか？」

ヒロカズ『いや・・・少し様子を見よう・・・せめて、あいつらに連絡ができたらなあ』

ハイアンドロモン「できるよ！」

ヒロカズ『できんのか！』

すかさず、ツツコミを入れた。

ヒロカズ『じゃ、早速やってくれ！』

ハイアンドロモン「分かった！すぐ繋ぐ・・・つながった・・・たぶん通じると思う・・・」

ヒロカズ『あつ！リュウタかオレだ！ヒロカズだ！えっ？どこに居るかって？上だよ！上！！』

リュウタ『で？どうする？攻撃をするか？』

ヒロカズ『様子を見ようと思っている・・・ジャスティモンが戻ってきたら。言ってくれ！そのときは合図をくれ！恐らく奴は下だけ意識が言っていると思うから、俺たちが上から奇襲を掛け、気づいた頃にはお前達が攻撃を仕掛けてくれ！』

リュウタ『分かった！！失敗はするなよ！！』

ヒロカズ『おおー！』

二人はジャステイモンが帰って来るのを待った。

第30章 ロイヤルナイツの試練 くリョウ・ヒロカズ・リュウタ編く 前編

さて、今回は後半です!!

三人はデータを盗ることができるのでしょうか？

次回もお楽しみに!!

スレイヤードラモン「全員そろったな・・・で、ジャステイモンなにしていたのだ？」

ジャステイモン「いやゝ！林の中かな？て探してたゝ　お陰で森林破壊がかなり進んだけどな！」

スレイヤードラモン「森林破壊、進めてんじゃねーよ！いや、そう言うことじゃない！あそこに居る！」

ジャステイモン「え？何処？」

スレイヤードラモン「あの変なライオンみたいな奴！」

ジャステイモン「あゝ！あれねゝ！わかった！」

スレイヤードラモン「お！話が分かる奴じゃねゝか！」

ジャステイモン「すぐに攻めてぶっ飛ばせば良いんだな！」

スレイヤードラモン「違うから！なんですぐそうなるの？慎重に行かないと捕まらないじゃないか！」

ジャステイモン「あゝそう言うことゝ！分かった！いつてらっしやゝい！！」

スレイヤードラモン「お前も行くんだよ！あゝもういい！！ジャステイモン！ゆっくり前と進んでいくんだ！早くじゃないぞ！」

ジャスティモン「分かったよ！ゆっくりね！」

そ~~~~~と

スレイヤードラモン「遅すぎ！」

スレイヤードラモンが突っ込んだ。

ジャスティモン「じゃあ〜早く行くぜ〜！」

スレイヤードラモン「もう、勝手にしてくれ・・・」

スレイヤードラモンは頭を抱えていた。

ー上空のハイアンドロモンー

ハイアンドロモン「お！動き出したぞ！行くぞ！ヒロカズ！」

ヒロカズ『よし！さっさと捕まえるぞ！！』

音をたてずに一気に下降した。

ー地上ー

ジャスティモン「ドウフトモン！！そこまでだ！！ジャスティスキ
ックー！！」

ドウフトモン レオパルドモード「遅すぎる！よつと！」

軽々交わした。

スレイヤードラモン「今だ！！」

ハイアンドロモン「分かっている！」

下降したハイアンドロモンが攻撃を放とうとした瞬間・・・

ドウフトモンR「あまい！！ブロッカーデ！！」

ハイアンドロモン「ぐわあゝ！！」

ドウフトモンR「惜しかったな・・・作戦としては良いみたいたが・・・バレバレだ！」

ハイアンドロモン「ちっ！」

スレイヤードラモン「オレを忘れるなゝ！！天竜斬破！！」

スレイヤードラモンがフラガツハを構えて飛び込んできた。

ドウフトモンR「ヴォルケンクラッツァー！！」

岩盤が飛び出し、スレイヤードラモンに直撃し、上空へと舞い上がる。

スレイヤードラモン「ぐはあ！」

ドウフトモンR「はあゝ！ドウフトモン！！」

レオパルドモードから普通の聖騎士型に戻った。

ドウフトモン「ここからが本番だ！！アウススターベン！！」

頭上で弧を描きながら振り下ろした。そこからビームが放たれた。

スレイヤードラモン「ぐはあゝ！！」

ハイアンドロモン「スレイヤードラモン！！」

ジャステイモン「トリニティーアーム！！」

ダーン！

地面に勢いよくたたきつけた。

ドウフトモン「あまい！！攻撃が分かりすぎだ！！」

ハイアンドロモン「敵に背を向けるなと言われなかったか？」

ドウフトモン「なっ！いつの間に！」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ！！」

ドウフトモン「ぐはあゝ！！」

思いっきり後ろに吹っ飛んだ。

ジャステイモン「やったか・・・」

スレイヤードラモン「どうだ!!」

ドウフトモン「ふはははは!!面白い!!だが、まだ力が足りないぞ!もつと本気を出せ!!」

そこには、平気で立っているドウフトモンの姿があった。

スレイヤードラモン「じゃ、本気を出すよ!!ジャステイモン!ハイアンドロモン!」

ジャステイモン「分かっている!」

ハイアンドロモン「任せろ!」

ドウフトモン「ふん!本気を出すだとなめられたものだ・・・行くぞ!・・・」

ドウフトモン「え?・・・か、体が動かない・・・」

スレイヤードラモン「かかったな!さっきのハイアンドロモンの攻撃にはデータを麻痺させるデータを仕込ませておいたのさ!まあ、本当はこれでデータを盗れば良いんだけど・・・お前が本気を出せと言ったから・・・急所をはずすぜ!」

ジャステイモン「トリニティーアーム!!」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ!!」

ドーン！！

ドウフトモン「くっ！」

スレイヤードラモン「さすがはロイヤルナイツ、立つてられたか・
・これで終わりだ！天竜斬破！！」

ドウフトモン「くっ！・・・なぜだ？」

ギリギリでフラガツハを止めていた。

スレイヤードラモン「言っただろう！俺たちはアンタを倒さないつて！」

ドウフトモン「ふっ！さすがだ・・・試練の突破だな・・・このデータはある情報を入れておいた。あとで確認してくれ！」

スレイヤードラモン「サンキュー！！あゝ疲れたゝ！！」

リュウタ「おい！今回、まだ1度もしやべってないぞ！」

スレイヤードラモン「あ！ゴメン！忘れてたゝ！」

リュウタ「忘れてたゝじゃねーよ！！！」

ハイアンドロモン「ケンカは後にしてひとまず帰らないか？」

スレイヤードラモン「そ」

リュウタ「そうだな！一端、城に戻ろうぜ！誰かが終わっているか

もな!』

スレイヤードラモン「あ!オレのセリフを持つてくな」

リュウタ『オレをしゃべれせなかったバツだ!』

スレイヤードラモン「ひどっ!それくらいいいじゃん!」

リュウタ『よくない!戻ろっぜ!』

三人はゲートをくぐり城へと戻った。

第31章 ロイヤルナイツの試練 〱リョウ・ヒロカズ・リュウタ編 〱 後編 〱

なんとか・・・終了しました・・・

今日は、志望校を決める大事なテストがあり少々・・・どころか結構疲れている自分です！

次回は、残りのセイバーズのみなさんです！！

次回もお楽しみに！！

第32章 動き出した闇の主（前書き）

バルバモン「どうだ、倉田博士！例の研究は？」

倉田「ええ、順調です！準備ができ次第、開始しますよ！」

バルバモン「期待しているぞ！」

倉田「任せ下さい・・・」（フツ）

第32章 動き出した闇の主

その頃、デジタルワールド 四聖獣の拠点では・・・

マサル「ちよつと待った！！なんで、俺たちの修行の成果が出ていないの？」

アグモン「時間がなかったみたい・・・」

マサル「そんな～～（泣）」

まあ、それはさておき・・・

インプモン「どうすんだよー！このまま黙ってみているのか？」

クルモン「くる～？」

インプモン「くる～じゃないんだよー！」

ポカッ

クルモン「痛いでくる～なにするんですか！」

インプモン「ぼ～としてないで何かできることを考えようって言っているんだよ！」

クルモン「できること～？」

ギルモン「二人とも、なにやっているの～？」

クルモン「あっ！ギルモンでくる〜！」

インプモン「おい！お前ら！試練は？」

ギルモン「クリアしたよ〜！」

インプモン「けっ！おめらにしたら良くやるじゃないか！」

ギルモン「んははははは・・・！ギル！？」

インプモン「どうしたんだよ！怖い顔して！」

ギルモン「フガフガ・・・来る！！また、あいつが・・・」

インプモン「マジかよー！！」

タカト「どうしたの？」

インプモン「まずい奴が来るって！」

タカト「本当！？」

ジェン「まさか、あいつ？」

指さした先には、バイオベルゼブモンがいた。

ルキ「進化よ！」

タカト・ジェン・ルキ「マトリックス・エボリュウション！！」

ギルモン「ギルモン、進化〜!!」

??「デュークモン!!」

テリアモン「テリアモン、進化!!」

??「セントガルゴモン!!」

レナモン「レナモン、進化!!」

??「サクヤモン!!」

リョウ「俺たちも忘れるな〜!!」

試練を終えた、リョウ達が駆け込んで来た。

リョウ・リュウタ・ヒロカズ「マトリックス・エボリュウション!!」

サイバードラモン「サイバードラモン、進化!!」

??「ジャステイモン!!」

ドラコモン「ドラコモン、進化!!」

??「スレイヤードラモン!!」

ガードロモン「ガードロモン、進化!!」

??「ハイアンドロモン!!」

バイオベルゼブモン「何人でも掛かってこいゝ!」

ベルゼブモンB「上等だ!!この偽物野郎!!カオスフレア!!」

バイオベルゼブモン「ブレイブシールド!」

巨大な盾が出現した。

ベルゼブモンB「なっ!」

いとも簡単にガードした。

バイオベルゼブモン「オレ様は、さらに強化されたんだ!!この、シールドはクレニアムモンの盾を参考にして改造されたのだ!!」

デュークモン「こうなったら、一斉攻撃だ!!ファイナルエリシオン!!」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル!!」

サクヤモン「こんごうかいまんだら金剛界曼荼羅!!」

ジャスティモン「トリニティーアーム!!」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ!!」

全員の攻撃が重なり、更に威力を増して攻撃する。

ドガンー！！

バイオベルゼブモン「なんだ、そんなものか！わっはっはっはっはっはっはっ！！」

ピキッ

バイオベルゼブモン「なに？この盾が・・・」

スレイヤードラモン「トドメだ！！てんりゅうざんは天竜斬破！！」

ズバーン！

ピキ、ピキ

更にひびが入った。

スレイヤードラモン「続いて、しゅうりゅうめいは昇竜斬波！！」

バキンッ

真っ二つに割れた。

バイオベルゼブモン「バ、バカな・・・この盾が・・・」

スレイヤードラモン「どうやら勝ちみたいだな・・・！しゅうりゅうめいは咬竜斬刃！！」

バイオベルゼブモン「おのれぐはああああ！！」

スレイヤードラモン「終わったな!!」

バイオベルゼブモン「なんてな・・・もう終わりか?ならこちらから行かせてもらおう!天竜斬破!」
てんりゅうざんは

スレイヤードラモン「なにっ!!ぐはああああああ!!」

後ろに吹っ飛んだ。

デュークモン「スレイヤードラモン!!」

バイオベルゼブモン「どうだ!自分の攻撃を喰らった、気分は?ええ!」

デュークモン「貴様あゝ!!」

バイオベルゼブモン「もっと怒れよ!どうした?ロイヤルセイバー!!」

デュークモン「し、しまった!」

??「グロリアスバースト!!」

バイオベルゼブモン「なっ!ぐはっ!」

デュークモン「シャイングレイモン!!」

マサル「待たせたな!俺たちが来たからにはもう大丈夫だ!」

スレイヤードラモン「嘘付け!!俺たちはまだ本気を出していない

んだよ！！」

ミラージュガオモン「本当か？」

マサル「なら、その本気を見せてやろうぜ！！」

デュークモン「試練の成果を見せてやる！！いくぞ！！！」

第32章 動き出した闇の主（後書き）

更新、遅れました！！

すみません！！

音楽祭があり、なかなか更新できませんでした！！

すみません！！

さて、今回は、闇の黒幕が動き出します！！

お楽しみに！！

第33章 バルバモンの恐怖（前書き）

倉田「準備が整いましたよ！」

バルバモン「本当か！よし！行くぞー！」

倉田「ええ・・・バイオベルゼブモンがそろそろくたばる頃ですから・・・」

バルバモン「ふん・・・所詮、奴は捨て駒よ！」

ダークエリアを飛び出した。

第33章 バルバモンの恐怖

バイオベルゼブモン「ぐぐ・・・」

デュークモン「これが我等の力だ!!」

バイオベルゼブモン「まだ、終わらせねー!!カオスフレア!!」

セントガルゴモン「おっと!!ねえねえ!そろつと降参したらう!」

バイオベルゼブモン「やなこつた!!ファイナルエリシオン!!」

それを交わす。

デュークモン「まだ、力が残っていたのか・・・みんな!最後の力を出すんだ!!ファイナルエリシオン!!」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル!!」

サクヤモン「こんごうかいまんだら金剛界曼荼羅!!」

ジャステイモン「トリニティーアーム!!」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ!!」

シャイングレイモン「グロリアスバースト!!」

ミラージュガオガモン「ダブルクレセント・ミラージュ!!」

ロゼモン「ローゼスレイピア!!」

レイヴモン「天之尾羽張^{あめのおはばり}!!」

全員の攻撃がバイオベルゼブモンに向かって一直線になって進む。

バイオベルゼブモン「うおおお・・・ぐああああ!!」

シャイングレイモン「やったか・・・!」

デュークモン「いや! まだだ!!」

バイオベルゼブモン「おのれ! 貴様ら!! これで終わったと思うなよ!!」

よろよろになりながらこちらへ向かってくる。

サクヤモン「あれだけの攻撃を喰らってまだ大丈夫なのか!？」

バイオベルゼブモン「まだ・・・終わらせない!!」

??「バンデモミウムロスト!!」

バイオベルゼブモン「ぐはあ!？」

バイオベルゼブモンの体に一直線に入った。

デュークモン「なに!」

バイオベルゼブモン「う、裏切るのか・・・」

デュークモン「誰だ!!」

??「もう、忘れたのですか?私ですよ!」

デュークモン「お、お前は!!」

マサル「倉田あゝ!!」

倉田「もう、彼は動けない・・・だからもう用はありません!消えてもらいます!バルバモン!!」

バルバモン「バンデモミウムロスト!!」

バイオベルゼブモン「おのれぐはあああああ!!」

バイオベルゼブモンはデータに分解され、バルバモンがロードした。

デュークモン「な、仲間を・・・信じられない・・・」

バルバモン「なんとでも言え!さあゝ次はワシの番じゃ!!バンデモミウムロスト!!」

デュークモン「くっ!」

ドガーン!!

全員「デュークモン!!」

??「なんとか間に合ったようだ・・・」

デュークモンの目の前には雷を帯びた鎖が垂れ下がっていた。

どうやら、それが防いでくれたようだ。

デュークモン「チンロンモン!!」

チンロンモン「バルバモン! 貴様の相手は我々、四聖獣だ!!」

バルバモン「上等だ!! 何人でも掛かってこい!!」

チンロンモン「蒼雷そうらい!!」

スーツエーモン「紅蓮くれん!!」

バイフーモン「金剛こんこう!!」

シエンウーモン「夢幻むげん!!」

4体の必殺技がバルバモンを直撃・・・

バルバモン「うおおおおおおお!!」

ドガン!!

デュークモン「なっ! あれほどの攻撃を弾いただと!!」

バルバモン「その程度か?」

チンロンモン「こいつ、昔よりも・・・」

スーツエーモン「かなり強くなっておる！やっかいだ！はっ！」

バイフーモン「その倉田とか言う奴か？」

シェンウーモン「ま、まさか・・・人間にそれほどの技術が・・・」

倉田「ええ！お察しの通り・・・デジモンのもつデジモンエネルギーを集めたのです！それがこのバルバモンの力の源だ！！」

バルバモン「実は、ワシはまだ力の半分も出しておらんぞ！」

デュークモン「なにっ！」

スレイヤードラモン「ハツタリだあゝ！！てんりゅうざんは天竜斬破！！」

ガキン！

スレイヤードラモン「なっ！」

杖で防がれた。

バルバモン「その程度か？ふんっ！」

スレイヤードラモン「ぐはああああ！！」

派手に吹っ飛ばされた。

デュークモン「くそっ！ここは一端退くぞ！！」

マサル「なっ！ふざけるな！！まだ闘える！！」

トーマ「デュークモンの言うとおりだ！マサル、ここは言うことを聞こう！」

マサル「で、でも・・・」

デュークモン「これ以上、犠牲者を出すな！！セントガルゴモン！」

セントガルゴモン「はいよーバーストショット！！」

バルバモン「その程度のミサイルは効かない！！」

ダダダン！

土煙が上がる。

バルバモン「どうした！掛かって来いよ！」

視界が晴れる。

倉田・バルバモン「なっ！」

目の前には誰も居なかった。

倉田「いっぱい食わされましたね！」

バルバモン「おのれー逃げやがって！！覚えておけー！！」

バルバモンは空に向かって叫んだ。

倉田「後を追いますか？」

バルバモン「ほっておこう！次は逃がさない！」

バルバモン達は、ダークエリアへと引き返した。

第33章 バルバモンの恐怖（後書き）

バルバモン、強し！！

彼らは、バルバモンを倒せるのでしょうか！？

次回にご期待を！！

次回は、バルバモンがもっと・・・

お楽しみに！！

第33章 絆の力でバルバモンを倒せ!!（前書き）

倉田「くつくつくつくつくつく．．．すべては私の計画通りです
！もうすぐ、すべてが終わる．．．」

ダークエリアの自分の研究室で独り言を言っていた。

第33章 絆の力でバルバモンを倒せ！！

ダーン！！

マサル「なんでだよー！！」

拳を地面にたたきつけた。

マサル「もう少しで勝てたのに！！」

タカト「あの状況ではああするしかなかったんだよ！」

マサル「でも！」

トーマ「いい加減、冷静になったらどうだ！あの状況では退くしかなかったんだ！」

マサル「だったらー！ぐっ！」

トーマがマサルの首をしめあげる。

トーマ「いい加減しろ！！お前の勝手な判断で他の仲間の命が失ったらどうするんだ！！」

ジェン「はいはい、そこまで！」

ジェンが仲介に入った。

マサル「わかったよ・・・」

タカト「でも、四聖獣でも敵わなかったのに・・・ましてや僕たちなんか・・・」

リュウタ「マイナス思考に考えるなよ！」

リョウ「ここにいるのも時間の問題だ！いつ奴らが来るか分からないからな！」

ドラコモン「大変だ！！」

リュウタ「どうした！奴らか？」

ドラコモン「ああ！バルバモンがやってきた！！」

マサル「今度こそは！！絶対倒す！！行くぞ！アグモン！！」

しゅん

マサル「あれ！？アグモンは・・・？」

タカト「アグモンならあそこに・・・」

指を指した場所には

アグモン「ZZZZ・・・」

マサル「寝ているなよ！！」

アグモン「アニキ！もう食べれない！ムニャムニャ・・・」

マサル「また、それか！起きろ！！奴が来たぞ！！」

アグモン「え？おやつが来たの？どこどこ！？」

マサル「バカヤロー！！まだ寝ぼけているのか！バルバモン！バルバモンが攻めてきたんだよ！！」

アグモン「マジか！よし！！行こう！アニキ！！」

マサル「さっきまで寝ぼけていた奴が・・・」

バルバモン「ぐはははは！！さあ！出てこい！人間の子どもたちよ！今度こそ逃がさないぞ！！」

タカト「やれるものならやってみろ！！」

タカト・ジェン・ルキ・リョウ・ヒロカズ・リュウタ「マトリック
ス・エボリュウション！！」

ギルモン「ギルモン！進化！！」

??「デュークモン！！」

テリアモン「テリアモン、進化！！」

??「セントガルゴモン！！」

レナモン「レナモン、進化!!」

??「サクヤモン!!」

サイバードラモン「サイバードラモン、進化!!」

??「ジャステイモン!!」

ガードロモン「ガードロモン、進化!!」

??「ハイアンドロモン!!」

ドラコモン「ドラコモン、進化!!」

??「スレイヤードラモン!!」

マサル・トーマ・ヨシノ・イクト「デジソウルチャージ!オーバー・
ドライブ!!」

アグモン「アグモン、進化!!」

??「シャイングレイモン!!」

ガオモン「ガオモン、進化!!」

??「ミラージユガオガモン!!」

ララモン「ララモン、進化!!」

??「ロゼモン!!」

ファルコモン「ファルコモン、進化!!」

??「レイヴモン!!」

バルバモン「ほぉー!なら、これならどうじゃ!!バンデモミウム
ロスト!!」

デュークモン「まだまだだ!!ファイナルエリシオン!!」

バルバモン「その程度か!」

マサル「うおおお!!」

いつの間にか、バルバモンに背後に忍び寄っていた。

バルバモン「なにっ!」

バキッ!!

思いつきり殴りつけた。

バルバモン「ぐっ!」

シュルルル

マサル「これからが本気だ!!みんな!!」

トーマ「ああ!」

マサル・トーマ・ヨシノ・イクト「デジソウルバースト!!」

シャイングレイモン「うおおおおおおお!!」

シャイングレイモンの一部のデータが書き換えられた。

シャイングレイモンB「シャイングレイモン バーストモード!!」

ミラージュガオガモン「うおおおおおおお!!」

ミラージュガオガモンの一部のデータが書き換えられた。

ミラージュガオガモンB「ミラージュガオガモン バーストモード!!」

ロゼモン「はああああああ!!」

ロゼモンの一部のデータが書き換えられた。

ロゼモンB「ロゼモン バーストモード!!」

レイヴモン「うおおおおおおお!!」

レイヴモンの一部のデータが書き換えられた。

レイヴモンB「レイヴモン バーストモード!!」

デュークモン「あいつら・・・俺たちも負けてられないぞ!!」

バルバモン「ただ、形が変わっただけではないか!!そんなものは

恐くなど無い!!」

マサル「それをいつまで言っていていられるかな? シャイングレイモン!!」

シャイングレイモンB「任せろ!! はっ!」

目にもとまらぬ早さで動いた。

バルバモン「なにっ! 早い!!」

シャイングレイモンB「コロナブレイズソード!!」

バルバモン「ぐはっ!! くそっ!! まだこれほどの力が・・・何処に・・・」

ミラージュガオガモンB「私も居ることを忘れるな!! ファイナルミラージュバースト!!」

バルバモン「ぐっ!! おのれ! ちょこまかちょこまかと!!」

レイヴモンB「こうなったら一斉攻撃だ!!」

シャイングレイモンB「ファイナルシャイニングバースト!!」

ミラージュガオガモンB「ファイナルミラージュバースト!!」

ロゼモンB「アギシャンレーヴル!!」

レイヴモンB「怒濤闇雲之舞!!」

全員の攻撃が重なり、一つになって、バルバモンめがけて放たれる。
バルバモン「な、なんだ！！この膨大なエネルギーは！！まさか！
このワシが！！ぐはあああああ！！」

ドガンー！！

デュークモン「す、すごい・・・これが彼らの力か・・・」

セントガルゴモン「やったの？」

サクヤモン「恐らく・・・」

??「おのれ」

シャイングレイモンB「なにっ！！ばかな！！」

なんと目の前にはボロボロのバルバモンが立っていた。

ミラージュガオガモンB「あれほどの攻撃を喰らったというのに・・・」

バルバモン「ワシの真の姿を見せることになるとは・・・」

レイヴモンB「ま、負け惜しみを言っな！！」

バルバモン「負け惜しみなどではない・・・うおおおおお！！」

シュワーン！

??「ぐっはははははー!!」

デュークモン「なにっ!!」

目の前には姿を変えたデジモンが立っていた。

バルバモンとは姿がかなり違うデジモンが・・・

??「我が名はベリアルヴァンデモンだ!!ぐっはっはっはっはっはっはっ!!」

第33章 絆の力でバルバモンを倒せ!!（後書き）

倒したと思いきやま形を変えたバルバモン!!

タカト達は倒すことができるのでしょうか!!

次回に続く!!

全員「ぐはあああああああー!!」

ベリアルヴァンデモン「では、トドメだ!!バンデミウムフレイム
!!」

デュークモン「こ、これまでか・・・」

??「まだ、諦めるな!!ガルルキャノン!!」

??「ドラゴンズロア!!」

??「アウススターベイン!!」

ドガーン!!

ベリアルヴァンデモン「だ、誰だ!!」

??「ロイヤルナイツ、オメガモン!!」

??「ロイヤルナイツ、デユナスモン!!」

??「ロイヤルナイツ、ドウフトモン!!」

ベリアルヴァンデモン「ロ、ロイヤルナイツ!なぜ、貴様らが!!」

オメガモン「諦めるのは早いぞ!!」

ベリアルヴァンデモン「こんなにボロボロで何が言える!!」

デュークモン「みんな、行けるか?」

マサル「誰に言っただ？あたり前だろう！なあ、シャイングレイモン！！」

シャイングレイモンB「ああ！」

デュークモン「一世攻撃だ！！ファイナルエリシオン！！」

セントガルゴモン「ジャイアントミサイル！！」

サクヤモン「こんごうかいまんだら金剛界慢荼羅！！」

ジャステイモン「トリニティアーム！！」

ハイアンドロモン「アトミック・レイ！！」

シャイングレイモンB「グロリアスバースト！！」

ミラージュガオガモンB「ダブルクレセントミラージュ！！」

ロゼモンB「ローゼスレイピア！！」

レイヴモンB「あめのおほはり天之尾羽刃里！！」

全員の攻撃が一つになり、重なり、ベリアルヴァンデモン目指して一直線に進む。

ベリアルヴァンデモン「ま、まさか！！まだ、これほどの力があつたとは！！ぐはあああああ！！」

デュークモン「今度こそどうだ!!」

第35章 邪悪な力に打ち勝て！（後書き）

さて、ベリアルヴァンデモンを倒せたのでしょうか？

次回に続きます！！

お楽しみに！！

第36章 真の闇の敵

デュークモン「どうだー!!」

ベリアルヴァンデモン「ぐはっ! くっ・・・」

ボロボロになりながらも立っていた。

しかし、足取りはヨロヨロだ。

ベリアルヴァンデモン「ま・まだ・・・終わらせん・・・オレ様の
野望を叶えるまでは・・・」

シャイングレイモンB「まだ、立っていられるのか!？」

セントガルゴモン「でも、効いたみたいだよ!」

オメガモン「どうやら、終わりみたいだな! 潔く負けを認めたらど
うだー!!」

ベリアルヴァンデモン「ま・まだ・・・負けたわけではない!・・・
・バンデモニウムフレイム!!」

両肩から、ボロボロとは思えないほどのエネルギーが放出された。

全員「ぐはあああああ!!」

デュークモン「ま・・・・まだそんな力が・・・ぐっ!」

ベリアルヴァンデモン「ぐっ！どうやら、力を・使い果たしたみたいだな・・・」

デュナスモン「に、逃がさん！ドラゴンズロア！！」

デュナスモンの両手からすさまじいエネルギーが放出された。

ベリアルヴァンデモン「ぐはあああああああああ！！」

デュークモン「こ、今度こそ・・・」

ベリアルヴァンデモン「くっ・・・」

そこにはなんとか立っているベリアルヴァンデモンの姿があった。

サクヤモン「ふ、不死身か・・・」

ベリアルヴァンデモン「まだ・・・・・・負け・・・ぐはあ！」

ドサッ

デュークモン「なっ！」

セントガルゴモン「なっ！」

サクヤモン「なっ！」

??「ふっふっふっふっふっ！もう動けない奴には用はありません・・・！」

そこにはギズモンに乗った倉田の姿があった。

マサル「おまえ！仲間を！！」

倉田「動けないのでは闘えない！その代わり、このギズモンの力となりなさい！！」

ベリアルヴァンデモン「倉田！！責様・・・裏切るのか！ぐっ！」

倉田「おや！まだ生きていたのですか！ギズモン！ロードしなさい！！」

ギズモン「ギギッ」

ベリアルヴァンデモンはデータに分解され、ギズモンに吸収されていた。

倉田「これで、エネルギーはそろった！ギズモン！！進化です！」

ギズモン「ギギギギッ」

新たなデータが上書きされていった。

倉田「ギズモンS Xです！！」

マサル「なっ！前の時よりも形が違っ！！」

倉田「やっしておしまい！」

ギズモン「ギギッ」

シュン

デュークモン「なっ！速い！！ど、どこだ！」

ドカツ！バキッ！ドカツ！バキッ！

あちこちで殴られるような音がした。

ドサッ！

全員「ぐはっ！」

倉田「どうです！！この最高傑作は！！私がこの世界を支配するのです！！」

マサル「そんなことはさせるか！！うおおおおおおおお！！」

マサルが倉田目掛けて走り出してきた。

倉田「まだ、そんな力が残っていたのですか！？ギズモン！！」

ギズモンSX「ギギッ！」

バキッ！

マサル「ぐはああああ！」

真横へ吹っ飛ばされた。

デュークモン「も、もう・・・ダメなのか・・・」

意識がもうろうとしていった・・・

第36章 真の闇の敵（後書き）

ベリアルヴァンデモンは倒せた（？）けど本当の戦いはこれから！？

彼らは倉田の野望を阻止することができるのか！？

これからご期待を！！

次回もお楽しみに！！

第37章 知られざる真実

倉田「どうです！この最高傑作は！！」

デュークモン「こゝここまでか・・・」

オメガモン「でも・・・貴様はどうして・・・？」

倉田「最後でしょうし・・・冥土の土産として真実を聞きたい！！」

マサル「真実だと！ふざけるな！！」

倉田「そう・・・アレは・・・1年前のことでした・・・」

（回想（1年前））

倉田「うわああああああああ！！」

ドサッ！

倉田「いてて・・・こゝこゝは！？」

頭上にはデジタルワールド球が見えていた。

倉田「確か私は・・・次元転送爆弾を・・・」

（私はしばらくの間このデジタルワールドをさまよっていました・・・

・・そしてある日、光の柱に捕まり別の場所へ飛ばされたのでした・
・・)

倉田「うわあああああああ!!」

ドサッ!

倉田「ここはどこです!」

(そこは辺り1面の闇でした・・・)

??「待っていたぞ人間よ!」

倉田「だ、誰ですか!」

??「ここだ!」

(そこには封印されたデジモンがいました)

倉田「あ、あなたは・・・!」

??「ワシはバルバモン! いずれこの世界を支配する者だ!」

(それがバルバモンとの出会いでした・・・)

バルバモン「お前を呼んだのはワシじゃ! 強い闇の心を感じてな・
・! ワシの封印を解くのを手伝ってもらいたい・・・」

倉田「ど、どうやって!」

バルバモン「簡単じゃ！デジモンのエネルギーを集めるのじゃ！」

（そのとき、私は思いました・・・こいつを利用すれば今度こそ野望を叶えられると・・・しかし、誤算が生じました・・・バルバモンの封印を解いた途端に七大魔王すべての封印も解けたのでした・・・）

バルバモン「礼を言うぞ！倉田博士！」

倉田「いえいえ・・・確か、あなたはこの世界を支配すると言っていましたね！私も協力しましょう！」

バルバモン「本当か！」

倉田「ええ・・・」

（そして私はまず、戦力にならない七大魔王を片っ端から消していききました・・・そしてあのリヴァイアモンとリリスモンを残し、あなたたちに送ったのですよ！そして私はこの世界でこのギズモンを改良し作り上げたのです！そして仕上げはバルバモンの改良でした・・・）

バルバモン「これがその研究か！」

倉田「ええ・・・これであなたは世界最強です！しかしこれは最後の手段と言うことでお願いします」

バルバモン「ナゼだ？」

倉田「これは、あまりにも強烈すぎるのでこの力を使いすぎると自

分の身を破滅することになりますよ!」

(それがあのベリアルヴァンデモンでした・・・)

(しかし、またまた誤算が生まれました・・・それはロイヤルナイツの登場です!彼らを倒すことができるのはこのギズモンだけだと思い・・・ベリアルヴァンデモンがもう動けないと知ったとき彼にトドメを刺しました)

〔現在〕

倉田「言うわけですよ!」

デュークモン「そ、そんな・・・言うことはお前は七大魔王すべてを利用したと言う訳か!」

倉田「そう言うことになりますね!さあ!おしゃべりはここまでです!ギズモンS X!」

ギズモンS X「ギギッ!」

デュナスモン「こんなところで終わってたまるか!」

オメガモン「何をする!デュナスモン!」

デュナスモン「オレはここまでだ!あばよ!ブレス・オブ・ワイバーン!!!ぐおおおおお!!!」

巨大なドラゴンの炎が姿を現した。

倉田「なっ！まだこのような力が！？」

ドガンー！！

ギズモンSX「ギギッ！？」

シュッ

巨大なクレーターができた。

ドサッ

デユナスモンは力を使い果たし倒れた。

デユナスモン「あ・・・あとは・・・たのんだ・・・ぞ・・・！」

デュークモン「はっ！やつはどうなった？」

倉田「ふう〜まったく私の最高傑作に傷がついたらどうするのです
」！」

そこには、すこしだけ傷のついたギズモンSXが立っていた。

デュークモン「なっ！あれだけのパワーであれほどの傷しか与えられないのか！！」

倉田「全く・・・死に損ないが・・・」

その言葉にオメガモンはキレた・・・

オメガモン「貴様！！お前だけはゆるさん！！うおおおおおおお
お！！！」

オメガモンがギズモンに向かって走り出した。

グレイソードを出して・・・

デュークモン「オメガモン！！止すんだ！！！」

第37章 知られざる真実（後書き）

倉田の真実が明らかになりましたね・・・

今回は、ギズモンSXとの最後の決戦です!!（たぶん・・・）

最近、感想が誰も書いてくれなく寂しく思うRYotaです・・・

誰かゝ書いて下さい!!

感想にはすべて、返信するつもりです!!

わがまま言つてすみません・・・

話がそれましたが・・・

次回もお楽しみに!!

第38章 テイマーズ戦闘不能！？

デュークモン「オメガモン！止すんだ！！」

オメガモンにはデュークモンの声は届いていないようだ。

倉田「ふん！こざかしい！やってしまいなさい！ギズモンS X！！」

ギズモンS X「ギギッ！！」

ガキッ！

ギズモンS X「ギギッ！？」

なんと、オメガモンのグレイソードがギズモンの腹を突き刺していた。

倉田「バ、バカな！！」

ガシッ

ギズモンS Xはグレイソードを掴んだ。

オメガモン（な！こいつ刺されているのに力が抜けていない・・・
ヤ、ヤバイ！！）

ギズモンS X「ギギギギッ！！」

グレイソードが抜けた。

ギズモンS X「ギギッ!!」

グレイソードごとオメガモンをぶっ飛ばした。

オメガモン「ぐはああああ!!」

ドサッ!

倉田「これでトドメです!! やっておしまい! ギズモンS X!!」

ギズモンS X「ギギッ!!」

バシッ、ドカツ、ズカツ、バキッ・・・

あちらこちらで殴られる音が聞こえた。

シュワァン・・・

ドサッ!

タカト達は究極体が解けてしまった。

倉田「情けないですね!! さあ、これで最後です!! 闘えないようにしてあげましょう!! ギズモンS X!!」

ギズモンS X「ギギッ!!」

タカト「こ、ここまでか・・・」

??「カオスフレア!!」

ドーン!

ギズモンSX「ギギツ!」?

??「へんっ!だらしがね〜な!オレがいね〜となにもできね〜のか!」

黒い翼、黒いボディ、三つの目、そして・・・

??「かつこいい、オレ!!アンケートナンバーワンのオレ様だあ
〜!!」

あ!説明している途中で先走らないように・・・

あと、嘘の情報は流さなくてよろしい!

いつ、そんなアンケートをしたのだ?

もう紹介しないよ!

??「わりい・・・反省しますから紹介を続けてくれ〜!!」

分かりました・・・

倉田「誰に言っているのですか!」?

??「誰だって良いだろう!オレの自己紹介が始まっているのだからさあ〜!!そして久しぶりの登場だかな!!」

続けます・・・そして、右腕と一体化している銃。

彼らはその正体を知っていた・・・

タカト「ベルゼブモン!!」

ベルゼブモンB「プラストモードだ!!」

倉田「なんか変な奴ですね!!まあ!構いません!!ギズモンS
X!!やってしまいなさい!!」

ギズモンSX「ギギッ!!」

スピードを上げベルゼブモンに攻撃を仕掛ける。

バキッ!

倉田「どうです!」

しかし、ベルゼブモンは吹っ飛んでいなかった。

ベルゼブモン「その程度か!!?話になんね!おい!お前らこ
んな奴に負けていたのか?」

テリアモン「うるさいな!インプモン!!」

ベルゼブモンB「だから、インプモンじゃない!!ベルゼブモン
プラストモードだ!!分かってるか!!」

すかさず、ツツコミを入れた。

テリアモン「も〜まんた〜い！！気にしない、気にしない！」

ベルゼブモンB「気にするよ！！とりあえず、この程度の力か！？
本気のパンチってやつを教えてやるぜ！」

ギズモンSX「ギギ・・・！？」

ベルゼブモンBは右腕の銃をしまうと拳に力を入れた。

ベルゼブモンB「それでも喰らえ！！」

ブンツという乾いた音が聞こえたと思っただら・・・

バキッ！！

良い当たりの音が聞こえた。

ギズモンSX「ギギッ！！」

ドサッ！！

倉田「そ、そんな・・・私の最高傑作が・・・！！」

ベルゼブモンB「これでトドメだ！！カオスフレア！！」

ダーンと1発、また1発、連射していく・・・

ドガン！！

倉田「わ、私の最高傑作があゝ!!」

倉田が叫んだ・・・

第38章 テイマーズ戦闘不能！？（後書き）

さあ、ギズモンS-Xを倒せたのでしょうか？

次回、分かります！！

次回にご期待を！！

お楽しみに！！

（なんか、いつも同じことを言っている気がする！？）

あと、意見・感想、お待ちしております！！

書いてくれば、めっちゃ喜びます！

第39章 最終決着！！

シュー・・・

巨大なクレーターが現れた。

ベルゼブモンB「どうだ！！」

ギズモンSX「ギ・・・ギ・・・ギッ」

ガシャン、ガチャン・・・

金属音が聞こえた。

煙が無くなり視界が晴れた。

ベルゼブモンB「まだ、立っていられるのか！？」

倉田「そうですギズモンSX！！まだ負けてはいけません！！」

ギズモンSX「ギギッ！！」

ベルゼブモンB「なっ！！」

ボロボロとは言えないほどの素早いスピードで動いた。

バキッ！

ベルゼブモンB「ぐっ！！・・・まだまだ！！おりゃあああああ！！

！
」

バキッ！

ギズモンS X「ギギッ！？」

ダーン！！

ギズモンS Xは地面にたたきつけられた。

ギズモンS X「ギギッ！！」

ギズモンS Xの目からビームが発射された。

ベルゼブモンB「なっ！ちっ！」

辛うじて避けた・・・と思っただが翼に当たった。

ベルゼブモンB「ぐっ！え？」

翼が消えていった。

ベルゼブモンB「ちっ！ブラストモード解除！！」

ベルゼブモンは元のフォームに戻った。

ベルゼブモン「戻ったからって関係ねえ！ダブルインパクト！！」

両手の持ち構えた銃から弾丸が放たれる。連射で・・・

ダーン！ダーン！ダーン！

ギズモンS Xがよろけた瞬間に両手の銃を腰にしまい素早いスピードでギズモンS Xに近づいた。

ギズモンS X「ギギッ！？」

ベルゼブモン「ダークネスクロウ！！」

鋭い爪で切り裂いた。

ギズモンS X「ギギッ！？」

ドサッ！！

ベルゼブモン「一丁上がり！！」

倉田「なっ！ギズモンS Xが・・・私の最高傑作が・・・でもまだ終わりません！！このエネルギーをギズモンS X受け取りなさい！！」

倉田は貯めてあったエネルギーをギズモンS Xに投げつけた。すると・・・

ギズモンS X「ギギギギギギギギッ！！」

復活した・・・

ベルゼブモン「そ、そんな・・・！ダブルインパクト！！」

ダーン！ダーン！ダーン！ダーン！

ギズモンSX「ギギッ？」

聞いているようだ。

ベルゼブモン「バ、バカな！！」

倉田「さあゝやっておしまい！！」

バキッ、ドカツ、バキッ、ドカツ・・・

ベルゼブモン「ぐはあ！！バ、バカな・・・」

シューン・・・

究極体が解け成長期のインプモンに戻ってしまった。

インプモン「そ、そんな・・・このオレ様が負けるって言うのかい！！」

タカト「僕たちも何かしないと！！ただ見ているだけじゃだめだ！！」

ジェン「そうだね！テリアモン、行けるかい？」

テリアモン「任せてよ！！」

ルキ「そうね、見ているだけじゃ、つまないもん！ね？レナモン？」

レナモン「そうだね！ルキ！」

タカト「マトリックス・エボリュウション！！」

・・・シーン

タカト「進化できない！！力を使い果たしたのちゃったのかな？」

ジェン「なら、成熟期に進化だ！！」

ルキ「そうね！いくよレナモン！！」

タカト・ジェン・ルキ「カードスラッシュ！！」

デジヴァイスにカードを読み込ませていく。

タカト・ジェン・ルキ「超進化・プラグイン・S！！」

ギルモン「ギルモンゝ進化ゝ！！」

ギルモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「グラウモン！！」

テリアモン「テリアモン、進化！！」

テリアモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ガルゴモン！！」

レナモン「レナモン、進化!!」

レナモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「キュービモン!!」

マサル「俺たちも負けていられねーぜ!!」

マサル・トーマ・ヨシノ・イクト「デジソウル・チャージ!!はあ!!」

アグモン「アグモン、進化!!」

アグモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ジオグレイモン!!」

ガオモン「ガオモン、進化!!」

ガオモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ガオガモン!!」

ララモン「ララモン、進化!!」

ララモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「サンフラウモン!!」

ファルコモン「ファルコモン、進化!!」

ファルコモンのデータがはがれ、新たなデータが上書きされていく。

??「ペッグモン!!」

ドラコモン「オレ、進化できねー!!」

リュウタ「しょうがないよ!!成長期のままで行こう!!」

ドラコモン「ちえっ!!」

タカト「みんな、あいつにみんなの必殺技をぶちかますんだ!!」

全員「おう!!」

グラウモン「エキゾーストフレイム!!」

ガルゴモン「ダムダムアッパー!!」

キュウビモン「こえんりゅう弧炎龍!!」

インプモン「ナイト・オブ・ファイヤー!!」

ガードロモン「ディスラクショングレネード!!」

ドラコモン「オレだけ成長期・・・ベビープレス!!」

ジオグレイモン「メガバースト!!」

ガオガモン「スパイラルブロー!!」

サンフラウモン「サンシャインビーム!!」

全員の技が重なり、さらに威力が増し、ギズモンSXに向かって突き進む。

ギズモンSX「ギギッ!!」

ドガン!!

ギズモンSX「ギギッ・・・」

ギズモンSXはデータに分解され消滅した。

後には倉田が膝を突いて失望していた。

タカト「終わったんだね・・・」

第39章 最終決着！！（後書き）

決着がつかしましたがまだまだ最終回にするつもりはありません！！

これからの活躍にご期待下さい！！

次回もお楽しみに！！

第40章 帰還 リアルワールド

タカト「終わったんだね・・・」

ジェン「ああ・・・」

倉田「わ、私の野望は・・・まだ・・・」

マサル「まだ、そんなこと言っているのかよ！いい加減諦めろよ！」

トーマ「さて、僕たちは自分達の世界に帰るか・・・」

マサル「もう！？」

トーマ「仕方ないだろ！こいつを連れて行かなくちゃ行けないんだから！」

マサル「ちえ！」

タカト「どうやってリアルワールドへ帰るの？」

ジェン「そうだな・・・」

ルキ「四聖獣に聞けば何か分かるんじゃない？」

タカト「とりあえず、みんなを連れて城へ戻ろう！」

「四聖獣の拠点（城）」

タカト「ねえ？どうやって帰ればいいの？」

スーツエーモン「そうだな・・・」

ルキ「まさか、分からないって言わないわよね！」

バイフーモン「まさか・・・」

シェンウーモン「単刀直入に言おう！分からのじゃ！」

タカト「やっぱり・・・」

ジェン「でも、リアルワールドへ来ていたデジモン達はどうやって？」

チンロンモン「それだ！！でも私達にもそれは分からん・・・」

タカト「でも、オメガモンが連れてきたんでしょう！何か・・・」

オメガモン「一つだけある・・・」

ジェン「本当！」

オメガモン「ああ・・・しかし、厳しい・・・向こうの世界とコンタクトができないとダメだ・・・確率は極めて低い・・・」

タカト「そうだ！山木さんからもらったこれは使えるかな？確か改良したと言っていたけど・・・」

タカトは以前デジタルワールドに来たときに使っていた端末機を取り出した。

タカト「あ！使えるみたい！！」

ジエン「本当！？」

タカト「えっと・・・『すべて済みました。これから戻るところですがそちらの協力が必要みたいです。』と・・・送信！・・・完了！これで届いたと思うんだけど・・・」

と自信なさげに言った。

リュウタ「帰れるんだろうな！」

タカト「たぶん・・・」

ピッピッピッピッ

端末機がなった。

タカト「おっ！早速返ってきた・・・えっとなになに・・・『お疲れ！こちらは君たちがデジタルワールドへ行ってから4カ月が経っているよ！こちらの準備は整っているよ！前のこともあったから準備しておいたんだ。恐らく着く場所は新宿公園だ。親御さん達に知らせておくね！君たちが着く頃は夜だと思うから。待っているよ！

P・S 準備ができ次第教えてくれ 山木』だつて」

ジエン「良かった・・・」

リアルワールド
～現実世界東京都庁～

山木（彼らがデジタルワールドに行ってから4カ月か・・・無事だと良いんだが・・・）

シェンユー
鎮宇「山木くん！彼らなら大丈夫だって！」

ピッピッピッピッピッ

山木「あ！子どもたちからだ！！みなさん！準備を！！」

全員「任せて下さい！！」

マツコイ「システム、OKです！！」

山木「さあ！いつでも準備はOKだ！連絡をくれ！！」

～デジタルワールド 四聖獣の拠点（城）～

オメガモン「では、行こうか！最初の地点へ！」

スーツエーモン「デジタルワールドを2度も救ってくれてありがとうな！」

シェンウーモン「達者でな」

チンロンモン「また、いつか会おう！」

バイフーモン「あばよー！」

タカト「またねー！じゃ、行こうか！」

タカト達は光の柱の中へと入っていった。

く荒野く

タカト「いつ来ても、リアルワールド球は大きなー！」

ジェン「そうだね！」

デジタルワールドの最初の地点、頭上にはリアルワールド球が見える。

タカト「山木さんに連絡しないとー！」

タカトは端末機を取り出した。

ギルモン「ねえ？タカト、帰ればまたパン、食べれるよね？」

タカト「うん！食べれるよ！」

ギルモン「やったー！ギルモン、ギルモンパンがいいなー！」

ピッピッピッピッピッ

タカト「あ！返信が来た！えつと・・・『準備が整ったようだね。これから説明するからよく読んでくれ。この前とは訳が違うからなまず、そのリアルワールド球から青い光を通す。それに入ってくれ！以上だ！しかし、時間があるんだ！制限時間は3分だ。それを逃したら、次は無いものと思ってくれ！覚悟が決まったらまた連絡してくれ！ P・S 親御さん達が迎えに行っていると思うからな！ 山木』だつて！みんな、心の準備はいい？」

ジェン「ああ！」

ルキ「当たり前じゃない！」

ヒロカズ「OKだぜ！」

ケンタ「早く行こう！」

リュウタ「勿論！！！」

マサル「早く、帰ろうぜ！！！」

口々に言った。

タカト「よし！連絡しよう！」

オメガモン「私はここまでだ！」

タカト「え？もう？見送りは？」

オメガモン「私も忙しくてな・・・復旧を手伝わなくてはな・・・さらばだ！救世主達よ！！！」

オメガモンはその場を後にした。

全員「オメガモン！じゃ〜ね〜！！」

オメガモンは振り返らず手を上げた。

ピカーン！

青い光が降りてきた。

タカト「あれだ！！」

ジエン「あれに飛び込むんだ！！」

光の柱がタイマー達のところまで降りてきた。

タカト「よし！飛び込め！！」

タカト達は青い光の柱の中へ入っていった。

第40章 帰還 リアルワールド（後書き）

その光景を見守る者がいた。

オメガモン「あばよ！本当は忙しくないんだがな！私が泣いては示しがつかんからな・・・」

そう言いながらも目には涙を浮かべていた。

みんな、無事に帰還しました！！

さて、次回からどうしようかなと迷っています！

でも、面白いものにはしますよ！！

お楽しみに！！

第41章 さらばセイバース！（前書き）

タカト「どうする？」

ヒロカズ「言い訳がない・・・」

ジェン「本当のことを言うべきかな？」

ルキ「それはやめておいた方がいいんじゃない？信じてくれなそうよ！」

ケンタ「・・・」

五人は学校の校門で肩を並べて話し合っていた。

デジタルワールドへ言ってから早4カ月、どういう理由を言つべきか考えていた。

タカト「とにかく、誤魔化そう！」

ジェン「無理じゃないかな？」

ヒロカズ「何とかなる！」

ルキ「言つた方がいいんじゃない？チャイムなるわよ！」

ケンタ「早く、行こう！言い訳は行つてからで！」

五人は、校舎に入つていった。

第41章 さらばセイバーズ！

キンコーンカーンコーン

放課後のチャイムが鳴った。

クラスメイト達はそれぞれ部活動に向かった。

本当ならタカト達も部活へ行くはずだったが、部活に入部届を出していなかったからである。

そもそも、4月にデジタルワールドに行ったのだから当然である。

五人は教室に残っていた。

理由は簡単である。

担任の広川先生に呼び出しを喰らい残されたのであった。

タカト「なんて言おう・・・」

全員「うゝん・・・」

朝と同じように唸っていた。

ヒロカズ「来るのが遅いんだよ！！呼び出しておいてさあゝ！」

ガラッ！

ケンタ「あのー先生！今日は5時には帰らなくては・・・」

広川「説明してくれば帰すぞ！！」

タカト（そうだ！僕に任せて・・・）

タカト「あのー先生！実はー僕たち、町内のくじ引きで、世界1周旅行が当たりました、五人で行ってきたんです！本当のことを言うと、うらやましがれるので・・・」

広川「そうかそうか・・・」

全員「ホッ」

広川「・・・そんなわけ無いだろう！どこの宝くじだよ！！そんな良い景品来たこともねーよ！！」

ヒロカズ「そりゃーそうだ！春休みに出かけた、田舎でやっていたのだから！」

広川「どこの田舎だよ！もういい！！分かった、そう言うことにしておく！今度はこうは行かないからな！」

（帰宅中）

タカト「なんとか誤魔化せたみたい・・・」

ジェン「でも次はうまく行かないかも！」

ヒロカズ「これから、暫く放課後補習だつてよ！」

ルキ「当たり前でしょ！4カ月も休んでいたんだから！」

ケンタ「早く、行かないとお別れができないよ！」

タカト「そうだね！みんな急ごう！」

五人は東京都庁を目指した。

（東京都庁）

トーマ「さて準備は整ったと……。次元転送爆弾もよし！」

ヨシノ「これで元の世界に帰れるわ！」

マサル「でも、隊長に叱られるかもな！」

トーマ「仕方ないさ！」

ヨシノ「それだけは嫌なんだけど……」

山木「準備は整ったかい？」

四人「ハイ！」

イクト「でも、タカト達が……」

ガラッ

一人の少年とデジモンが入ってきた。

??「なんだ、あいつらまだ来ていないか！」

マサル「リュウタ！」

トーマ「と、ドラコモン！」

リュウタ「よ！あ！それと、リョウさんは来れないって！九州からだしな・・・さっき連絡が来た！」

マサル「そうか・・・」

ガラッ

??「ふう！間に合った！」

タカト達が入ってきた。

山木「さて、これで全員、そろったな！では始めよう！」

マサル「ちょっと待った!!」

トーマ「どうした、マサル？」

マサル「あのさ・・・かつてかも知れないけど・・・オレやっぱ、この世界に残る!!」

トーマ「は？」

ヨシノ「はあくまた始まった・・・もう最悪なんですけど・・・」

トーマ「君は言っていることが分かっているのか？これを逃したら、次は無いんだぞ！」

マサル「オレにはこれがある！」

全員「そ、それは！！」

マサルは手に持っていた、次元転送爆弾を見せた。

マサル「倉田から、貰ったんだよ！安心はできる！アグモンもオレと同じ意見だ！な？」

アグモン「ああ！オレは、マサルのアニキについて行くって決めたんだからな！」

トーマ「は・・・分かったよ！君のお父さんもそうするかも知れないな！僕たちだけで帰るよ！隊長には僕から言っておいてあげるよ！」

ヨシノ「ちょ、ちょっとトーマ！いいの？」

トーマ「ああ・・・あいつが決めたことだからな！前もそうだった・・・よし、そろそろ行くか！じゃあな！」

イクト「待つて！・・・オレも残る！！」

トーマ「イクト！お前はダメだ！両親が嘆くぞ！」

イクト「でも・・・オレはこの世界のことをもっと知りたい！あと、ここでもっと強くなりたいんだ！！」

トーマ「はあ、君たちは・・・分かったよ！君たち二人はあと1年だ！それが立つたら帰ってこい！分かったな！」

マサル・イクト・アグモン・ファルコモン「ああ！！」

トーマ「さて、今度こそ、行くか！」

トーマは手錠とロープで縛った倉田を立たせると、次元転送爆弾にスイッチを入れ放り投げた。

バーン！！

目映い閃光が走ったかと思うと、あのゲートが開いた。

そう、マサル達を連れ込んだゲートだ。

タカト「じゃ、ね！！」

トーマ「山木室長、お世話になりました！あとはあのバカ二人のことをよろしくお願いします！」

マサル「誰がバカだと！」

イクト「マサルより、オレはバカじゃない！！」

マサル「なんだと！」

トーマ「マサル！また会おうぜ！」

マサル「おう！」

そう言うのと二人と囚人（？）はゲートの中へ入っていった。

そして、彼らが入ったと同時にゲートが閉じ、消えた。

マサル「これで、良かったんだ！」

第41章 さらにセイバーズ！（後書き）

セイバーズ達のお別れ！と思っていたところのマサルとイクトの残ります発言！

これからが、どうなっていくのでしょうか！

これからにご期待を！！

次回もお楽しみに！！

第42章 マサルとイクトの危険な休日

マサル「はあああああ……」

イクト「はあああああ……」

アグモン「ZZZZZZ・・・」

ファルコモン「……………」

マサル・イクト「暇だあゝゝ！！」

デジタルワールドから帰ってきてから1カ月が経っていた・・・
↑
早いな！

世間では夏休みだと言っているがタカト達は居なかつた3カ月分を夏休みで補習として

学校でやっているのだ。

そんな中、タカト達が居ないせいかな暇ならしい……

マサル達は山木が用意してくれた家の中でゴロゴロしているのだっ
た。

AM
9:00
だ。

マサル「だああああ！イクト！どっか行くぞー！！」

イクト「ええええ！今から？」

マサル「ああ！ここにいてもただ、暇なだけだからな！」

イクト「分かったよ・・・ファルコモン、行こう！」

ファルコモン「あ！待ってよ！イクト！」

マサル「おい！アグモン！起きろ！おいていくぞ！」

アグモン「むんにゃ、むんにゃ・・・アニキ！もう食べれない！もう腹一杯だよ！ムニヤムニヤ・・・」

マサル「オイ、寝ぼけるな！てか、いつもそんな寝言、言っていない？！どんな夢だよ！」

アグモン「ふにゃ？アニキ、どっか行くの？」

マサル「ああ。おいてくぞ！」

アグモン「あゝ待ってよ！アニキ！子分をおいてくなよ！！」

～学校～

広川「であるから、これが・・・」

ちょうど、補習の真っ最中だった・・・

バシッ！

チョークが飛んだ。↑今頃、チョーク投げる先生が居るんだ・・・

ヒロカズ「うわぁ！なんスカ先生！」

広川「なんスカじゃね！なにボーっとしているんだ！ちゃんと集中しろ！」

ヒロカズ「はいはい・・・」

↓新宿公園↓

マサル達は公園のブランコの所に座っていた。

マサル「外出ても。暇だな〜！」

イクト「だから、言ったじゃないか！やめようって！」

マサル「でも・・・」

バシユッ

マサル・イクト「え？」

白い霧が公園を包みだした。

マサル「こ、これは・・・確か・・・」

イクト「デジタルフィールドだ!!」

アグモン「アニキ！来るよ！」

マサル「よし！退屈しのぎにやってやるぜ！！」

??「よつと！ここがリアルワールドか・・・暴れてやるぜ！！ガッハッハッハッハッ！」

マサル「そうはさせない！！」

??「人間か・・・てめえらをロードしてやる！！」

赤いボデイのオオカミにたデジモンのようだ。

フアングモン

世代：成熟期

タイプ：魔獣型

種：データ

必殺技：ブラストコフィン

マサル「成熟期デジモンだな！」

フアングモン「だったらなんだ・・・？」

マサル「なんでもねえ！殴るだけだ！おりゃー！！」

マサルがフアングモンに殴りかかった。

ファンゲモン「人間如きが!!」

素早く避けた。

マサル「なにっ!？」

ファンゲモン「所詮は人間だ!ブラストコフィン!!」

激しい衝撃波を放った。

マサル「ぐはああああ!!」

「学校」デジタルフィールドが出現した頃

ヒロカズ「はあああああ・・・うん？」

ヒロカズが異変に気づいた。

ヒロカズ「おい!アレ、デジタルフィールドじゃね？」

タカト「本当だ!あそこは確か・・・新宿公園がある所じゃない？」

ジェン「そうみたいだけど・・・僕たちは行けないよ!」

ルキ「マサル達が居るじゃない!」

タカト「そうだね・・・」

ジェン「マサル達に任せよう!」

ルキ「そうね！」

ヒロカズ「ちえ！」

広川「おい！お前ら、なに話しているんだ！集中しろ！」

全員「は～～い！！！」

～新宿公園～

フアングモン「なんだ！そんなものか・・・人間に付いているデジモンはたいしたことないな！」

アグモン「なんだと～～！」

マサル（イクト！お前があのおオカミ野郎の気を引いてくれ！その間にオレ様が殴ってアグモンを進化させるから！）

イクト（わかった！）

フアングモン「茶番はそこまでだ～～！」

イクト「行くよ！ファルコモン！！！」

ファルコモン「うん！」

イクト「デジソウル・フルチャージ！！！」

ファルコモン「ファルコモン、進化!!」

ファルコモンのデータがはがれ新たなデータの成熟期へそして更に新たなデータが上書きされていく。

??「ヤタガラモン」

ヤタガラモン

世代：完全体

タイプ：妖鳥型

種：データ

必殺技：みかふつのかみ襦布都神

ファングモン「ほお〜！完全体に進化かあ〜！面白いブラストコフイン!!」

ヤタガラモン「おそい!!」

一瞬で素早く技を避けた。

ヤタガラモン「みかふつのかみ襦布都神!!」

ファングモン「なにっ！ぐはああああ!!」

後ろに派手に吹っ飛んだ。

マサル「よし！ナイスだ!!うおおおお!!」

バキッ

シュルルルル

マサルの手にオレンジ色のデジソウルが集まった。

マサル「行くぞ、アグモン!!」

アグモン「任せろ!!」

マサル「デジソウル・フルチャージ!!」

アグモン「アグモン、進化!!」

アグモンのデータがはがれ新たなデータの成熟期へ更に新たなデータが上書きされていく。

??「ライズグレイモン!!」

フアングモン「なに!?!こつちも!?!」

ライズグレイモン「これ以上、好きにはさせない!!トライデントリボルバー!!」

腕の銃から3連発発射した。

ドドドーン

フアングモン「ぐはああああ!!おのれ、人間如きに、ぐはああ

ああああー!!」

フアングモンはデータに分解され消滅していった。

と同時にデジタルフィールドも消えた。

マサル「終わったー!!」

〽学校〽

ヒロカズ「午前の部、終わったー!!あれ?デジタルフィールドが消えている・・・てことは・・・」

タカト「デジモンを倒したんだね!」

ジェン「そうみたいだね!どんな奴だったんだろう?」

ルキ「さあ〽あとで聞いてみれば!」

ヒロカズ「おい!ケンタ!今日、一度もしゃべっていないぞ!居ないかと思われるじゃないか!」

ケンタ「ゴメンゴメン・・・つい、集中してたものだから・・・」

タカト「あと、午後の部も頑張ろう!」

第42章 マサルとイクトの危険な休日（後書き）

今回の話は、ネタがなく、適当に考えたものでした・・・

こんな感じが続くのかな！？

次回も、面白くはしたいと思っています！！

お楽しみに！！

第43章 忍び寄る邪悪な影

タカト「ふわああああ・・・」

タカトはいつもと同じように起きた。

しかし、いつもと違うような気がした。

辺りを見渡してもいつもと変わらない部屋だった。

タカト「気のせいかな？」

ギルモン「あ！おはよう！タカト・・・あれ？どうしたの？怖い顔して・・・」

タカト「ううん、何でもない！」

夏休みも終わろうとしていた。

補習はすべて、昨日までで終わった。

久しぶりにゆっくりできると思っていた・・・

ピッピッピッピッピッ

急にデジヴァイスが鳴りだした。

タカト「なんだろう・・・？」

デジヴァイスにはマーキングが映っていた。

どうやら、ここへ来て欲しいらしい・・・

タカト「行ってみよう・・・」

タカトは家を飛び出した。

〈廃棄ビル〉

そこは、1週間後に取り壊しが決定したビルだった。

タカト「たしか、ここだったんだけどな・・・」

奥へと進んだ。

??「やっぱり来てくれたね・・・」

目の前から人が歩み寄ってきた。

しかし、その人を見た瞬間、タカトは驚いた。

目の前には自分が居たのだ。

タカト「なんで・・・僕が・・・」

タカト（?）「驚いているようだね・・・分からないようだから教えてあげよう！僕は君自身であり、君は僕自身でもある」

タカト「どういうこと?」

タカト（？）「つまり、もう一人に君だ！そして、僕は君の闇の心だ！」

タカト「や、闇！？」

タカト（？）「そう、君は闇など無いと思っているだろう！でも、人間は誰しも心に闇がある・・・」

タカト「そうか！だから朝、おかしいと思ったんだ！」

タカト（？）「分かったみたいだね・・・」

タカト「それで、闇の心の僕がなんのよう？」

タカト（？）「単刀直入に言おう！君を倒しに来た！」

タカト「な！？」

タカト（？）「その前に、君は想わないのかい？なんで、闇の心が抜け出せたのか・・・」

タカト「言われてみれば・・・」

タカト（？）「理由は簡単だ！君に憎しみを抱いている奴からある機械を使っ取り出したのさ！」

タカト「ま、まさか・・・」

タカト（？）「分かったみたいだね・・・」

タカト「ブラックグライモン？」

タカト（？）「その通りだ！理由が分かったならもう良いだろう！後は、彼に聞いてくれ！ブラックグライモン！」

??「おう！」

タカト（？）「ダーク・マトリックス・エボリユウション！」

ブラックグライモン「ブラックグライモン、進化！！！」

データがはがれ新たなデータが上書きされていく。

??「カオスデュークモン！！！」

そこには、黒で染まった。デュークモンが居た。

タカト「どうやら、やるみたいだね！ギルモン！」

ギルモン「任せてよ！」

タカト「マトリックス・エボリユウション！！！」

ギルモン「ギルモン、進化！！！」

データがはがれ新たなデータが上書きされていく。

??「デュークモン！！！」

デュークモン「所詮、貴様はタカトの闇の心・・・正義の力で浄化してくれる!!」

カオスデュークモン「やれるものなら、やってごらん!」

デュークモン「ロイヤルセイバー!!」

ガキーン!

カオスデュークモン「所詮はその程度か・・・」

デュークモン「バ、バカな!!これなら、どうだ!!ファイナルエリシオン!!」

カオスデュークモン「そんなもの我に効くか!」

ガキン!

あえなくガードされた。

カオスデュークモン「所詮はその程度か・・・今度はこちらから行くぞ!」

カオスデュークモンは魔槍「バルムンク」を構えた。

カオスデュークモン「デモンズディザスター!!」

連続攻撃を放った。

デュークモン「うわあああ!!」

第44章 闇の心VS光の心 自分に打ち勝て!!

デュークモン「ぐはああ!!」

カオスデュークモン「弱いな・・・バルバモンを倒して程のやつが・
・・」

カオスデュークモン

世代：究極体

タイプ：暗黒騎士型

種：ウィルス

必殺技：ジューデッカプリズン

デュークモン「おのれ・・・」

カオスデュークモン「トドメだ!ジューデッカプリズン!!」

デュークモン「ファイナルエリシオン!!」

二つの攻撃がぶつかり、押し合う。

カオスデュークモン「うおおおおおおおおお!!」

デュークモン「うおおおおおおお!!」

ドーン!!

真ん中で爆発した。

カオスデュークモン「くっ．．．」

デュークモン「くっ．．．」

デュークモン「こうなったら．．．うおおおおお！！ デューク
モン クリムゾンモード！！」

紅く輝くボディのクリムゾンモードになった。

カオスデュークモン「それがどうした？」

デュークモン「インビブルソード！！」

カオスデュークモン「デモンズディザスター！！」

ガキン、キン、ガキン．．．

槍と剣がぶつかり合う。

デュークモン「うおおお！！」

チッ

わずかに攻撃が擦った。

カオスデュークモン「擦ったぐらいで．．．うおー！！」

デュークモンC「避けたみたいだな・・・だがこれならどうだ！
はっ！」

一瞬にしてデュークモンCの姿は見えなくなった。

カオスデュークモン「な！素早いだと・・・」

キョロキョロと辺りを見渡している。

デュークモンC「インビジブルソード!!」

ガキン！

デュークモンC「ちょっとは、やるな・・・はああああ!!」

盾を押し返そうとした。

カオスデュークモン「な！力が強いだと・・・まさか・・・」

デュークモンC「はっ！」

カオスデュークモン「うお！」

盾が上へと押し返され、よろけた瞬間に・・・

デュークモンC「インビジブルソード!!」

カオスデュークモン「ぐはああああ!!」

まともに攻撃を喰らった。

カオスデュークモン「このオレが、負けるだと・・・」

デュークモンC「正義は闇に勝つ！闇に魂を売った者よ！ここで成敗する！トドメだ！！クオ・ヴァイデス！！」

デュークモン クリムゾンモードは、聖槍「グングニル」でカオスデュークモンを斬りつけた。

カオスデュークモン「ぐはああああああ！！おのれ・・・まあいい・・・今頃他の奴もお前の仲間と戦っているだろう・・・また、会おう！ぐはああああああ！！」

カオスデュークモンは分解され、ブラックグライモンがその場に倒れていた。

デュークモンCは究極体を解いた。

タカト「終わった・・・でも、なんで闇の心なんかが・・・抜け出したんだろう・・・」

ギルモン「さっき、あいつが言っていたよ！バルバモンが残した機械だって・・・」

タカト「うーん・・・あつ！お前の仲間と戦っているってあいつが言ったよね！ジェンとルキが危ない！！」

ギルモン「大丈夫だよ！」

ブラックグライモン「いててて・・・ここは・・・」

タカト「目を覚ました！ブラックグライモンはどうしてここへ来たの？」

ブラックグライモン「お前は！松田タカト！！なんでこんな所に！！」

タカト「覚えていないの？」

ブラックグライモン「たしか、どこから、『復讐はしないか？』と言う声が聞こえて・・・そこから覚えていないんだ・・・たしか・・・『したい』と叫んでからんだけど・・・」

タカト「ヨウコモン達は？」

ブラックグライモン「そうだ！あいつらは？復讐をしたいと一緒に叫んだから・・・」

タカト「探してみよう！何か分かるかも！？」

ギルモン「行こう、行こう！！」

タカト達は廃棄ビルを後にした。

第44章 闇の心VS光の心 自分に打ち勝て!!（後書き）

無事、闇の心を倒すことができました!!

実は、前回からの話は、次回作へ続く物語の始まりだったので・
・

さて、次回は、ジェンの闇の心が・・

どうなるんでしょうか!!

楽しみに!!

第45章 新たな闇の心

タカト達がデジヴァイスに呼び出されたとき

ちょうど、ジェンのデジヴァイスにも同じことが起きていた。

テリアモン「ねー行こうよー！新たな敵かも知れないよー早くー！
」

ジェン「まあまあ・・・何で反応しているんだろ？」

テリアモン「だからーそこに行けば分かるってー！」

ジェン「罠かも知れないだろう！」

テリアモン「じゃ、なんでデジヴァイスで呼び出せるんだよー！」

ジェン「はいはい・・・行こうか！」

テリアモン「だから、最初から言えば良いんじゃないか！」

ジェン達は家を出た。

～廃棄工場～

そこは、かなり前から使われていなくなった大型の工場だ。

大型の機械などを製造してたらしい。

ジェン「ここか・・・行こう!」

テリアモン「うん!」

ガチャ

工場の扉を開けた。

??「やつと来てくれたね・・・」

ジェン「誰だ!!」

??「僕は、君の目の前にいるよ!」

ジェン・テリアモン「え!?!」

目の前には、ジェンと瓜二つの少年が立っていたのだ。

ジェン(?)「どうやら、驚いているみたいだね・・・」

ジェン「誰なんだ!お前は!」

ジェン(?)「僕は、君自身であり、僕自身でもある!つまり・・・」

ジェン「つまり・・・?」

ジェン(?)「つまり、僕は、君の闇の心だ!」

ジェン「なんだって!？」

ジェン闇「人間には誰しも、闇の心がある!君には無いと思っているだろう!でも、あったんだな!」

ジェン「でも、なぜお前は、僕を呼んだんだ？」

ジェン闇「そりゃ、君に復讐をしたがつていた奴らがいてね、そいつらのある機械から、僕は生まれた。」

ジェン「僕ら?と言うことは他にも居るんだな!」

ジェン闇「ご明察!その通りだ!!今頃、ボコボコにされたいるだらうな!」

ジェン「貴様!」

ジェン闇「さあ、無駄話はここまでにして、本題に入ろうか!今日、呼んだのは、ほかでもない・・・君を抹殺に来た!!」

ジェン「くっ!戦うしかないのか・・・」

ジェン闇「ブラックガルゴモン!」

ブラックガルゴモン「・・・・・・」

ジェン「なぜ!ブラックガルゴモンが・・・」

ジェン闇「行くぜ！！ダーク・マトリックス・エボリュウション！
」

闇のジェンが黒いオーラに包まれていく。

??「ブラックセントガルゴモン！！」

セントガルゴモンの緑のボディではなく・・・

黒いボディが全身を覆っている。

闇の闘士ようだ。

ジェン「ちっ！行くよ！テリアモン！」

テリアモン「任せてよー！」

ジェン「マトリックス・エボリュウション！！」

テリアモンとジェンが融合して新たなデータが上書きされていく。

??「セントガルゴモン！！」

ブラックセントガルゴモン「さて、お手並み拝見と行きますかー！」

セントガルゴモン「ジェン！嘗められているよ・・・」

ジェン『焦るなよ・・・集中しよう！』

セントガルゴモン「うん！」

ブラックセントガルゴモン「行くぞ!! ジャイアントミサイル!!」

セントガルゴモン「やっぱり、同じ攻撃か・・・でも、本家の方が
すごいんだぞ!! ジャイアントミサイル!!」

第45章 新たな闇の心（後書き）

今回は、ジエンの闇の心です!!

さて、今回は、バトルと言つことになります・・・

闇の心を倒すことができるのでしょうか!?

次回にご期待を!!

楽しみに!!

第46章 ジェンVS闇のジェン 正義と悪（前書き）

選挙、無事終了しました！！

また、今日から更新を再開します！！

どうぞ、ご覧下さい！

それでは、46章、スタートです！！

第46章 ジェンVS闇のジェン 正義と悪

ドガンー！！

セントガルゴモン「どうだ！」

ミサイルがもろに当たった。

シュー

煙が上がっていた。

ブラックセントガルゴモン「全然大したことないな〜！」

セントガルゴモン「そ、そんな・・・もろに当たったはずなのに・・・」

ブラックセントガルゴモン「バーストショット！！！」

セントガルゴモン「バーストショット！！！」

ダダーン！！

ブラックセントガルゴモン「ちっ！相打ちか！」

セントガルゴモン「そうとも限らないぞ！」

ブラックセントガルゴモン「なっ！」

煙の中からセントガルゴモンが飛び出した。

セントガルゴモン「はっ！」

ドガッ！

蹴りを入れた。そして

セントガルゴモン「はあああ！」

パンチを入れた。

それも強力な・・・

ブラックセントガルゴモン「ぐはああああ！」

後ろに吹っ飛んだ。

ドガーン

後ろにあった廃棄物の山に突っ込んだ。

セントガルゴモン「どうだ！！」

ガラッ

廃棄物の山をかき分け這い出てきた。

ブラックセントガルゴモン「くっ！中々、良いパンチだな！」

セントガルゴモン「当たり前だ！ジェンの拳法は最強だぞ！！」

ブラックセントガルゴモン「ならば・・・ジェット！」

セントガルゴモン「えっ！？」

ブラックセントガルゴモンは高速で移動し、消えたように見えた。

セントガルゴモン「は、速い・・・！！ど、何処だ？」

ブラックセントガルゴモン「ここだ！！ジェットミサイル！」

スピードに乗って、後ろから、肩のミサイルをぶつ放した。

セントガルゴモン「ぐはああああああ！！」

今度はセントガルゴモンが廃棄物の山に突っ込んだ。

ブラックセントガルゴモン「弱いぞ！」

セントガルゴモンは廃棄物の山をかき分け這い出してきた。

セントガルゴモン「ま、まさか・・・こんな力があるなんて・・・」

ガチャ

ブラックセントガルゴモンは腕のミサイルをセントガルゴモンに突きつけた。

ブラックセントガルゴモン「ここまでだ・・・サラバだ！バースト

シヨ・・・」

セントガルゴモン「くっ・・・」

??「ファイナルエリシオン!!」

ドガンー!!

ブラックセントガルゴモン「ぐはっ!・・・だ、誰だ!？」

??「ジエン!大丈夫か!!」

セントガルゴモンは声の下方向を見た。

そこには彼のおなじみの顔があつた。

第46章 ジェンVS闇のジェン 正義と悪（後書き）

さ、寒いです・・・

外は雪がドカドカ降っています。

でも、シャーベット状の雪です・・・

1カ月くらい更新を途絶えていましたが、今日から更新を再開します！！

読者の皆様にはご迷惑をおかけしたかも知れません・・・

次回もお楽しみに！！

第47章 番外編 デジモン海賊団 紹介編（前書き）

時は、大海賊航海時代・・・

人々は幾多の困難を乗り越え、

この世界のどこかに埋まっている、世界最大の財宝を求め

今日も海に行く・・・

そして、この海賊団も、その財宝を求め航海中であつた・・・

（注 これは、デジモンです・・・

第47章 番外編 デジモン海賊団 紹介編

ザア~~~~

何処までも広がる青い海と青い空・・・

タカト「はあ〜」

思わず貯め息が出てしまう・・・

タカト

ティマー海賊団 船長

いつも、マイペース

リュウタ「何処まで行っても、海！海！空！空！ずっと、ワ〇ピー
スのオープニングか！〜」

リュウタ

ティマー海賊団 コック料理人

性格は、短気

料理は、プロ級

ドラコモン「まあまあ・・・」

ドラコモン

ティマー海賊団 乗組員^{クルー}

リュウタとコンビを組んでいる、自称：ツッコミ役料理を作れば、いつも、味見役。

これで、何回目だろう・・・

リュウタがこう叫ぶのは・・・

タカト「ジェーン！！次の島まで、どれくらい？」

ジェン「うん・・・あと、3日は掛かるかな？」

ジェン

ティマー海賊団 航海士

いたって、冷静

リュウタ「ぎゃ～～！もう我慢できない！」

ルキ「ちょっと、うるさいじゃない！！もう少し、静かにできないの？」

ルキ

ティマー海賊団 船医

少し、怒りっぽい・・・

レナモン「まあまあ・・・彼もイライラしているんだから・・・」

レナモン

ティマー海賊団 船医

ルキとコンビを組んでいる

リョウ「全く・・・これじゃ、静かに昼寝もできないよ!」

リョウ

ティマー海賊団 狙撃手

のんびり屋で、爽やかなオーラを放っている。

サイバードラモン「うるさい、うるさい・・・」

サイバードラモン

ティマー海賊団 狙撃手

リョウと常に行動を共にしている。

ギルモン「ギル?腹減った」

ギルモン

ティマー海賊団 操縦士

タカトとコンビを組んでいる。

性格はいてって穏やかだが戦闘になると闘争心を剥き出す。

テリアモン「ギルモン！まだ食事の時間じゃ無いよ！」

テリアモン

ティマー海賊団 船大工

のんびり屋でマイペース。

ジェンとコンビを組んでいる。

以上がティマー海賊団の乗組員だ。^{クルー}

リュウタ「紹介、長すぎでしょ！」

ジェン「大変だ！！巨大な竜巻が来る！！船を10時の方向へ！！このままだと、直撃するぞ！！」

ギルモン「了解！！！」

ギギー

船が、10時の方向へと向かった。

ジェン「ふう〜間に合った・・・危なかった・・・」

後ろには黒い雲がモクモクと上がっていた。

リュウタ「はあ〜昼飯の準備でもするか・・・ドラコモン！手伝っ

てくれ！」

ドラコモン「了解！味見は任せる！」

リュウタ「って！おめえはただ食いたいだけだろう！」

ドラコモン「まあまあ、気にしない、気にしない！」

ギルモン「腹減った〜」

ギョルギョル・・・

リュウ「た、大変だ！！」

物見台から、リュウが叫んだ！！

リュウ「か、海軍が・・・追ってきた！！数は3隻！！」

タカト「本当か！！野郎共！よく聞け！このまま、全速前進だ！！
砲撃してきたら、打ち返せ！！」

全員「了解！^{キャプテン}船長！！」

タカト「帆を張れ！」

タカト達の船は全速で動き出した・・・

第47章 番外編 〱 番外編 〱 デジモン海賊団 紹介編（後書き）

番外編のスタートです!!

次回も、お楽しみに!!

第48章 番外編 デジモン海賊団 クリスマス編（前書き）

何処までも続く青い海と青い空・・・

テイマー海賊団一行は、とある島にたどり着こうとしていた・・・

ルキ「ええ・・・さつきから島が見えてるわ！」

リュウタ「なにっ！！そう言うことは先に言わんかい！！例えばこうだ！！おい！」

ドラコモン「うおおおおおい、野郎共~~~~島が~~~~見えたぞ~~~~！！いやっほ~~~~い！！！」

リュウタ「だ！」

ルキ「なに、それ言わなきゃいけないの？バカみたい！」

リュウタ「なんだと！！それが普通じゃないか！！島が見えたら、テンション上がるだろう！！！」

タカト「あはははははは！！！」

リュウタ「えい~~~~い！笑うな！！！」

タカト「と、とりあえず、上陸だ~~~~！！！」

全員「おう~~~~~~~~！！！」

彼らは、島に船を着けた。

リュウタ「さてと、食材を調達に行ってくるか！ドラコモン！行くぞ！」

ドラコモン「ほいきた！」

タカト「よぉし探検だっ！！」

ギルモン「ギルモンも！」

ルキ「医療道具や薬品を見てこようと！レナモン、行くよ！」

レナモン「うん・・・」

リョウ「で、俺たちが船番か・・・って！弾薬庫の調達に行きけるのに・・・」

サイバードラモン「仕方がない・・・くじ引きの結果だ・・・」

リユウタ達は・・・

リユウタ「おゝ、えらく賑わっているなゝあゝそつか！今日は、クリスマス・イブか・・・じゃ、ご馳走だな・・・良い食材があると良いけど・・・」

ドラコモン「ケーキも忘れるなよ！」

リユウタ「大丈夫だ！オレが頼をふるって作ってやる！！」

リユウタ「お！生きの良い魚だね！」

魚屋の主人「！分かるかい！兄ちゃん！お目が高い！この魚は、今

日取れたての、ウイスキーサーモンだ！ちなみにオレが釣ってきた！」

リュウタ「へえ〜アンタが釣ったんかい・・・大きいな・・・よし、これくれ！」

魚屋の主人「へい！まいど！どうする、切るかい？」

リュウタ「いや、このままで貰おう！」

ドラコモン「あれ？リュウじゃない？」

リュウタ「え？本当だ！あのバカ、船番サボったな・・・でも、何やっているんだ？」

リュウ「へえ〜ほお〜・・・こりや良いな・・・ばあちゃん！これは何だい？」

武具屋のばあちゃん「お〜さすがお目が高い！それは、この島で、一番、売れている代物・・・その名も・・・」

リュウ「その名も・・・」

武具屋のばあちゃん「・・・『デストロイ・ランチャー』じゃ！」

リュウ「ほお〜これを船に取り付ければ・・・よお〜し！これを3丁くれ！」

武具屋のばあちゃん「へい、まいどー！」

テリアモン「うゝん．．．確か、リヨウが良い武器勝ってくるって
言ったし．．．それを取り付ける場所が必要か．．．恐らく大砲が
銃だから．．．じいちゃん！この木材、全部頂戴！！」

木材屋のじいちゃん「ふおっふおっふおっ．．．良かろう．．
・ 持って行きなされ．．．あんた、腕利きの大工だね．．．そうじ
やな．．．半額にしちゃろう！」

テリアモン「本当か！ありがとう！！」

リユウタ「いやゝ荷物を持つ奴が欲しくてねゝちようど良かった．
．」

リヨウ「だから何で、オレが手伝わなきゃいけないんだ．．．」

ドラコモン「気にしない、気にしない」

船に付いた。

リユウタ「おっ！みんな、もう帰ってきている．．．」

トンテンカン、トンテンカン．．．

リュウタ「おゝい！テリアモン！何作っているんだ？」

テリアモン「え？何って！武器置き場さ！」

リュウタ「ほゝ！まっ！頑張れよ！今夜はご馳走だ！」

テリアモン「マジか！よし、やってやるぞ！」

タカト「よし、全員そろったことだし・・・出航だ！」

暫くして・・・

リュウタ「よし・・・できた！！おゝい、飯だぞ！！」

ギルモン「うわぁゝすごい量・・・」

リュウタ「今夜は、クリスマス・イブだ！とっておきのフルコースだ！」

全員「いやっほゝい！！」

彼らは、料理を食べ始めた。

その頃、ある海軍の軍艦では・・・

海兵「オメガ大佐！！本部から、連絡です！」

オメガモン「そうか・・・わかった今行く！」

ガチャ

本部『今の状況は？』

オメガモン「先日、一隻の海賊船に出くわしたのですか、逃がしました・・・」

本部『逃がしました・・・じゃねー！なに、一隻の海賊船を逃してノコノコ、連絡を受けるな！』

オメガモン「はっ！すみません・・・」

本部『まあ、いい・・・ところでその海賊船の旗印は？』

オメガモン「それが・・・ドクロに・・・ゴーグルでした・・・」

本部『なにいい！！そいつは、本当か？』

オメガモン「ええ・・・それが？」

本部『彼らは、テイマー海賊団で、ルーキーだが、船長、『ゴーグルのタカト』に賭けられている賞金額は5千万\$の大物だ！！更にその一味もくせ者揃いだ！逃がすな！！』

オメガモン「それは本当で・・・分かりました・・・次こそは・・・」

本部『頼んだぞ!!』

オメガモン「まさか、あの海賊船が・・・」

オメガモンは、タカトの手配書を握りしめていた・・・

第48章 番外編 デジモン海賊団 クリスマス編（後書き）

なんか、クリスマスっぽくないですが・・・

クリスマスです！！

次回も、お楽しみに！！

第49章 お正月スペシャル（連絡）

タカト「皆さん！！新年、明けまして」

全員「おめでとございますー！！」

タカト「2011年がスタートしました！」

タカト「早速なんですけど・・・この小説は・・・」

全員「この小説は・・・？」

タカト「あと1回で終わりですー！！」

ベルゼブモン「なにiiiiiiiiいー！！」

ベルゼブモン「ほ、本当か？」

タカト「本当です！新年から変なこと言っているけど・・・本当で
すー」^{マッ}

ジエン「もうそんな時期か・・・」

ベルゼブモン「って、何納得しているんだよー！！」

ベルゼブモン「あと、番外編はどうするの？まだ完結してないじゃんー！」

タカト「あれで、終わりみたい・・・」

ベルゼブモン「本当で……？」

タカト「本当で……」

ルキ「次回作は？」

タカト「次回作なんですけど……ええ」

ベルゼブモン「どうせ、オレが主役か？」

タカト「違います！」

リュウタ「じゃ？オレか？」

タカト「それも、違います！」

ジエン「じゃ、誰？」

タカト「この中に、居ません！」

タカト「なんと、次回は……」

全員「なんと……？」

タカト「どうやら、デジモンが出てこないみたい……」

全員「なにiiiiiiiiい！！」

タカト「デジモンは一端休憩で新たな別のストーリーらしいんです

けど・・・」

リョウ「そのタイトルは？」

タカト「そのタイトルは・・・なんと・・・」

全員「なんと・・・」

タカト「まだ、未定です・・・！」

ガクッ

全員がズッコケた。

タカト「それでは、次回作の予告です！どうぞ！」

笑いあり・・・

冒険あり・・・

涙あり・・・

友情あり・・・

感動のストーリーが始まる・・・

2011年1月中旬、更新開始！！

「お前は、オレの仲間だろうがあああああああ！」

タカト「と、いう感じです・・・」

ジエン「これだけじゃ・・・わかんないな・・・？」

タカト「それでは、ちょっとだけヒントを・・・」

タカト「このストーリーは大人気のあのマンガを原作とした小説らしいです！詳しくは次回の最終回の最後で告知します！！」

ベルゼブモン「くやし～～～！！」

第49章 お正月スペシャル（連絡）（後書き）

ええ〜本当で次回が最終回です!!^{マッ}

次回作は、デジモンではないので、ご了承ください・・・

こちらの勝手ですがお許し下さい!

次回は、最終回・・・

お楽しみに!!

第50章 〱最終回〱 すべては僕らの未来のために（前書き）

なんだかんだ言って、もう最終回です・・・

次回作のタイトルが決定しました！！

後書きで告知します！

泣いても笑ってもこれが最後です！！

どうぞ！！

第50章 最終回 すべては僕らの未来のために

ブラックセントガルゴモン「だ、誰だ!？」

デュークモン「間に合ったみたいだな！」

ブラックセントガルゴモン「なっ!お前は・・・なぜここに!ブラックグラウモンがいたはずなのに・・・」

デュークモン「こいつのことか？」

デュークモンの後ろからブラックグラウモンが姿を現した。

ブラックセントガルゴモン「なぜ、お前がそこに!？」

ブラックグラウモン「気づいたんだ!俺たちはこいつらにもう、怨みは無いはずだ・・・!俺たちに依頼した奴はもう、いないんだから!確かに最初は、負けたことは悔しかったさ!でも、闇に心売るのはダメなんだ!自分が弱いだけなのに、自分をだましていたんだ!さっき、デュークモンに言われて目が覚めたんだ!こんなのただの八つ当たりだったってことを!」

ブラックセントガルゴモン「だ、黙れ!!僕は、そう言うことを聞きたくない!自分の住むようにやらせる!」

闇の心(そうだ、裏切り者言うことなど耳を貸すな!今は目の前にいる奴を倒すんだろう!)

ブラックセントガルゴモン「そうさ!まずはこいつだ!お前は、そ

の後さ！」

ブラックグラウモン「そ、そんな・・・！」

デュークモン「もう、お前は、ブラックセントガルゴモンなんかじゃない、闇に心売ったただの復讐者だ！」

ブラックセントガルゴモン「さて、邪魔が入ったが、続けようか・・・！トドメだ！ジャイアントミ・・・」

デュークモン「ロイヤルセイバー！！！」

ブラックセントガルゴモン「ちっ！邪魔をする気か・・・なら、まずはお前からだ！バーストショット！！！」

デュークモン「闇に心売った者よ！このデュークモンの聖なる剣で浄化する！ロイヤルセイバー！！！」

ブラックセントガルゴモン「ミ、ミサイルが外れた・・・」

デュークモンの槍が突き刺さる。

ブラックセントガルゴモン「ぐはっ！ここまでか・・・」

シューーン

ブラックセントガルゴモンを包んでいた闇のオーラが消え、ブラックセントガルゴモンは成熟期へと退化した。

タカト「ふゝ終わった！大丈夫？ジェン？」

ジェン「ああ、何とかね！テリアモンは？」

テリアモン「も〜まんた〜い！大丈夫だよ！」

タカト「そうだ、あいつは？」

ブラックガルゴモン「いててて・・・ここは・・・？あれっ？なん
で、傷ついているんだ？確か、僕は・・・」

ジェン「どうやら、闇の頃の記憶は無いみたいだね！」

タカト「ブラックグラウモンもそうだったから・・・！あっ！そう
だ！ルキは？」

ジェン「今頃、ルキも・・・」

??「私が、どうかした？」

タカト・ジェン「えっ!？」

工場の扉から姿を現した。

タカト・ジェン「ルキッ！」

タカト「君も、戦ってたんじゃない・・・」

ルキ「ええ・・・でもすぐ、ケリはついたわ！どっかの誰かさんと
は違ってね！」

ジェン「アハハハハ・・・」

タカト「ブラックガルゴモン」なら、知っているかな？この黒幕のこと・・・？」

ジェン「聞いてみるか！」

ジェンは、そう言うブラックガルゴモンの所へ歩み寄って、質問を何点かしていた。

そして、戻ってくると、タカトにどうだった？と聞かれても、首を横に振った。

タカト「収穫はなしか・・・」

ジェン「これでもう、恐らく、しばらくは平和だよ！たぶん・・・」

タカト「長かった、戦いももう、終わるか！」

ルキ「ところで、アンタ達、宿題、やったの？明日から学校よ！」

タカト「あっ！」

ジェン「あっ！」

タカト・ジェン「やっていない・・・」

ルキ「ヤレヤレ・・・」

タカト「急いで帰ってやらないと！！ギルモン！帰ろう！」

ギルモン「あ！待ってよ〜タカト〜！」

ジェン「僕としたことが・・・テリアモン！帰るぞ！」

テリアモン「あつ！待ってよ〜！！よつと〜！ふ〜」

テリアモンはジェンの頭の上に乗った。

ジェン「お、重たいんだけど・・・」

そう言いながら、走っていった。

ルキ「レナモン！わたしたちも行くよ！」

レナモン「うん！」

3人は、廃棄工場を後にした。

ーデジタルワールド??ー

??「まさか、あの3人がやられるとは・・・次の作戦を立て直さないとな・・・」

コツコツ・・・

??「さて、準備をするか！新しい世界のために!!」

フハハハハハハ・・・

その後・・・

マサル達は、気が変わり、早々と自分達の世界に戻っていった。

心配ならしい・・・

タカト達は、補習も無事終わり、普段と変わらない生活を送っていた。

デ・リーパーの時と違うのは・・・

タカト「ただいま!!」

ギルモン「あゝお帰り〜!!」

そう、デジモン達がいることだ!

今後は、デジモン達と交流を深めようとしていると山木は言っていた。

そう、僕らの未来のためにも・・・

近い将来、デジモン達と仲良く共存できる世界をタカト達は望んでいた・・・

E
N
D

第50章 〱最終回〱 すべては僕らの未来のために（後書き）

無事、終了しました！！

早速ですが、次回作の告知です！！

どうぞ！！

←

2011年1月10日スタート！！

話題の人気マンガが原作！！

「ONE PIECE Another World」

主人公、ウォーズ・D・ドラとその仲間達との冒険のストーリー！！

笑いあり！

友情あり！

涙あり！

感動あふれるドラマがスタート！！

ドラ「俺は、絶対見つけてやる！！」
”ワンピースひとつなぎの大秘宝”を！！
そして、海賊王になるんだ！！」

2011年1月10日スタート！！

おたのしみに！

————
という感じです！

なんか、大げさになってしまいました・・・

次回作でも、よろしくお願いします！！

最後に一つだけ・・・

デジモンシリーズは4月に新たなストーリーで更新するかも知れませんが！？

そのときは、またどうぞ！！

では、次回作で！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5797n/>

デジモンテイマーズ×セイバース

2011年1月8日19時11分発行